第1章　学校資料の魅力！

▶あなたの学校に，博物館はありますか？　村野正景

▶授業を魅力的にする学校資料　八田友和・鈴木康二

▶博物館に行ってみよう！　和崎光太郎

第2章　こんなに広がる，学校資料の可能性

▶学校資料を学校に展示しよう！ 学校内歴史資料室をつくる　羽毛田智幸

▶学校資料を授業で使ってみよう！　八田友和・鈴木康二

▶学校資料を地域の施設で展示しよう！　井尻智道

第3章　学校資料の保存と整理

▶何を保存・整理したらいいのか　和崎光太郎

▶どうやって保存・整理したらいいのか　和崎光太郎

みんなで活かせる！学校資料

学校資料活用ハンドブック

2019

みんなで活かせる！学校資料

学校資料活用ハンドブック

［編集］村野正景・和崎光太郎

みんなで活かせる!
学校資料

学校資料活用ハンドブック

目次

はじめに …… 4

第1章

学校資料の魅力! …… 9

第1節　あなたの学校に，博物館はありますか? …… 10

第2節　授業を魅力的にする学校資料 …… 30

第3節　博物館に行ってみよう! …… 38

コラム1　教員を目指すみなさんへ
—大学資料館に行ってみよう! …… 48

第2章

こんなに広がる，学校資料の可能性 …… 53

第1節　学校資料を学校に展示しよう!
—学校内歴史資料室をつくる— …… 54

第2節　学校資料を授業で使ってみよう! …… 60

コラム2　調べ学習と学校資料 …… 76

コラム3　学校資料を使った「書道」の授業
—社会科だけじゃない— …… 80

第3節　学校資料を地域の施設で展示しよう! …… 82

第3章

学校資料の保存と整理 …… 103

第1節　何を保存・整理したらいいのか …… 104

第2節　どうやって保存・整理したらいいのか …… 110

コラム4　これからの学校資料
—学校統廃合と学校資料— …… 122

コラム5　自然災害と学校資料 …… 126

おわりに …… 130

参考・引用文献 …… 134

索引 …… 140

写真掲載や調査にご協力いただいた機関・方々 …… 144

学校資料保管場所リスト …… 146

編者・執筆者一覧 …… 150

連絡先 …… 150

はじめに

村野正景

この本を手にとってくださり，ありがとうございます！

本書は，学校資料が目の前にある学校の教職員や児童・生徒，学校運営等に関わる地域の方々や卒業生が，資料を学校で具体的・実践的に活用できるようになることを目指したハンドブックです。このような本は，本書が初めてのものでしょう。

ただし急いで大事なことを付け加えます。本書は完成されたものではありません。本書は，本書を読んでくださった方々と，ともに育てるための素材です。読者からのご批判やご教示をいただきながら，校正や加筆をおこなうための稿本が本書です。ぜひとも，皆さんと一緒に，これが定本だと評価される書へと成長させていきたいと思います。

さて，学校資料には大いなる潜在力があります。それが本書の一貫した主張です。ご存知のとおり，現代社会では一人の人間の成長にとって学校の影響力は大きく，その意味で学校資料の潜在力が発揮されるならば，私たちの生きる社会そのものにとっても大きな貢献を期待できることでしょう。

しかし，その一方で潜在力と同じくらい本書の執筆者たちが強く共有するのは，学校資料の廃棄・散逸への危機感です。学校統廃合や教育内容の変化など資料を取り巻く環境は，いま大きく変わっており，もはや待ったなしの状況だと認識しています。

そこで本書の執筆者たちは，2017年4月に学校資料研究会を発足させ議論を重ねるとともに，それぞれが自らの現場でできることに挑戦してきました。そして「こうしたら成果が期待できる」という経験や知見を，本書にまとめました。

本書は読者が読みやすいよう，３章構成をとりました。

第１章は，学校資料の魅力がいま現在の時点で，すでに発揮されている場を紹介します。それは第１に学校現場です。学校資料は，整理・展示されることで，学校の魅力を増し，学校教員や児童・生徒，さらには卒業生や地域の人々にとってオススメの場となっています。第１節では，そんな場を学校博物館と称して，各地の小・中・高の事例を紹介します。大学の学校博物館はコラム１で補います。それから，学校の授業でも資料は効果的に役立っています。学校資料で授業はどう変わるのでしょうか？第２節ではこの問いに答えます。第３節では，学校外で資料の魅力が語られている場に着目し，その具体例として地域の施設の活動を紹介します。

第２章は，これから学校資料の魅力を高め可能性を広げたいという方々の期待に応えるための章です。第１章に対応して，第２章第１節では学校博物館を小学校に設置あるいは再整備する横浜市歴史博物館の「博物館デビュー支援事業」の紹介です。現在も進化を続ける当事業から学校で博物館を作る過程やその意義がわかるはずです。第２節は，資料を授業で活用するための指導案を６つ提案します。「こういう資料がこう使えるのか」「自分だったらこうできるな」そんなアイデアの源になるでしょう。あわせてコラム２で調べ学習への活用事例，それにコラム３で資料を活用した書道の授業も紹介します。第３節は，南丹市立文化博物館の事業です。地域博物館がこうすれば学校資料の魅力を引き出せるのか，読者はそんな刺激を受けるはずです。

第３章は，おそらく多くの学校で資料の活用の前に直面する資料整理と保存について，現実的な対応策を丁寧に紹介します。学校での作業は，地域の博物館や図書館とは条件が異なります。そこで学校に即して効果的且つ大胆な作業として，第１節では主に分類，第２節では保存から整理までを紹介します。最後にコラム４では学校統廃合，コラム５で自然災害と，学校資料の消失の実際にいかに向き合うことができるかを考えます。

巻末には，学校での資料の保管場所リストを掲げました。資料がないと思われている学校では捜索場所リストと言い換えられるかもしれません。まずここから本書を開くのもありでしょう。

さてここまで，とくに説明せずに，学校資料という言葉を用いてきました。学校資料とは何でしょうか？学校資料と聞いて，もしかしたら，古い教科書や卒業アルバムなどを思い浮かべる方が多いかもしれません。しかし本書で言う学校資料はもっと幅広いもので，想像力を働かせると，どんどん広がるものと思います。

学校資料を定義するとしたら，漠然と感じられるかもしれませんが，「学校に関わるあらゆるモノやコト」を指します。それは学校内にありますし，学校外にもあります。また学校資料には有形のものも無形のものも，動産も不動産も，さらに景観も含みます。無形のものなどは，本書では十分に触れていませんが，学校特有の音楽やダンス，あるいは教員の教え方も該当するでしょう。時代も古いものから現在まで，普段の学校活動で生成されているものすべてがあてはまります。

こうした学校資料は，誰か一人の視点では大事なものでなくとも，他の誰かにとって意味を持つものもあります。言い換えれば，学校資料は個人の視点ではなく，できるだけ多様な人々の視点によってこそ，価値が明らかにされていくものだと思います。その価値は多様なものとなるでしょうから，それを知ることで，学校資料への今までの印象が変わることもあるでしょう。つまり，個々人がそれまで持っていた資料に対する価値観に揺らぎが生じる瞬間です。それは，各人の価値観の豊かさを増すことにつながるはずです。

本書は，学校資料の活用をうたい，活用を現実的且つ具体的に様々な場で実践することを手助けするための書です。しかし，本書がそこにとどまらず，資料の活用を考えることを通じて，価値観の幅を広げることにつながれば嬉しく思います。資料の価値の多様化が，さらに資料を扱う人の成長もうながす。学校という現代社会を形作ってきた場で生成された資料の真の価値は，そこにあるはずです。

大それたことまで申し上げました。本当に，ここで述べたことが実現できる書なのか。まずは，自由に関心をお持ちになったところからお読みください！

【学校資料の価値】

「こんな価値があると指摘されています」

学校史的価値:
学校の年史，沿革，特色，そのうつりかわりなどがわかる。

教材的価値:
現在の授業や学校活動での教材として利用できる。

教育学的価値:
教育の変遷や今の教育のあり方を考えられる。

部活動的価値:
地歴部などの部活動を行うためのきっかけ･資源となる。

地域史的価値:
地域の姿や記憶を物語る。

学術的価値:
人類の歴史を研究する考古学･歴史学や民俗学など学問の素材，研究素材となる。

学問史的価値:
考古学や科学などの学問の歴史がわかる。

産業史的価値
教材作成などに携わった産業界のことがわかる。

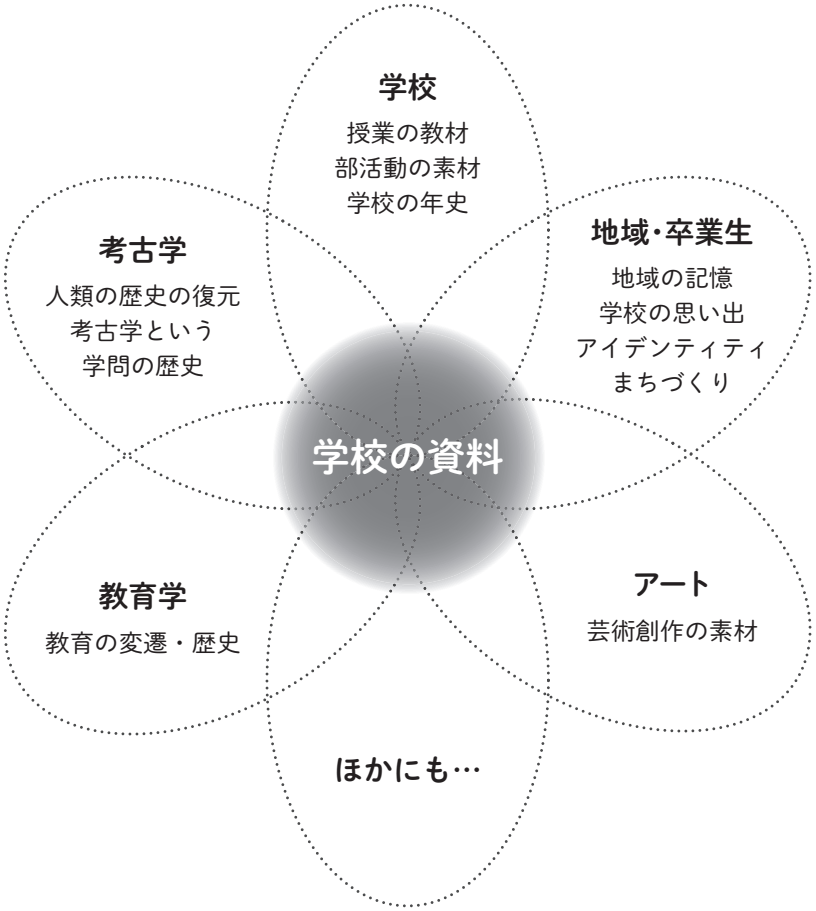
象徴的価値:
卒業生や教員，地域住民などの思いやアイデンティティ，
記憶の拠り所，シンボルとなる。

社会関係的価値:
資料の調査が資料に関わる人々を連帯し関係構築をうながす。

アートな価値:
学校の美的景観づくりや現在のアートの素材となる。

ほかにも…

学校資料の多様な価値のイメージ



第1章

学校資料の魅力!

第1節

あなたの学校に，博物館はありますか?

村野正景

はじめに

学校の先生にとって，学校で一番のオススメの場所はどこですか？学外の訪問者があったとき，ちょっとそこに誘ってしまうような面白い部屋は？あるいは生徒さんたちが，行きたがるところってありますか？それは応接室？職員室？保健室？図書室？それとも学校の博物館!?

1 それぞれのオススメの場所―学校にあることで生まれる価値―

筆者（村野）が京都の峰山高校を訪ねた際に紹介されたのは，入口すぐの展示ケースで，伝説の名キャッチャー野村克也監督を記念する展示でした（図1）。福岡中央高校では，学校記念資料室に通していただき，東京オリンピックで聖火ランナーをつとめた梶谷とよみさんのユニフォームと運動靴（図2），そしてアニメ「サザエさん」の作者・長谷川町子さんの資料を紹介してもらいました。いずれも学校の卒業生なのだそうです。有名な方ゆかりの品が間近に見られるなんて，本当に羨ましい！

図1 峰山高等学校

図2 福岡中央高等学校

卒業生に芸術家がいらっしゃると，校長室や応接室，廊下や階段の壁に美しい絵画が掛けられていることもありますね。兵庫県の甲南高校・中学校には，日本の抽象画の先駆者・長谷川三郎さんの作品を飾るギャラリーもあります。学校のホームページで紹介するほどですから，自慢の部屋なのでしょう。卑近な話かもしれませんが，芸術品があると学習環境や学校のイメージが良くなるような気がします。

でも，芸術品だけじゃありません。教科書や写真，アルバムを大切にしまってある場所，書庫や倉庫だって，その歴史的重みが，学校の重厚感を出すのに一役買うことでしょう。筆者は同僚の書棚を見ることが好きです。それは同僚の研究状況やこれまで歩んできた道のり，その人の性格までも見えてくる気がするからです。学校の倉庫にも同じことが感じられて，敬意を払わずにはいられません。地域の方々が管理されている京都の銅駝（どうだ）小学校（1947年からは中学校）ゆかりの品々の収蔵施設（図3）は，まさにそんな場所でした。

ほかにも京都の鳥羽高校の応接室には，何事でもないかのように第1回甲子園優勝校の旗が，同じく京都の平安高校の考古クラブの部屋（図4）にはクラブ活動で発掘した縄文時代や古墳時代の遺物がきちんと並べられていて，先生たちがどこか気恥ずかしそうに謙遜しながら，でも自信をもって紹介してくださったことはとても印象に残っています。同時に，かつての生徒たちの熱意とそれを誇る学校の自負が感じられました。

図3 銅駝史料館

図4 平安高等学校

このように，学校内の記念室や応接室に倉庫，あるいは展示ケース，廊下や壁だって，そこに作品や資料がある，所在することでオススメ候補になることがわかりました。そんな様々な記録や記憶を収蔵し展示している場所，これは“博物館”と言うべきはないか。大げさに聞こえるかもしれませんが，私たちは，本気でそう思っています。

そんな博物館が，皆さんの学校にはありませんか？もしも無いならばどうですか，欲しくないですか？「いや，欲しいけど無理！」「そんな部屋を持っている学校なんて特別な学校でしょ」「受験のための授業では特に必要ないんだよ」，少々否定的な声が聞こえてきますが，どうしてどうして，学校自慢や単にオススメの場所ではなく，日本の学校には授業やそのほか様々な学校活動，あるいは地域社会に対しても直接役立ち，学校や地域のかかえる多様な課題を解決しながら，学校やそれを取り巻く環境をもより良いものにしようという興味深い博物館すら結構あるのです。どんな博物館があるのでしょうか？少しそれを覗いてみませんか。

2 たくさんある学校博物館―もともと特殊な設備ではない！―

実は，博物館の学芸員や研究者にすらあまり知られていませんが，学校博物館は，明治時代に近代的学校制度が出発してからほどなくして誕生しています。そして1917（大正6）年の文部省による全国調査によれば，当時の全博物館数が128館で，そのうち50館が学校博物館であることが判明しました（図5）。なんと約4割が学校博物館だったのです。当時は博物館自体の数が少なかったのは確かですが，どれほど学校で必要と認識されていたかをうかがうことができます。

学校博物館は決して特殊な存在ではないのです！この後も学校博物館は日本各地で設立が続けられます。学校博物館の実数は記録がなかなか残らないので，はっきりと数を把握するのは大変困難ですが，それでも学校博物館は何度か設立ピークを迎えつつ，継続的に作られて現在にいたることは間違いありません。

図5 大正6年の全国の博物館における学校博物館の割合（文部省1917を基に筆者作成）

3 学校博物館設立の契機―思い立ったらすぐできる！―

何が博物館づくりのモチベーションとなったのでしょうか？きっかけはもちろん様々です。学校設立の周年事業の一環というパターンが比較的目立ちますし，戦前には政府が資料購入のお金を出したため施設の設置も進んだということもありました。近年でも人口減少に伴い余裕教室が生まれ，その有効活用のため，学校博物館へのリニューアルを推奨されました。ほかにも，地域住民や卒業生から地域学習のためにと昔の道具や写真などが寄贈されて，それを学校の宝物として保存・展示するということは，それこそ明治時代から現在でもみられます。

しかし，このような外的要因がなくとも，教員の内的・自発的思いによって設立された場合もありました。記念事業や政府の推奨は記録に残るため目立つだけでのことで，むしろ教員の発案よるものが多かったはずです。

実際，筆者が資料調査をさせていただいた学校の中には，「面白い資料だから，すぐに既存の小さいケースでも見つけて，学校入口にでも展示しようと思います」という社会科の先生もおられました。これぞ，まさに学校博物館誕生の瞬間です！思い立ったら，すぐに設立できる。それが学校博物館の良いところで，特徴でしょう。

学校博物館は何も新しく資料購入から開始する必要はありません。既存のモノの価値に気づいた時，新たな価値を見出した時，それはいつでも学校博物館誕生の契機になります。そして資料の存在場所の設えや環境を少しばかり変えて整えたとき，それが，学校博物館が生まれた瞬間になるはずです。

4 戦前の事例―学校博物館が盛んだったころ―

学校博物館が生まれたら，次は成長させてあげたいですよね。それでは，もう少し具体的に学校博物館の事例をのぞいてみましょう。折角ですから，少々時代を遡って様子をみてみましょう。

「あれ，今の教育と違うでしょ？参考になるの？」そんな疑問が生じたかもしれません。確かにその通りですし，戦前の教育には戦争を導いた教育としての批判も当然あるでしょう。だからと言って，それに蓋をしてなかったことにすることが良いはずはないですし，批判を踏まえた上で慎重に現在へ役立てようという目で見ると，意外と参考になります。

それになによりも，学校博物館の設立や活動が今以上に盛んだった時期ですから，そこに学校博物館の面白さが秘められているかもしれません。では具体的にどんな学校博物館だったのか慎重に扉を開いてみましょうか。

5 萌芽期の学校博物館―収蔵施設が展示室を兼ねればよい―

授業と学校博物館の密接な関係は，明治時代後期にはやくも見られます。この時代，実物教授がたいへん主張されました。本物の資料や模型標本によって直観で生徒の理解を進めようという教授方法です。このとき授業で必要な器械や模型標本などが学校で取り揃えられ，それを保管し，同時に生徒がそれを観覧し学習できる施設として学校博物館が作られました。

現在も学校には社会科準備室や倉庫，収蔵室などの名称で，様々な教材を保管する場所があると思います。そこを保管場所にしか使っていないことはありませんか？明治時代も似た状況だったようで，生徒がみられるように整理しようという論文すらあります。言い換えれば，収蔵・保管施設のままでよいから，少し教材類を整理すれば展示室も兼ねられる！というアドバイスです。このアドバイス，もしかしたら今にも通用するように思うのですが，いかがでしょうか？

図6 京都市桃園尋常小学校の地歴準備室 昭和10年(1935)
準備室に考古遺物の模型や人形類が陳列されている

6 郷土学習と郷土室―アクティブ・ラーニングの場となる可能性―

大正時代から昭和時代初期には郷土学習，いまでいうところの地域学習が盛んでした。背景の一つには，戦争や経済恐慌で農村部をはじめ日本各地が荒廃し，その復興のために地域ないし郷土のことを学び，課題を把握し，解決策を見出そうと皆が取り組んでいたことがあります。そのため，学校として郷土調査・研究の実施，郷土講演会の開催，郷土遠足・見学，郷土誌や郷土読本の刊行などをおこない，なかでも郷土学習によって得た様々な情報や資料を収蔵・展示する郷土室の設置は中心的取り組みでした。なお郷土室といっても，部屋一つの場合もあれば，教室の一角を整えたものもありました。

郷土室（学校博物館）をどう学習へ役立てるのか？それは，郷土室で展示資料から地域の現実的・具体的姿を学ぶ，教員が実物資料をもってリアリティ溢れる授業をおこなうといったこともあったようですが，なによりも強調されていたのは，生徒が資料を自分自身で収集し，整理し，調べ学習をおこない，展示するまでに至る過程そのものでした。生徒の作業，それが学校教育にとって最も必要ということです。どうでしょう，今のアクティブ・ラーニングの祖型を，いやもしかしたら先進的姿すら見出せるのではないでしょうか。しかも学びの目標が地域の課題解決への具体的貢献ですから，教員も生徒も切実だったことでしょう。

7 展示資料の扱い方―少しくらいの破損は十分忍ぶべきではないか―

「いや作業が入ることは良いけれど，資料が破損する心配はなかったのか。」「生徒が壊してしまったらどうしよう。」現在でもそれを恐れて実物を授業に用いることには躊躇があると聞きます。

この点で，当時の教員の言葉は参考になります。曰く，「生徒が学習問題の解決にあたり，自力的に博物館に出入りし，実物や標本，絵画，模型類などに依って研究するのが学校博物館の大部分の使命だから，資料の少しくらいの破損や，少しくらいの経費のかかることは，十分忍ぶべきではないか」という態度でした。

筆者も賛成ですし，それで問題ないでしょう。学芸員が破壊を推奨していると大げさに捉えられると少々困りますが，はっきり言って死蔵よりも断然マシです。それに生徒が自分自身で収集し，学習によって何かが理解できた資料なら，その資料はどうしたら壊れるか，どう扱うべきかは，生徒自身の学びの過程で，かなりわかってくると思われます。まさに机上の理解ではない，実体験による学習効果がそこにあります。

図7 鴨沂（おうき）高校所蔵の模型標本類

8 学校が集めた資料はどんなもの?

学校が収集したものは，なにも高価な美術品だけではありません。生徒でも入手可能な絵葉書や地図，生活用品，身近な自然の産物，地元の商品，地域の古い書籍や文書などです。これなら今でも十分収集可能でしょう。現在の学校の所蔵品にも，こうした資料をみかけますが，郷土学習で生徒や教員が学習に意味あるものとして集めてきたかもしれません。学校博物館を始めるための資料がないと思っておられる方も，今一度，絵葉書や写真がないか調べてみると，きっと何かが見つかるはずです。

これに加えて，大事にされたのが生徒の制作物です。生徒の学習成果を教室などで展示することは今でもよく見かけますが，やはりそれも博物館での展示資料として重要なものの一つです。

図8 鴨沂高校所蔵の絵葉書

図9 同地図類

図10 同写真類

図11 同写真類

9 展示・利用の様子―今できる工夫は何か?―

資料はどう展示したのでしょう。図12と図13は，和歌山県の師範学校の郷土室の様子です。教室をまるまる一つこれに充てています。壁には絵葉書がずらっと並び壮観です。綺麗に並べるのは意外と工夫が必要ですし，一人では無理ですから，展示作業も教員や生徒たちの共同作業だったことでしょう。ただ写真の事例は，少々展示位置が高くて，子供達がうまく眺められたのか気にはなりますが。絵葉書は一つ一つボードに貼り付けたのでしょうか。きっちり収まっていて感心します。絵葉書を見学するときは，ボードごと壁から下ろして使ったのかもしれません。また壁や棚には種類ごとに分類されて資料が並んでいます。資料の説明板も付いているようです。生徒たちが中央の机に向かって熱心に書き物をしています。きっと調べ学習の成果が説明板でしょう。自分の学びが，きれいな部屋に展示されること，すなわち学校博物館に展示されることは，異論はあるかもしれませんが，生徒のモチベーションを高めたことでしょう。資料があって，自分たちが決めた基準で整理してあって，「それが何か」が説明されている，博物館展示として十分です。

図12 和歌山県師範学校の郷土室（第三室） 昭和9年（1934）

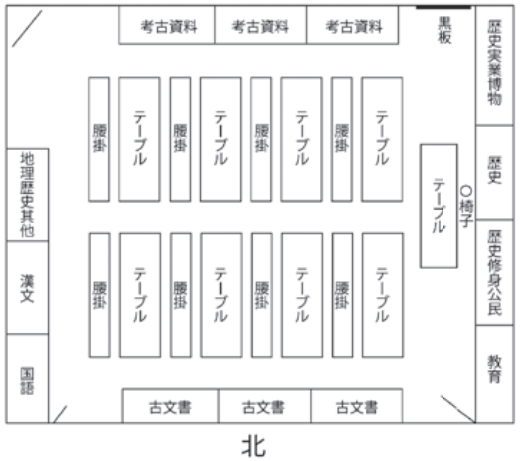


図13 和歌山県師範学校
郷土室（第三室）の平面図

山梨県の師範学校では，こうした部屋をなんと6つも設けました。筆者が調べた限りでは，最多です。各部屋にテーマを設定して，それに沿った資料や作品が保管・展示されました。この事例は，当時でも注目を浴びていました。校舎全体にわたって郷土室を設けたことが特徴的で，第一郷土研究室に隣接した廊下や階段の壁沿いに，学習成果を第一室と関連づけ陳列し，これを第二室として名付け，展示機能を与えています（図14）。

図14 山梨県師範学校第二郷土研究室 昭和5年（1930）
廊下や階段も活用して郷土室の一部とした

10 学校博物館の利用者は誰か?―教員・生徒に限る必要はない―

こうした学校博物館はどのくらい利用されたのでしょうか。かつては，教員や生徒の利用に限らず，地域住民などに開放した館が比較的多くありました。来館者数は，少ないものだと年間数百人程度，多いところだと，年間5万人なんて記録もあります。自治体立の地域博物館もびっくりの数字です。この記録は1927（昭和2）年から1936（昭和11）年にかけて，福井県の小浜小学校で達成されました。その秘訣は，学校博物館を一般公開していたこと，さらには地方の物産品を希望者には委託販売したという，通常よりももう一工夫加えたところにありそうです。学校所在地域の方々から，地域振興の重要な役割を担う施設の一つとして，学校博物館は期待されていることがうかがわれます。

とはいえ，やはり利用の主役は教員や生徒です。博物館空間の授業は，生徒らに深い印象を与えるようです。実際，筆者がある小学校の学校博物館を調査していた際，中学生が地域学習をしたいからと言って来館していました。小学生の時の授業が記憶にあったため来たとのこと。現役にも卒業生にも利用者がいます。ほかにも教員が数校から集まる研修に使っているところもありますし，授業参観日や運動会，学園祭，オープンキャンパスのときに限って一般公開するパターンもよくあります。学校博物館は，学校紹介にとても役立つそうです。なにしろ他校と一味違った紹介が可能になりますから。保護者や生徒の眼に訴える力は博物館ならではです。

11 種類も多い学校博物館―できることをやる―

もう少し事例の紹介を続けましょう。学校博物館の種類はとても多様です。長野県の泰阜（やすおか）北小学校は，美術の学校博物館，つまり美術館をつくりました。埼玉県の松山高校は学校史を紹介する学校記念館，岡山商業学校は産業博物館，宮城県の小牛田農林高校農業博物館，岩手県の広田水産高校は水産博物館，福岡県の糸島高校は郷土博物館という名の考古資料の博物館，気仙沼水産高校はなんと水族館を設けました。考古学が専門の私にとって，生物まで扱う水族館はもはや驚き以外のなにものでもありません。とはいえ，いずれも学校の特色を活かした館と言え，それぞれの学校で使いやすい博物館を作っているとも言えるでしょう。できることをやる，それが学校博物館です。

筆者は京都で学芸員をしていますので，京都の学校には何かとご縁があり，その際に学校博物館も訪問しています。その中から具体的事例をもう少し紹介しましょう。

図15・16は，野村監督の記念展示をしていた峰山高校のもう一つの展示ケースです。ケースはどの学校にもあるような賞状やトロフィーを展示するのと同じもので，図書館へ向かう廊下の壁際に設置されています。かつて戦後すぐに皇国史観から解き放たれ自分たちで歴史を解明するんだという取り組みが日本全国の学校でおこり，特に高校による発掘調査が進みました。この高校も考古関連クラブの活動が盛んで，それによって収蔵した古墳時代の須恵器や弥生土器，それに模型類が展示されています。既存のケースを活かしていること，そして図書館の前という選地がとても良いですよね。

もう一つ同じケースが，こちらは階段脇に設置されています。少々薄暗く感じますが，実はここも生徒たちが頻繁に行き来する場所で，筆者が調査で少々スペースをいただいていると生徒たちの通行の邪魔になってしまったほどでした。なお生徒たちに質問すると「何だろうと前からずっと気になっていました」とのこと。図書館前の展示ケースと同様に，生徒たちが普段から目に触れ，関心をよせてくれている展示であることがわかりました。それに，殺風景になりがちな場所の雰囲気を変えてい

図15 図書館前の展示ケース

図16 階段脇の展示ケース

ることも展示の力だと思います。

次は，京都市の岩倉北小学校の「岩倉ふるさと館」です。ここは京都市教育委員会の地域教育推進協力校の取り組みとして2001（平成13）年に校長先生が中心となって設置されました。この小学校は京都の洛北という地域にあります。小学校裏には岩北山があり，かつては松林でした。そこで過去の姿を紹介し，そして現在の樹木の写真をとって，植生紹介のためドングリを集めて展示したり，山仕事の道具の実物を簡単な解説つきで紹介したり，児童たちが学習することを前提にそのためのスペースを室内に設けたりしています。

土地の特色がたいへんよく理解できる学校博物館です。自然の質感のある椅子や設えはさらに学びの雰囲気を良くしています。地域学習をここでおこなえば，その効果のほどがうかがわれます。

図17「岩倉ふるさと館」入口

図18 山仕事の道具の展示

図19 岩北山の樹木の写真

図20 学びの場所

今度は，京都市の伏見板橋小学校の「いたはしくら」です。伏見といえば，昔から酒造業や水運で栄えてきたところで，商業の町です。そこでここでは，かつての店先の様子が復元され，商家で用いた秤や帳簿やお金，お土産で有名な伏見人形，古い教科書などを保管，展示しています。店先の復元もすごいですが，さらに「いたはしくら」の入口のしつらえは目を奪われます。2002（平成14）年の開校130周年記念で余裕教室をリニューアルし開館しました。「旧家や生活用具が日毎に消えていく中，学校の沿革を語るもの，時代を生き抜いた人々の生き方を語る品々を意識して残す。そしてこれからもそうしたものを持ち寄っていただき，充実・発展させる。」それがこの学校博物館の設置目的です。取組の内容や考え方を含め，一つの理想的モデル館ではないでしょうか。なお常時一般公開しているわけではないため，ご注意ください。

図21「いたはしくら」入口

図22 室内の様子

図23 伏見人形ほか

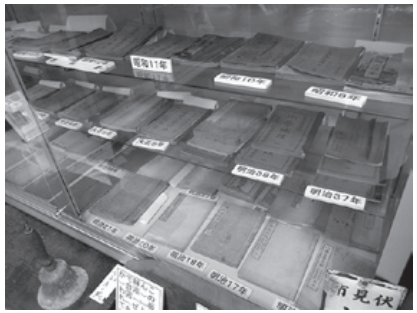


図24 古い教科書類

12 学校博物館の運営―みんなで学校の「宝」を護り，使う―

こうした学校博物館は誰が運営しているのでしょう。教員？いえいえ，教員だけというパターンのほうがむしろ少ないように思います。その際たるものが水族館です。教員や生徒だけではとても無理です。しかし，神奈川県の間門（まかど）小学校は，付属水族館を1958（昭和33）年の設立以来，今日まで運営し続けてきました。いったいどうやって？その答えは，地域住民の協力です。半世紀以上にわたる長い年月の間には閉館に追い込まれたこともあったそうですが，地元の漁師の方々，ボランティア団体の「間門小学校アクアミューズ・フレンドリークラブ」の方々，地域の方々の協力で現在に至っています。

他館でも，博物館を授業参観日や運動会などの日に開放して一般の人々を受け入れる際には，教員だけではなく，生徒も一緒に対応したり，卒業生や地域の方々が対応を引き受けてくださったりという上手な役割分担がみられます。まさに学校を皆で支えていこうという地域連携の源になっています。

地域住民ないし組織の協力は，誤解を恐れずに言いますと，今ではむしろ容易に得られるのでは？なぜなら，学校運営協議会あるいはコミュニティ・スクールの仕組みが，文科省の後押しもあって，急速に広まっているからです。もちろん，内実はいろいろと難しい問題も抱えていると切実な意見を存じ上げているので，軽率な発言だったかもしれません。しかし，折角ある仕組みですから，学校運営協議会の役割の一つに学校博物館の運営協力はあっても良いのではないでしょうか。実際，京都の山科にある複数の小学校では，この地域在住の有志の人々で結成された「ふるさとの会」が学校付近の地域文化財の保存・啓発をおこなう一環で，学校運営協議会としても参画し，学校博物館のための資料収集や博物館整備をおこなっています。伏見板橋小学校では，学校博物館の鍵は学校が管理するけれども，資料の説明板づくりや整理，博物館公開日の対応は，地域住民が担っています。

いかがでしょう。今度試しに話題にしてみては？説明資料が必要でしたら，私たちからご提供します！

13 学校博物館の工夫―学博連携，情報教育―

最後に，これができたら一層面白さが増すのではないか，という工夫を紹介しておきます。

（1）カタログとガイドブック

福岡県の糸島高校の学校博物館は，なんと博物館法の定めるところの条件も満たした「博物館相当施設」です。博物館法の規定では，相当施設の条件として，資料や専用施設とともに，学芸員に相当する職員の設置，年間100日以上の開館，一般公開が示されています。同校はこの要件を満たす措置をおこなったのです。学校の努力は並大抵ではありませんね。本当に驚嘆に値します。そんな学校には学校博物館の運営や活動にいくつも工夫が見られます。

例えば，カタログ（資料台帳）を作って資料管理をしやすくしたこと，博物館案内と資料紹介等を兼ねたガイドブックを刊行したことです。とりわけガイドブックはコンパクトな作りで親近感のわく装丁ながら，な

図25 糸島高校の郷土博物館ガイドブック

かなか濃い中身を持っています。その執筆は糸島高校の教員と福岡市博物館の学芸員によるものでした。

いわゆる「学博連携」はその教育方針が示されてから，30年近く経ちます。ただ，そのメニューは博物館での体験学習，学芸員の出前講座などの定番が生まれた一方，他方ではそれ以外の新メニューがなく，マンネリ化の感をぬぐえません。その意味で，学校博物館と地域博物館が連携するというあり方は，面白い新メニューとなりそうです。実は，このメニューを横浜市歴史博物館は「博物館デビュー支援事業」として，全国に先駆けて事業化しています。その中身は本書の第2章第1節で説明があります。今後，横浜に続く博物館が出てくれば，各地の学校博物館もさらなる活性化が期待できます。ぜひ，博物館学芸員に学校関係者の皆様から声かけをお願いします!!

（2）デジタル博物館

滋賀県の彦根東高校には史料館があります。1987（昭和62）年に創立100周年を記念して校舎が建てられ，創立時からの資料の保存，展示を行っているため，史料館と呼ばれています。収蔵資料は，昔の教科書，旧制中学校のころからの卒業アルバム，藩校時代の和綴本などです。とりわけこの学校の面白いところは，資料をホームページで紹介していることです。

昨今の教育ではICTを学び，活用する授業が重要度を増してきました。これからの人材育成に欠かせないからです。そのような流れと関係づけながら，この学校では創立140周年記念事業の一つとして史料館が所蔵する史資料をデジタル化し，ホームページ上の「デジタル史料館」で順次公開していくことになりました。

ある学校が所蔵する資料を別の学校で借りて授業に使うことは，不可能ではないし，実際やっている教員もいるけれども，実物の貸し借りは難しいと聞いたことがあります。しかし，デジタル資料ならば問題ありません。それに学校博物館の施設自体を開放しなくても，デジタル資料ならば自由に閲覧可能です。それにご存知のように，現在の学校教育のカリキュラムには，「情報教育」が設定されています。自校のデジタル資料を扱えば，身近な題材として生徒も学習しやすいのではないでしょうか。実際，京都府の鴨沂高校では，日本史や総合学習の時間に学校所蔵の絵葉書を読み解く授業をおこない，同時に学校所在資料の調書作成をおこなった上で，そこで見出した情報を情報教育の授業でエクセルに打ち込む。それによって，エクセルの扱い方の学びをおこなうという非常に意欲的な取り組みがおこなわれています。数年後には，ここにもデジタル学校博物館が生まれているかもしれませんね。

情報教育は今後もますます重要になってくるでしょう。その技術的な学びにも，理論的な学びにも，学校博物館やその収蔵資料を活用することは実現可能性も，実施効果性も高いのではないでしょうか。

おわりに

さて，いかがでしたでしょうか。学校博物館というと，なかなかイメージがつきにくかったと思いますが，少しは具体像の理解が進んだでしょうか？「そういえばあんな資料があったから，ちょっと既存のケースを少し整理して，展示してみようかな」「余裕教室はあることだし，学芸員や地域の方々と相談してみようかな」「生徒が写真や文章以上に本物から学ぶ機会をつくることができるかも」そんなふうにもしも思っていただけたなら，とても嬉しいです。その思いが実現し，学校博物館が学校の中のオススメの場所になれば，さらに嬉しく思います。ぜひ学校博物館を一緒に成長させていきましょう。

なお他にもたくさんの学校博物館がありますが，ここだけではとても紹介しきれませんでした。参考までに，今でも存在する学校博物館を表にしたのでご覧ください。表には『全国博物館総覧』などで情報が公開されている学校博物館のみ書きました。日本全国のいたるところに学校博物館が設立されていることがわかります。これでも，ごく一部にすぎませんが。

次の節では，学校博物館などで収蔵・保管している資料について，今度は授業での活用にフォーカスして，その魅力的あり方を紹介します。

表1 学校博物館一覧表

都道府県	学校	施設	設立年
兵庫県	妙法寺小学校	附属自然教育学習園	1949
北海道	北海道家庭学校	北海道家庭学校博物館	1950
新潟県	長岡高等学校	記念資料室	1951
長野県	泰阜北小中学校	美術館→泰阜村立学校美術館	1954
福岡県	糸島高等学校	郷土博物館	1955
神奈川県	間門小学校	付属海水水族館	1958
長野県	今井小学校	郷土資料室	1963
岡山県	興陽高等学校	農機具展示室	1963
富山県	高岡工芸高等学校	付属青井記念館美術館	1963
富山県	伏木小学校	伏木子ども風土記・学校博物館	1963
長野県	新山小学校	郷土室	1965
山口県	長門高等学校	民俗資料室	1965
千葉県	関宿幼稚園	保育資料室→関宿博物館	1966
奈良県	帯解小学校	郷土資料室	1967
千葉県	川間小学校	郷土資料室	1968
山口県	萩高等学校	学校資料館	1969
広島県	高陽中学校	高陽町郷土館	1969
埼玉県	松山高等学校	学校記念館	1970
宮城県	鬼首小学校	民俗資料室	1971
岐阜県	江東小学校	江東民俗資料館	1972
宮城県	小牛田農林高等学校	斎藤報恩農業記念館	1973
大分県	下堅田小学校	民俗資料室	1974
茨城県	雨引小学校	大和村増淵茂民俗記念館	1974

都道府県	学校	施設	設立年
千葉県	豊富小学校	皇宮郷土資料館	1974
宮城県	入谷小学校	志津川町民俗資料館	1975
愛知県	杉山小学校	杉山町郷土資料館 (杉山校区郷土資料館)	1975
神奈川県	田奈小学校	田奈郷土資料館	1975
北海道	藻岩北小学校	郷土博物館	1977
北海道	元町北小学校	資料室	1977
北海道	定山渓小学校	定山渓郷土博物館	1978
北海道	手稲西小学校	鉱山の部屋	1978
兵庫県	甲南高等学校	貴志康一記念館	1978
兵庫県	甲南高等学校	長谷川三郎記念ギャラリー	1978
岡山県	高松農業高等学校	資料館(旧岡山県立農学校堆肥舎)	1979
東京都	第四中学校	国分寺市文化財資料展示室	1980
奈良県	吉野高等学校	林業博物館	1980
埼玉県	浦和学院高等学校	シラサギ記念博物館	1985
神奈川県	別所小学校	別所村郷土館	1986
奈良県	畝傍高等学校	史料館	1986
徳島県	脇町高等学校	付属芳越歴史館	1986
滋賀県	滋賀県立彦根東高等学校	史料館	1987
宮崎県	檍中学校	郷土資料室	-
広島県	福山誠之館高等学校	記念館	-
福岡県	豊津高等学校	育徳館	-

注:『日本博物館沿革要覧』(野間教育研究所, 1981年),『博物館・情報検索事典』(丹青社, 1986年),『全国博物館総覧』(日本博物館協会, 1986年, 加除式),『歴史資料保存機関総覧』(増補改訂版, 地方史研究協議会, 1990年)から作成

第2節

授業を魅力的にする学校資料

八田友和・鈴木康二

はじめに

この節では，授業をする上での学校資料の魅力をお伝えします。

第２章２節では，学校資料を複数取り上げて，具体的に活用方法を模索しています。授業モデルをご覧になりたい方は，先にそちらをお読みください。

1 授業での活用について

ここでは，学校資料や学校博物館を活用した授業実践として４つの事例を紹介することで，学校資料の魅力を浮かび上がらせます。

（1）学校内郷土資料室を活用した昔のくらし調べ

まず，校内の郷土資料室（前節で紹介した“学校博物館”の一種です。主な所蔵品が地域の民具や玩具などのいわゆる郷土資料であるものを指します。）を活用した授業実践を紹介します。校内に郷土資料室が設置されている学校については，資料館で保存されている資料を用いることが一般的かと思います。ここでは，横浜市の中学校で行われた授業実践を取り上げます。

ここで取り上げる実践は，最初の授業において自分たちが住んでいるまちのこと，昔のまちのことで知っていることを発表させています。次時においては，校内の郷土資料室に行き，昔の道具を見学したり（図1），道具の使い方を調べるという，調べ学習を行っています。その後，１つの資料を取り上げ，昔の生活を体験し，地域の人にもインタビューを行っています（図2）。最後に昔と今を比較するような年表を作成する実践も行っています。

図1 校内資料室の見学

図2 昔の生活体験

この授業の特徴として，校内郷土資料室を核とした，主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の実現が図られていることが挙げられます。生徒たちは，校内資料室や学校資料を活用して，実際に見学し調べ，体験する過程で自ら問題意識をもって学ぶことができています。

（2）京都文化博物館と京都府立鴨沂（おうき）高校の取り組み

（1）では，校内にある郷土資料室を活用した実践を紹介しました。とはいっても，校内に郷土資料室がある学校は稀で，ほとんどの学校には，郷土資料室は設置されていないでしょう。しかし，「学校内博物館がない＝学校資料がない」ということにはなりません。なぜなら，校長室や社会科教材室を中心に学校のあらゆるところに眠っている可能性が高いからです。

その事例として，京都府立鴨沂高校での実践を紹介します。同校の京都文化コースは，授業の一環で学校資料を活用しています。また，同コースでは，フィールドワークや学外活動を積極的に取り入れており，京都や国内外の文化への関心を高めつつ，課題解決型学習や学習成果の発信に取り組むことを目的としています。その一環で学校資料を扱う授業を，京都文化博物館と協力して行っています。その授業では，同校が明治以来の歴史のなかで収集・保管してきた資料のうち，未整理の資料の目録作りを行っています（図3）。しかし，ただ目録を作るだけでなく，「資料の概要学習→資料の調書作成→展示解説」という段階を踏んでお

図3 鴨沂高校と京都文化博物館の連携授業の様子

り，学校資料の概要を知ると同時に，外部に展示解説というかたちで発信することにも挑戦しています。

この授業の特徴として，「資料の概要学習→資料の調書作成→展示解説」という学習過程が学芸員の仕事内容に似ており，授業を通じて自然なキャリア教育が実践できている点が挙げられます。また，授業を通じて学校資料に対する理解を深めるだけでなく，明治以来の京都の歴史を学ぶことにもつながっているといえるでしょう。

（3）学校資料を活用した博学連携による歴史授業の実践

ここで取り上げる実践は，学習院高等科教員の會田康範氏が生徒たちに行ったものです。

この実践では，生徒たちが年間を通して歴史系博物館と連携し，学校資料を用いて「展示会づくり」を行い，歴史叙述がどのようにして成り立っているのかを体験する授業となっています。

「展覧会づくり」の対象として，生徒の身近にある実物や非現用の学校資料，資料館収蔵資料を取り挙げています。具体的には，授業で利用されてきた実験用具や標本，記念メダルなどを取り上げ，生徒1人が1点ずつ担当し，調査・研究を進めるという内容です。

この授業の特徴として，博学での学校資料の活用が挙げられます。学校の教員は，全員が資料の取り扱いや教育的価値に精通しているわけではないので，学芸員など外部の専門家のアドバイスを受けながら学校資料を用いることは，有意義なことです。また，学校の年間指導計画に歴史系博物館の活用を位置付けていることも，事業をスムーズに行う上で重要であったと思います。

（4）クラーク記念国際高等学校での実践

（1）～（3）の授業実践は，学校内に博物館が設置されていたり，学校資料を多数保有したりしている場合，あるいは博物館の全面的なバックアップを受けて学校資料を活用している事例です。では，比較的新しい新設校ではどのような実践を行うことができるのでしょうか。ここでは，筆者（八田）の勤務校であるクラーク記念国際高等学校（以下，クラーク高校）での事例を紹介します。

クラーク高校は，1992年に開学した高等学校です。校長は，登山家で有名な三浦雄一郎氏です。80歳を過ぎても登山を続ける挑戦者としての姿が，クラーク高校の行動指針である「夢・挑戦・達成」を体現しています。そんな三浦校長の姿は，生徒たちの再出発（リスタート）を応援するにふさわしい姿だと考えています。人物学習の一環として三浦校長の姿を学ぶことで，生徒たちのリスタートを応援する授業を全5時間で計画しました。この授業では，学校が所蔵している三浦氏の登山風景のパネルや写真などの資料を用いました。

■ 授業の流れ

構　成	内　　容
1時間目	「三浦校長ってどんな先生？」 三浦校長について，知っていることを発表させる。その後，パソコンや図書で調べる。三浦校長もかつて不登校を経験したが，そこから夢に向かって挑戦し続けた人生の先輩であることに気付かせる。
2時間目	「三浦校長の履歴書をつくろう！」 調べたことをもとに，三浦校長の履歴書をつくります。ここで，三浦校長の写真やパネルを使用しました。
3・4時間目	「三浦校長を紹介するキャプションを作成しよう！」 三浦校長を紹介する展示を考えよう！三浦コーナーの設置
5時間目	「自分の夢・挑戦・達成は？」 →　三浦校長から学ぶ夢・挑戦・達成。 自分の夢は？それに向けて何に挑戦しますか。

2 校外での活用について

学校資料が活用されているのは，授業だけではありません。学校内外で広く活用されています。ここでは，具体的な事例として，「博物館デビュー支援事業」「全国高等学校考古学名品展と全国高等学校考古学フォーラム」「京都市考古資料館での取り組み」の3つを取り上げ，整理します。

（1）横浜市の博物館デビュー支援事業

前節でも紹介された博物館デビュー支援事業とは，横浜市歴史博物館が展開している事業です。事業は主に，「学校内歴史資料室のリニューアル」と「博物館に来てもらうキッカケづくりとしての街頭紙芝居」の二つに分けられます。ここでいう“博物館デビュー”とは，「これまで一度も博物館に行ったことのない子供たちや，普段はほとんど縁のない人を博物館に迎えるための支援や基礎づくりのこと」を指しています。このような人たちが博物館を身近に感じる工夫の一つとして，学校内歴史資料室に保管されている資料の整理，展示やレイアウトの見直しをおこなうことによって，子供たちに学校内という身近な場所で博物館に親しんでもらう事業を行っています。2018年10月現在，この事業により横浜市立の9小学校の学校内歴史資料室が開室・リニューアルされています。

図4　資料の洗浄・整理

図5　リニューアル後の学校博物館

（2）全国高等学校考古名品展と全国高等学校考古学フォーラム

全国高等学校考古名品展とは，九州国立博物館が中心となり行っている展覧会です。この展覧会は，①かつての高校生の考古学研究活動が紹介される機会の確保，②現役高校生の研究発表の場を確保し，考古系や歴史系クラブの活性化を図ること，③高等学校所在資料の活用の機会の増加を図ること，を目的として開催されています。

具体的には，全国各地の高等学校から，学校内で保管している資料を博物館が借用し，考古・歴史系クラブの活動内容とともに，博物館に展示します。2014年から2018年までの5年間で，22都道府県31校の考古資料と活動が紹介されました。

考古名品展の図録にも記載されていますが，「学校所在資料を取り上げること自体は目新しいことではないが，国立博物館が全国を対象に企画したこと」に，この名品展の大きな意義を感じます。

また，展覧会と同時に，全国高等学校考古学フォーラム（2017年度からは，全国高等学校歴史学フォーラム）を開催しています。このフォーラムでは，高校生が日頃調査・研究を行っている，広い意味での歴史学の成果を，ポスターにまとめて発表しています。これにより，自分たちの活動の成果や学校が所蔵する資料を広く社会に発信できると同時に，同じ分野に興味をもつ他地域の高校生と情報交流・意見交換できる場の確保につながっているといえるでしょう。

図6 全国高等学校考古学フォーラム2014の様子

（3）京都市考古資料館での取り組み

京都市考古資料館では，2011（平成23）年度から「大学のまち京都・学生のまち京都」の特性を活かして，発掘調査や京都市内の大学・高等学校における「研究・教育」の成果紹介を目的として，大学や高校との合同企画展を開催しています。ここでは，龍谷大学付属平安高等学校・中学校（以下平安高校）の事例を紹介しましょう。

平安高校は，京都市に所在する創立百四十年を超える私立学校です。同校の考古学クラブは，1950（昭和25）年に地歴クラブの活動として行われた発掘調査をきっかけに発足しました。初代顧問は考古学界の権威，故坪井清足（きよたり）氏が就任し，その後も田中琢氏や田辺昭三氏など日本考古学界を代表する研究者が顧問に就任されています。そんな環境に恵まれたなかで，子供たちは発掘調査を行い，考古資料やデータの蓄積を行ってきました。つまり，平安高校は膨大な考古資料を保有するのと同時に，全国でも有数の学校資料を保有している学校ともいえるでしょう。

2016年12月～2017年1月に開催されたその合同企画展では，滋賀県大津市に所在する石山貝塚など，かつて考古学クラブが調査し，現在も同校に保管されている出土品・考古資料を，考古学クラブの歩みと共に，考古学クラブの遺跡発掘調査成果やクラブ活動について紹介しつつ，併せて校内の遺跡から出土した平安京東市の遺物なども展示されました。この展示の特徴として，学校資料だけが展示されるのではなく，学校資料と学校やクラブ活動の歴史が同時に展示された点が挙げられます。また，学校資料が外部の博物館で展示された点も，開かれた学校づくりや新しい博学連携のかたちとして貴重な事例ではないでしょうか。

図7　生徒による展示の様子

3　学校資料の魅力―学校資料で授業はどう変わるのか―

ここまで，7つの事例を取り上げ，授業や校外における学校資料の活用についてみてきました。これらを踏まえて，学校資料を用いることで，授業はどのように変わる・変わり得るのか，について整理しておきます。

1つは，主体的・対話的で深い学びの実現に役立つ点です。ここで紹介したすべての実践は，子供たちが受身となる授業はなく，学校資料を媒介に子供たちが積極的に授業に参加できるものばかりです。

2つ目は，校外への学習に発展するケースが多い点です。今回取り上げた実践はいずれも，子供たちは学校資料を調査・発信する過程で専門家のアドバイスを聞いたり，博物館（学芸員）の協力を仰いだりしています。ここからも，学校資料は，学校と社会を架橋するような取り組みに発展させるだけの魅力を秘めているといえます。

3つ目は，何といっても学校のもつ魅力や価値を再発見できる点でしょう。普段何気なく通っている学校の歴史や学校資料を調べる過程で，学校や学校資料を大切に扱おうとする心や，学校やその地域への愛着を深めるきっかけにもなると思います。

従来の授業は，教室という閉鎖的な空間のなかで，教員が教科書という素材を用いて，授業を行うことが主流でした。しかし，今回みてきたように，そこに学校資料という素材を加えるだけで，子供たちが主体的に調べるきっかけになり，さらにその学習の目を校外へと向けられるようになる可能性をも秘めています。あわよくば，子供たちは，教室という空間を飛び出し，社会との関わりをもちながら学習を進めることさえできるかも知れません。

学校資料は，いろいろな可能性を秘めています。そもそも歴史資料として充分に保存し継承すべきモノであることは言うまでもありません。ですが，それ以上に，今を生きる子供たちが，今と向き合う力を育むための素材として活用されることこそが，学校資料の持つ魅力を，最大限発揮させることになるのではないでしょうか。

第3節

博物館に行ってみよう！

和崎光太郎

はじめに

これまでは，学校資料と学校とのかかわりについてのお話でした。この節では，「実際に学校資料が展示されているところを観てみたい」，「実際に学校資料の魅力に触れてみたい」という方のために，学校資料が展示されている博物館を紹介します。

博物館の展示室は，大きく分けて常設展示室と企画展示室があります。常設展示室は，博物館の「顔」ともいえるところで，館のコンセプトに基づいて，いつもほぼ同じ展示（常設展）を観ることができます。企画展示室は，文字通り企画展を開催する場所なので，企画展によって（つまり時期によって）展示内容が変わります。企画展は，特別展や展覧会と言われることもあります。

1　歴史博物館に展示されている学校資料

（1）常設展

自治体単位の歴史博物館では，たいてい常設展示室で学校資料が展示されています。江戸時代のコーナーには寺子屋，藩校（武士の子が行く学校），私塾などの資料が展示され，明治・大正期のコーナーには小学校の初期の姿にまつわる文字資料や教科書，石盤（せきばん）・石筆（せきひつ）（主に明治期に使われたノートと鉛筆）などが展示され，昭和期のコーナーには懐かしさを感じさせてくれる子供の写真や教科書などが展示されていることが多々あります。

浜松市博物館（静岡県）の常設展示室は，その代表的な事例といえるでしょう。江戸時代のコーナーでは寺子屋で使われた手習いの手本や机，

書見台が展示されており，資料を展示するだけではなく当時の寺子屋の雰囲気が伝わるように工夫されています（写真①）。明治時代のコーナーでは，「教育制度の変遷」という簡潔なパネルとともに，明治期の修業証書や教科書が展示されています（写真②）。来館者は，両者を比較することで，明治初年前後での学校や教育（学習）の変化を知ることができます。さらに戦後のコーナーには，昭和の家電とレトロな教科書が同じ展示台の上に並べられており（写真③），来館者はここで1950年代・60年代のくらしを知ると同時に，教科書が明治期に比べると大きく変わったことを知ることができます。これらの展示内容は，同館編集・発行の『新版　図説浜松の歴史』（2008年，A4判オールカラー100頁，800円）と『博物館資料集15　戦前の学校』（2005年，A5判オールカラー33頁，200円）にも掲載されています。

写真①

写真②

写真③

写真④

名古屋市博物館の常設展示室には，明治維新期のコーナー（幕末維新の尾張）から明治中期のコーナー（名古屋市の成立と近代産業）に入る際に，学校の校門から入るような仕掛けがあります（写真④）。この門は，旧制第八高等学校（現在の名古屋大学の一部）の正門の複製で，実物は博物館明治村の正門として健在ですから見たことのある方も多いかと思います。少し進むと，大きなパネル写真と10冊以上の教科書，石盤やクレヨンなどが展示されており，そこには中学校の歴史教科書でおなじみのいわゆる「墨ぬり教科書」もあります（写真⑤）。さらに進むと，林間学校のパネル写真や学童集団疎開の資料が展示されており，近代以降の学校の姿について展示資料を通して学ぶことができます。これらの展示内容は，同館編集・発行の『常設展「尾張の歴史」ハンドブック』（2003年，A4判オールカラー56頁，700円）にも掲載されています。

岐阜県博物館（関市）の常設展示室は，「郷土の100年」（近代のくらしと文化）コーナーのうちの一角がすべて学校資料の展示になっています。壁には近代以降の教育史年表と多くの写真パネルが展示され，ケースの中には石盤・石筆やランドセル，筆箱，運動足袋（1950年代まで使われた運動靴のような足袋）などが展示されています（写真⑥）。同館は特に「自然展示室」の標本・剥製（はくせい）の展示が圧巻で，しかも子供も大人も楽しめるようになっています。みなさんの学校の理科室に眠るむかしの標本や模型を活用するときには，同館の展示から非常に有意義なヒントが得られるでしょう。

以上が，常設展における学校資料の展示です。この3館に共通していて，しかもここに紹介できなかった各地の歴史博物館の多くにも共通しているのが，学校資料が主に「昔のくらし」の展示と同じ区画に展示されているということです。これは，単に他に展示する場所が無いといった消極的理由でそうなっているわけではなく，日本が学校の力で近代化し，近世後期以降は学校が我々の生活や家族のあり方を大きく変えてきたという歴史的事実を物語っているのです。つまり，学校資料無くして我々の歴史は「展示」し得ないのであり，これは学校教育や生涯学習での歴史の学習にも学校資料が必要であることを物語っているのです。

写真⑤

写真⑥

最初に紹介した浜松市博物館の最寄り駅である浜松駅は品川駅・新大阪駅のどちらからでも新幹線で80分ほど，浜松駅から博物館まではバスで約10分です。名古屋市博物館は名古屋駅から地下鉄で17分，岐阜県博物館は最寄りのインターチェンジから車で５分ほどです。いずれも好立地で，しかもどの博物館も学校資料以外の展示も充実している上に４歳児から楽しめる工夫がされているので（特に岐阜県博物館の「自然展示室」と「みんなの部屋」は必見です），ぜひ行ってみてください。

（2）企画展

企画展で学校資料が展示される場合は，それぞれの企画展のコンセプトに沿った資料が選ばれます。自治体単位での学校資料をメインにした企画展は，1980年代から先駆的に取り組んできた京都市（後述）以外の各地でも，筆者（和崎）の知っている限りでは2000年代から開催されてきたようです（大津市歴史博物館や浜松市博物館など）。ここでは近年の事例として２つの企画展を見てみましょう。

南丹市立文化博物館（京都府）では，「平成の大合併」で誕生した現在の市域を「大合併」前の地域別に区切って，学校資料の特別展が開催されました。企画展の担当

写真⑦

学芸員によると，「大合併」の頃から各地で学校統廃合が進み，地域同士の関係が変わっていっていたことが，開催のきっかけとなったそうです。2015年に特別展「学校のあゆみ 園部地区編」, 2016年に特別展「学校のあゆみ 八木地区編」, 2017年に特別展「学校のあゆみ　美山地区編」（写真⑦）という具合に，１年で１地域ずつ開催され，どの展示もとても見応えのある内容でした。地元の方々にとっては，自分と地域（故郷）という，切っても切れない結びつきが子供のころの記憶とともによみがえり，また自分の地域（故郷）の歴史の再発見もあったことだろうと思います。この3回の特別展は，すべて図録が刊行されているので，展示が終わってしまった今でも多くを学ぶことができます（第1章第2節参照）。

2016年と2018年には，和歌山県立紀伊風土記の丘でも学校資料をメインにした企画展が開催されました。企画展「学校にあるたからもの」です。「学校にあるたからもの」がなぜ博物館で展示されることになったのでしょうか。そのきっかけは，2011年の紀伊半島大水害に際しての小学校蔵の貴重な農具の損失です。それ以降，館の学芸員が学校に出向いて「たからもの」の調査を進め，その成果としてこの企画展の開催にいたりました（このあたりの経緯はコラム「自然災害と学校資料」をご覧ください）。紀伊風土記の丘での取り組みは，資料の現地活用の支援を軸にした取り組みとは異なり，資料のレスキューという意味合いが強いのが特徴です。展示内容は江戸時代の文書や民具，土器，古写真など幅広く，非常に充実していました。学校資料には捕鯨など地域産業の違いがそのまま反映されることがよくわかり，一方で地域の人々にとっては「これがなぜ学校にあるのか？」という問いが出てきそうな実は「お宝」だったものがあるなど，学校資料の魅力を知る絶好の機会だったと言えるのではないでしょうか。この企画展は，2018年にパートⅡが開催され，より充実した展示がされていました（写真⑧）。また，同館の常設展示室にある子供向けの解説は単なる表記の工夫にとどまらず読みたくなるような仕掛けがなされているので，学校や地域での展示にあたっては非常に参考になるでしょう。

写真⑧

他に，第2章第1節で紹介されている横浜市歴史博物館の企画展「よみがえる学校の文化財 地域の“かがみ”学校内歴史資料室」（2016年夏）も，学校資料を主とした企画展として学ぶところが多い内容でした。

以上が，学校資料を中心にした企画展の紹介です。学校や教育をテーマにした企画展には，学校資料を活用するにあたってのヒントがたくさんあります。しかし，企画展は展示期間が決められており（たいてい1～3か月ほど），いつ行っても観られるというわけではないので見逃さないようにしないといけません。みなさんの自宅に届く自治体の広報紙に目を通せば，たいていの企画展は知ることができます。それに加えて，できれば図書館などの公共施設に行った時には配架されている博物館のチラシをチェックしてみましょう。きっと，学校資料に限らず思わぬ発見があることかと思います。

2　教育史系の博物館

博物館のおもしろさは，世界に2つと同じ館が無いということにつきます。それぞれの博物館には強い個性があり，その個性を楽しむことにこそ博物館の醍醐味があるのです。中でも，教育の歴史（教育史）をメインにした博物館はほとんどが元校舎を活用しているので，一段と強い個性を持っています。教育史系博物館は，その個性も含めて学校資料の活用について学ぶ絶好の場です。ここでは，3つの館をご紹介します。

まず，長野県松本市の旧開智学校です（写真⑨）。建物が国の重要文化財に指定されていて，その中で展示をするというタイプの博物

写真⑨

写真⑩

写真⑪

館です。このタイプの博物館はいくつかあるのですが，量・質ともに旧開智学校がその最高峰と言えるでしょう。このタイプの博物館には，専属の学芸員がいないことがほとんどなのですが，旧開智学校には専属の学芸員がおり，かつ学校建築以外の展示が非常に豊富なのが特徴です。加えて，全21巻の『史料　開智学校』（1986-1997年）を刊行するなど，教育史研究者で知らない人はいないというくらい学校資料が豊富にあり，しかも松本城から徒歩圏であることから一般の観光客もたくさん訪れるという，専門家にも一般の方にも非常に人気のある博物館です。

長野県には他にも教育史系博物館がいくつかあります。中でも旧中込学校（佐久市）の学校資料の展示は本格的で量も多く，旧開智学校と同じく建物が国の重要文化財に指定されていて観光地にもなっています（写真⑩）。この2つの旧学校に並ぶ歴史を持つ旧和（かのう）学校校舎（東御市）は，現在は資料館（東御市和記念館）として活用されていますが，館内の教育資料室（写真⑪）や子供の生活資料室，書庫などにはいつでも学校歴史博物館をつくることができるほどの充実した学校資料があります。

次に，京都市学校歴史博物館です。建物は1930年代後半築の元小学校校舎をそのまま活用しています。この博物館は，正門・石塀・玄関が文化財指定されており（写真⑫），館内には小学校だった頃の児童作品がそのまま残されており懐かしさを体感できますが（写真⑬），メインはあくまで展示室内での展示であり旧開智学校や旧中込学校のように建物そのものが文化財指定されているわけではありません。ではなぜ，京都に

写真⑫

写真⑬

学校歴史博物館があるのでしょうか。詳しくは同館の発行物に譲るとして，ここでは開館までの経緯を紹介します。京都市中心部では1980年代に少子化がかなり進み，数校での学校統合（大規模統合）が計画されました。それと同時期に，学校資料調査と学校文化財調査が行われ，それぞれの成果として行われた学校所在資料と学校所在美術工芸品それぞれの展示が好評だったことから，個人寄贈の学校資料を加えて収集・保存・展示する博物館として1998年に開館しました。それゆえに，「教育史を専門とする市立博物館の学芸員」と，「美術史を専門とする教育史系博物館の学芸員」という非常に珍しい二人の学芸員（どちらもおそらく全国で唯一です）が専属でいて，常設展のほかに企画展が年間に4～5回開催されています。同館の特色はこのように美術工芸品を扱っているということに加えて，京都市が地域運営学校の元祖である番組小学校の地であることから学校と地域とのつながりについての展示がなされているということにあります（写真⑭）。同館が編集している一般向け書籍『学びやタイムスリップ近代京都の学校史・美術史』（京都新聞出版センター，2016年，A5判一部カラー192頁，1600円）にはこの2つの「特色」が詰まっており，しかも前半

写真⑭

部分が教育史の入門書にもなっているので，みなさんが学校資料を活用するときに役立つかと思います。

最後に，福井県教育博物館です（写真⑮）。工業高校の元校舎を活用して，そこに福井県教育総合研究所に併設するかたちで2017年に開館しました。同館は歴史博物館ではないので，現在の福井県の教育についても多くを学べます。しかし，だからといって歴史展示が少ないわけではありません。同館は明治から現在までの教科書を約1万3000冊所蔵していて，展示室では教科書の歴史的な移り変わりが展示され，閲覧室では実物を手にとって見ることもできます。他にも展示資料数が豊富で，パネル解説もしっかりしていてかなり見応えがあります（写真⑯）。特におすすめなのが，「なつかしの学び舎」コーナーです。戦後の写真や木版画，夏休みの絵日記，児童文集などが展示されており，学校や自宅にある資料の活用について多くを学べるからです。同館ホームページの「学校の宝」では，「一般の方々には公開していませんが」とことわった上で福井県内の学校にある学校資料が紹介されています。このページは，みなさんの学校にある資料に価値を見いだすのに役立つのではないでしょうか。このように博物館のホームページで学校所在の学校資料を紹介する試みは，おそらく同館が全国初です。

教育史系の博物館施設は，他にもあります。筆者が行ったことのあるところだけをいくつかあげても，山形県立博物館教育資料館（山形県，写真⑰），唐澤博物館（東京都），甲府市藤村記念館（山梨県），格致学校（長野県），

写真⑮

写真⑯

旧制高等学校記念館（長野県），岩科学校（静岡県，写真⑱），旧見付学校（静岡県，写真⑲），博物館明治村の三重県尋常師範学校・蔵持小学校（愛知県），豊郷小学校旧校舎群（滋賀県），旧閑谷学校の資料館（岡山県），開明学校（愛媛県，写真⑳），咸宜園教育研究センター（大分県）などがあります。他に，原子爆弾の痕を克明に残す袋町小学校平和資料館（広島県）や，帝国日本による植民地支配下での学校資料も展示する台北市鄉土教育中心（センター）（台湾，台北市）など，個性的な博物館施設もあります。

機会があれば，前項で紹介したようなみなさんの地元の歴史博物館に加えて，これらの博物館施設を見学して学校資料の魅力に触れてみましょう。きっと，授業や学校・地域での展示など，みなさんの周りにある学校資料の有効な活用方法が見つかるかと思います。

写真⑰

写真⑱

写真⑲

写真⑳

コラム1

教員を目指すみなさんへ
―大学資料館に行ってみよう！―

冨岡　勝

大学資料館とは

全国各地の大学に，学校資料の展示を見学や閲覧ができる資料館（○○大学史資料センター，○○大学文書館などの名称の場合もあります。以下，「大学資料館」と呼んでおきます）があります。

大学資料館はすべての大学につくられている訳ではありませんが，最近増えてきています。大学資料館の交流団体である「全国大学史資料協議会」は機関会員と個人会員を合わせて150ほどの会員数がありますし，これに加盟していない大学資料館もかなりあるものと思われます。「○○大学　資料館」「○○大学史　展示」などのキーワードでインターネット検索しても大学資料館が見つかります。母校や近くの大学に大学資料館があるかもしれません。

近畿大学（東大阪キャンパス）建学史料室・不倒館

図1 近畿大学不倒館の展示（人力車）

一例を紹介します。筆者の勤務する近畿大学東大阪キャンパス（大阪府東大阪市）には建学史料室という大学資料館のなかに不倒館という展示スペースがあり，近畿大学創設者の世耕（せこう）弘一関係の式辞・書簡・色紙・遺墨集・居宅ジオラマ・関連図書などが展示されています。

不倒館には様々な人が訪れています。たとえば新入生。1年生全員が受講する「基礎ゼミ」という授業の一環で不倒館を見学する新入生が見られます。全員が留学する国際学部では「留学先で自大学のことを魅力的に紹介できるようになる」という目標をもって，熱心に見学する新入生もいます。新入生だけでなく，卒業前に来館する学生も目立っています。卒業前に自分の大学のことを改めて知りたくなるのかもしれません。

ホームカミングデーなどを利用した卒業生の来館も多く，「卒業してから世耕弘一先生の史資料に接して，新たな感慨があった」といった思いを述べる人もいます。

受験生などの来館者も増えています。オープンキャンパスの際に校内案内をする在校生と一緒に来館する受験生もいます。また，受験生とともに保護者も来館していますし，大学見学で来学した児童・生徒の来館も増えています。

2009年の設置以来2018年1月末までの約9年間で合計2万5千人以上の来館者が，様々な目的で不倒館を見学しています。

不倒館の特徴の一つに，入口に展示されている人力車に乗り込んで記念撮影ができる点があります。世耕弘一が青年時代に人力車を引いて働きながら勉学に励んだという事実にちなみ，卒業生から寄贈された人力車が展示されています。新品の人力車であったため，いつしか人力車に乗車して記念撮影するのが恒例となっていったそうです。展示物に直接触れながら記念撮影をすることで，大学の歴史を身近に感じて楽しむことができます。

福岡女学院資料室展示室

筆者が訪問した大学資料館をいくつか紹介したいと思います。

図2 福岡女学院資料室展示室での見学風景

たとえば福岡女学院資料室（福岡県福岡市）では，1921年に制服として採用されて学院のシンボルとなったセーラー服が展示されています。現物を間近に見ながらこの制服に関するエピソードを資料室の方から聞くことで理解が深まりました。

図3 関西大学年史編纂室史の年史資料展示室

関西大学年史編纂室

実物が豊富に展示されている大学資料館として，関西大学年史編纂室（大阪府吹田市）も見逃せません。この編纂室内の年史資料展示室には，1886年の関西法律学校（関西大学の前身）設立以来の史資料が展示されています。なかでも特徴的なのはスポーツに関わる人物が積極的に取り上げられている点です。オリンピックに出場したスケート選手のメダルも展示されていて，思わず見入ってしまいました。

京都大学大学文書館

国立大学の大学資料館の展示も色々あります。たとえば京都大学（京都府京都市）の時計台記念館１階の歴史展示室では，広大なスペースを使って常設展（「京都大学の歴史」「第三高等学校の歴史」）と企画展がおこなわれています。豊富な史資料や写真パネル，過去のキャンパスの精密模型などとともに，動画も楽しむことができます。修学旅行生などが団体で訪問しても快適に見学できそうです。

こうした展示を企画しているのは京都大学の大学文書館です。この館は，保存期間が満了した公文書や京都大学の歴史資料などを収集・整理・保存・閲覧・調査研究する本格的な大学文書館で，京都大学に関係した出来事や人物などを調べたいときには大いに役立ちます。事前に同館のWebサイトの所蔵資料検索システムで閲覧資料を探して利用手続きをとる必要がありますが，教材研究などで「ぜひ詳しく知りたい」ことがある場合は，それに見合う成果が得られることと思います。

図4 京都大学時計台記念館歴史展

大学資料館のおすすめ

教員志望のみなさん，母校や近くの大学に大学資料館があれば，見学に行ってはいかがでしょうか。見学の際，「学校資料にちょっと興味がある」などと大学資料館の人に話しかけるのも特におすすめです。大学資料館の方との会話が弾むでしょう。

大学資料館を見学することで，学校資料を身近に感じることができますし，学校資料活用の魅力が見つかり，教員になったときに役立つかもしれません。

すでに教員として活躍中のみなさん，大学見学の引率，同窓会，研究会などで大学を訪問する機会があり，そこに大学資料館があるようでしたら，訪問してはいかがでしょうか。その大学の特徴に触れる上で，大学資料館への訪問は有力な方法だと思います。

市民のみなさんもぜひ。大学の学校資料も「地域のたからもの」として，想像以上に楽しめるかもしれません。

なお，開館日・時刻もインターネットなどで調べてから訪問していただけたらと思います。休館日だったら悲しいことですから。

第2章

こんなに広がる，学校資料の可能性

第1節

学校資料を学校に展示しよう!
―学校内歴史資料室をつくる―

羽毛田智幸

はじめに

ここでは，学校内に歴史資料室をつくる際にとくに重要なことについて，ポイントをしぼって紹介します。もちろん資料の展示の仕方は本来自由なものです。展示場所も，空き教室（余裕教室）はもとより，図書室や部室，廊下や階段下だって利用できるでしょう。展示は，基本的には自由なやり方や工夫が可能であると思います。それを踏まえた上で，ここでは「できるだけ老若男女で取り組む」「欲張りすぎずに展示テーマを絞りこむ」「展示ができあがったら，みんなに見てもらう」という点をうまくいく鍵として紹介します。

1 博物館デビュー支援事業：学校内歴史資料室をつくる効果

ところで筆者（羽毛田）の所属する横浜市歴史博物館は，横浜市内の小学校を対象として「学校内歴史資料室を活用した博物館デビュー支援事業」を2013（平成25）年から実施してきました。その中心事業が，学校内歴史資料室の振興です。主な目的は学校資料を学校内で活用できる設備を整えること，そして小学生が当館でどんな学びができるかを理解し，当館を使いこなすための準備を学校内でできるようにすることです。

横浜市の小学校の数は2016年時点で341校あり，全国最多です。その小学校には，横浜市歴史博物館の収蔵庫にも無いような資料が保管されています。小学校所蔵資料の大半は生活用具類です。このような昔の道具に触れながら昔の人々の生活を学習する学校と，そうでない学校では児童の単元への理解度が変わってきます。しかし資料へ気軽に触れられる状況にないと，せっかく資料を持っていても使うことができません。

また資料を学校内で使える環境にあれば，わざわざ遠くの博物館を訪れて学ぶ負担も軽減できるでしょう。しかも学校内の資料室で使い方をあらかじめ児童が学んでいれば，博物館を訪ねた際の学び方は格段に効率的になるはずです。

実際，横浜市では小学校内の歴史資料室を整備することで，小学生の学びに良い影響を与えています。さらには，卒業生が中学校での地域学習のために再び母校の資料室を自ら訪れ利用しているような事例も生まれています。そんな魅力的な場所を学校内にどうしたらつくることができるのか，その秘訣を紹介しましょう。

2 学校内歴史資料室（学校博物館）がつくられるとき

さて学校内歴史資料室をつくるきっかけは何でしょうか。創立50周年，100周年などと，学校現場では，創立以来の5年や10年の節目において，記念の式典がよく開かれます。それとともに，記念冊子がまとめられることもあります。創立記念はさまざまな行事が計画されることが多い機会です。こうした記念の年の行事の一環として，学校内に地域や学校の歴史を紹介し授業で活用してもらうことを目的に資料室がつくられることがあります。それは明治時代の学制以来の伝統を持つ，つまり140年を超える歴史を有する学校ばかりではありません。新興住宅地の開発によって地域の従来の姿が大きく変化をしたような学区にあって，10年20年といった比較的創立以来の歴史が浅い学校であっても，資料室をつくり，そこに地域のかつての姿をとどめようとする事例が見られます。

こうした記念の年に周年事業として，資料室が整備されるのは，通常の学校活動やPTA活動とは別に，特別な予算と人員が配置されること，そして何よりも周年事業を成功させ滞りなく完遂したい，という関わる人々の力が結集することにあるといっても過言でありません。学校や地域がともに活動することが前提ですが，多くの場合，新年度に入ってから資料室の整備に向けた動きが始まり，10～11月頃に行われる記念式典にむけて活発化し，民俗資料や古写真などの資料を地域から収集し，展示スペースにキャプションとともに並べて展示室として完成させてい

ます。式典でオープンを迎えるために非常に短期間での取組となることが多いのですが，期日目標が定まっていることによって多くの人の力を結集させやすいというメリットがあります。一方で，オープン後の利用方法や授業で活用するための教員の意見やアイデアを充分に検討し盛りこむ時間が取りづらい，あるいは後述する子供の目線が欠けた資料室になりやすいというデメリットもあります。

資料を提供する地域と展示空間を提供する学校，双方の「資料室をつくりたい」という気持ちをまとめ，行動にうつすきっかけとしての周年事業は大いに活用するべきです。ただし，オープン期日ありきの目標やスケジュールの立て方には注意が必要です。ハコモノ行政のように資料室をつくるのではなく，地域や学校，子供はもとより老若男女がともに「資料室をつくる」活動をおこなうといった方向性で取り組むことが，長く活用され人々に親しまれる学校内歴史資料室に結びつきやすいのです。

3 展示を通して伝えたいことはなにか?

横浜市内の学校内歴史資料室では，地域から集めた多様な資料が狭い資料室（多くは普通教室1クラス分の広さ）に詰め込まれた状態の学校が散見される事例があります。他にも，解説パネルや資料のキャプションがなくモノが並んでいるだけの状態や，資料室に追加で寄贈されたものが雑然と通路に置かれて物置状態となっている事例は比較的多いです。こうしたケースには下記のようにいくつかの課題がありますから，資料室の新設やリニューアルにあたっては，それを意識しておくことが望ましいです。

1つは，展示を通して何をつたえたいのか，という資料室全体のテーマや展示構成が十分検討されておらず，集まってきた資料をそのまますべて並べてしまった「つめこみすぎ」の問題です。せっかく地域から提供していただいたものだから，という気持ちは大切ですが，ジャンルの異なるさまざまなモノをすべて展示する（羅列といっても過言ではない）ことは，展示のテーマを伝えにくくすること，見えにくくすることにほかなりません。民俗資料の場合，使用した経験のあるお年寄りから道具についてのお話を聞くといったケースはまだ良いですが，平成生まれの若い先生と児童のみでの見学といった資料室の利用シーンでは，つめこみすぎの資料室では学習に役立てにくいし，子供達にとっても情報過多となってしまいます。

ここには，「あれも見せたい，これも見せたい」という押さえきれない大人のはやる気持ちと，集まってきた道具を取捨選択することができない，あるいは寄贈者（多くはその地域の旧家）との関係悪化をおそれて取捨選択したくない，という大人の事情も見え隠れします。決して広くない学校の資料室においては，展示のテーマやコンセプトをしっかりと話し合い，各展示コーナーの内容を決めておくことが大切です。各コーナーの内容に照らして，必要なものかどうかを判断し，詰め込みにならないように心がけましょう。また，すでに詰め込み状態となっている資料室をリニューアルする際は，展示台の下や展示室内の一部を仕切って「保管場所」とし，各コーナーに必要のない資料を集めておき，詰め込みすぎによる情報の混乱を回避したほうがよいでしょう。

4 歴史を学ぶ前に―昔を理解する―

横浜市歴史博物館が進める学校内歴史資料室の展示リニューアルでは，地域の歴史への理解を深めるとともに，多様な授業展開が可能となるよう努めています。アイデア次第では各学年・各教科でさまざまに活用が可能ですが，基本的には小学3年生が冬季に学ぶ「昔のくらしをたずねてみよう」という単元で利用することを主眼に置いています。しかし，「歴史」はもとより，「昔」ということについて初めて学ぶ3年生には，「昔っていつのことだろう」といった過去を考えることについてレクチャーする必要があります。

3年生の年齢は9～10歳で，自分が生まれた頃というのはちょうど「ひと昔前」という時代にあたります。そうしたひと昔前，ふた昔前（=およそ20年前）の自分が生活する地域の姿，具体的には道路や鉄道，河川や海岸線，土地の利用や宅地の開発の様子が比較できるようにすること

で，時間の経過を視覚化させて認識するのです。その際，当館で比較的よく利用するのが，学校内歴史資料室によく見られる航空写真です。周年事業の折りに撮影された写真には地域のかつての姿がよく記録されています。資料室にそうした写真の所蔵がない学校でも，国土地理院の航空写真（地図・空中写真閲覧サービス）から教育目的でダウンロードして印刷利用することができるので，これらを用いています。

現在から過去に遡るかたちで，複数の航空写真から地域の姿の変化を見ることで，「おじいちゃんやおばあちゃんが子供だった頃」や「今は住宅が建ち並ぶ道路ぞいもかつては田畑が広がっていた」といったお年寄りの口から語られる具体的な地域の姿を視覚的に理解することができます。その上で，資料室に展示されているさまざまな道具を調べたり，使ってみたりすることで昔のくらしを考え，当時の人々の知恵や工夫に気づくのです。

5 伝えたいことを絞る―展示の再構成―

展示のリニューアルに際しては，詰め込みすぎた過去の失敗を繰り返さないためにも，伝えたいこと（地域の歴史における特徴）を絞った上で，多様な授業展開が可能となるよう展示を再構成しています。当館ではこれまでに25校分約1万点の学校内歴史資料室の資料を整理してきましたが，各校所蔵資料の内容はほぼ，各校の地域の歴史を示しているといっても良いものです。一部に余所の地域から持ち込まれた資料も散見されますが，それも大規模な団地が開発されたことによって他地域から移り住んだ人々が多くなった新興団地が含まれる学区の特徴でした。リニューアル時点までに所蔵している資料を使うことが再構成の前提で，収蔵場所が限られる学校内歴史資料室にあっては展示資料の追加収集等は行いません。リニューアルで補うのは，4項で触れた航空写真のパネルや各コーナーの解説パネル，道具の使い方のイラストパネル程度です。

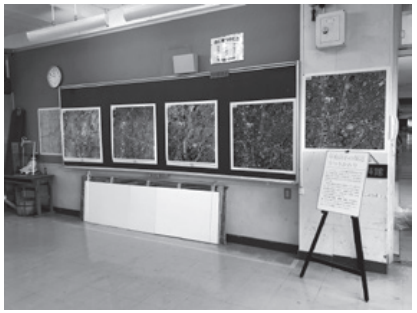
展示の各コーナーの内容については，「どうしても○○のことを紹介したい」という学校や地域の要望をいただくこともあれば，学校所蔵資料を検討し博物館から提案する場合もあります。どちらにしても大切なのは各コーナーを使う具体的な授業の場面を想像することです。航空写真は昔を考えるきっかけですが、これは3年生前半の自分たちのくらす街を学習する単元で使えます。養蚕の道具は小学校4年で学習する地域の産業や理科で利用できます。米作りの道具は5年生で取り組むことが多い水田学習（お米作り体験）で，学区の出土考古資料や学校史資料は6年生の歴史学習で，それぞれ利用します。1年生の国語科「たぬきの糸車」に引き合いの多い糸車のように，コーナー単位だけでなく道具単品でも活用できるものも多いです。

6 完成したら実際に使う先生に見てもらう

展示のリニューアル作業が終了したら，5で紹介したような授業内での具体的な利用場面を提案する教員向けの説明会も可能な限り開催します。説明会当日に質疑を受けることももちろんですが，事前に内覧してもらった上で質問をもらっておくと，説明会当日により丁寧な回答も可能となります。

数年に1度の異動がある学校の先生方ですが，区内や専門教科内でのネットワークもあり「○○小学校には資料室がある，授業にも使える！」という認識を一度持ってもらえれば，そしてその情報が共有されていけば，かつてのように埃が積もり，扉が長く閉ざされる資料室に戻ることはないでしょう。当館でも，積極的に学校内歴史資料室への訪問授業を促進し，資料室のある学校だけでなく，近隣校の見学にも対応しています。

多くの関係者の想いや力が結集した学校内歴史資料室であるからこそ本来の目的に立ち戻り，子供達の授業の中で活用されるように使う人の立場で各段階の取組を進める必要があります。



平成20年代の航空写真（右端）から明治15年の迅速測図（左端）まで140年ほどの地域の姿の移り変わりを可視化する。

第2節

学校資料を授業で使ってみよう！

八田友和・鈴木康二

はじめに

ここでは，「授業で実際にどんな活用ができるの？」「本当に学校資料を授業で使えるの!?」という疑問にお答えします。「まず指導案をみたい！」という方は，p.64 ～ 75の指導案のページからご覧ください。

1 紹介する指導案について

（1）資料を取り上げた理由について

様々な学校資料の中から，まずは多くの学校が保管していそうで，かつ比較的数がありそうな資料を取り上げることにしましょう。具体的には，絵葉書・航空写真・アイロン・学校日誌です。

これらに加えて，歴史学習の導入で使い勝手がよい資料としては，考古資料も挙げられます。例えば縄文土器や弥生土器の欠片などは，多くの学校の歴史学習の導入用の教材としてしばしば用いられているのではないでしょうか。どの学校にも必ず保管されている，というわけではありませんが，もしもあなたの学校にもあれば，教材化しない手はないかもしれません。なお，これらの資料を授業で用いることの有効性を授業実践などで検証したわけではないので，ここではあくまでも授業モデルの提示にとどめます。

（2）対象学年について

この節で紹介している指導案は，平成29年版小学校学習指導要領を参考にして作成しています。まず，学年設定について簡単に説明します。

小学校3年生では，身近な地域や市区町村を範囲として，その地理的環境や地域や生活の移り変わりを学習します。よって，学校やその周辺の地理的な移り変わりが視覚的に理解できる航空写真や，人々の生活の様子が時間の経過に伴って移り変わってきたことを理解できるアイロンを用いた授業案を紹介します。

小学校4年生では，自分たちの都道府県を範囲として，地理的環境の特徴や地域の伝統や文化，生活について学習します。よって，各都道府県を代表する文化財や景観が取り上げられている絵葉書を使用した授業案を紹介します。

小学校6年生では，我が国を代表する先人の業績や文化遺産を取り上げて，政治の考え方や仕組みについて歴史を通して学習します。よって，歴史学習の導入資料となる学校日誌や土器片を用いた授業案を紹介します。

加えて，総合的な学習の時間や特別活動の時間を使って「学校博物館をつくってみよう！」という授業案も準備しました。

具体的に授業の構想をまとめた指導案はp.64 ～ 75で紹介していますが，ぜひ，それ以外の使い方も模索してください。教員自身が，「この資料面白い！」「こう使うと絶対ウケる！」と思った活用方法が一番子供たちに響きます。指導案の校種や学年の設定にとらわれず，自由に活用してください。

（3）指導案の構成について

教員にはなじみの深い指導案も，教員以外の多くの方にとっては「シドウアン？」という聞きなれない言葉だと思いますので，本ハンドブックで取り上げる指導案の構成を簡単に整理します。

① 校種

まず，校種です。本節で提示する指導案の校種は全て小学校で設定しています。しかし，資料の提示方法や活用方法を工夫することで，中学校や高等学校でも使用可能だと考えています。

② 学年

学年としては，前述のように，小学校3・4・6年生で設定しています。

③ 教科

次に教科です。本節で紹介する指導案は社会科の授業で使用できるように構成しています。ですが，資料の提示方法や活用方法を工夫することで，総合的な学習の時間やその他の教科科目でも十分に活用可能になると思っています。

④ 扱う資料

使用教材では，授業で取り上げる学校資料および補助資料を紹介しています。学校資料そのものの活用は難しくても，補助資料という相棒を用意することで，学校資料がもつ良さを最大限引き出すことができます。その相棒もここでは紹介しています。

⑤ 学習指導要領の該当箇所

ここでは，『平成29年版小学校学習指導要領解説-社会科-』を参考にして学校資料を取り上げる箇所の紹介を行っています。ただ，実際に活用する際は，ここで取り上げた部分だけに縛られずに，ぜひ積極的に活用してください。

⑥ 教材としての〇〇

「教材としての〇〇」の〇〇には，学校資料の名前が入ります。ここでは，取り上げた学校資料の概要や教育的価値についてまとめています。学校資料の面白さを発見できる“かも”しれない項目になっています。

⑦ 本時の展開

最後に，資料活用の一例として，学校資料を用いた指導案を貼付けています。1つの活用モデルとして参考にしていただければと考えています。

ここまで読まれて，「あれ，指導案なのに児童観や指導観，評価基準（規準）がないけど…」と思われた方もおられると思います。ここで紹介する指導案は全て，「学校資料を面白く・楽しく活用してほしい」という願いを込めて作っているので，教材観や活用モデルを重視した指導案の構成をとっています。

（4）教材化を行う上での注意点

学校資料は，未来に伝えるべき大切な資料たちなので，子供たちに大切に扱うように声かけをすることが重要になります。ただ，博物館に展示されている一点ものの文化財と違って，学校にある資料は教員の皆さんが比較的自由に活用・提示できる資料です。資料を大切にする考えを教室で共有したのちに，壊れることを恐れずに子供たちに触らせてあげてください。触ることによって，資料がもつ圧倒的な重みや大切さを肌で感じることができると思います。また，資料に触らせるとき，「実はこれ学校の校長室から出てきたんだよ！」などの一言を添えるだけで，子供たちの学校や学校資料に向けられるまなざしは変わるかもしれません。

2 まとめ

さて前置きが長くなりましたが，次ページからいよいよ学校資料を活用した授業モデルをいくつか提示します。しかし、「百聞は一見に如かず」です。まずは，学校資料を手にとって触ってみてください。教員である皆さんは様々な道具を教材化するプロフェッショナルです。ここで紹介した以上に，様々な活用方法を考案してくださるに違いありません。そして，学校資料の魅力に気付かれた方は，ぜひ，周りの先生に紹介してください。私たちがここで学校資料の魅力を訴えることよりも，教員の皆さんが，「この資料おもしろいよ！」「これ使ったら授業が楽しくなったよ！」と他の教員に口コミで広がっていくことが一番大切で効果的だと思っています。これを機会に，職員室や廊下，校長室で!?学校資料の魅力を伝えていただければ望外の喜びです。

指導案 ①

1，校　　種　：　小学校
2，学　　年　：　３年生
3，教　　科　：　社会科･総合的な学習の時間
4，扱う資料　：　学校と学校周辺を撮影した航空写真
　　地図･空中写真閲覧サービスにある各地の航空写真
5，学習指導要領の該当箇所

（ア）市や人々の生活の様子は，時間の経過に伴い，移り変わってきたことを理解すること。
（イ）聞き取り調査をしたり地図などの資料で調べたりして，年表などにまとめること。

6，教材としての航空写真

大多数の学校にある学校資料として，航空写真があげられます。「航空写真？」と思われるかもしれません。場所は学校によって異なりますが，校長室や応接室，玄関などに学校を写した航空写真が多々見受けられます。それら航空写真の多くは，校舎を撮影したものや，校舎と児童（人文字を作っている児童）を写しているものが多くあります。また，それらの写真は校舎や児童を記録する目的で撮影されていますが，偶然にも学校周辺の景色が写りこんでいることもしばしばあります。

例えば，複数の航空写真を比較してみることで，学校の周辺環境の変化や，市や人々の生活の様子の移り変わりを理解できるのではないでしょうか。

また，校舎や児童に着目するのであれば，そこから当時の社会情勢を読み解く授業が有効です。例えば，児童の人数が現在と比べて圧倒的に多いところから，ベビーブームや人口増加を理解することができるでしょうし，逆に子供の減少から，少子化が進んでいることを読み取れるかもしれません。

また，国土地理院がネット上で公開している「地図・空中写真閲覧サービス」では，地域や時代に若干の偏りはあるものの，明治から現在までの日本各地の航空写真が整理・提示されています。それらの写真と学校資料の航空写真とをともに活用することで，学校の周辺を写した微視的視点と，市区町村の航空写真という巨視的視点で，学校周辺や自分たちの住んでいる市町村について理解することができると思います。

（参考）地図・空中写真閲覧サービス（最終確認2018年12月30日）
（https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1）

7．本時の展開

時間	学習内容	児童の活動 （〇発問･指示，･予想される回答）	教員の指導･ 留意点
導入	予想をたてる	〇この写真はどこから，何を撮影したものだろう。 ・空から学校を撮影したもの。 ・全校児童を撮影したもの。	学校の航空写真を提示することで，児童の身近なところから授業をはじめる。
展開	資料の並び替え	〇撮影されたのが古い順番に航空写真を並び替えよう。理由も一緒に発表してもらいます。 （並び替えた4枚の写真を提示） ・周りの景色から判断した。 ・白黒とカラーの違いから判断した。 〇並び替えた写真から何が読み取れますか？ ・学校周辺の変わりよう。 ・学校の変わりよう。 〇どのように学校の周辺が変わっていますか。 ・周り全部田んぼだったのに，住宅地になっている。 〇全校児童の数はどうですか？ ・だんだん減ってきている。 ・少子化 〇では，「学校の周辺が変化したこと」「児童数が減っていること」は何が原因で起こっているのだろう。グループに分かれて調べてみよう。	航空写真を提示し，並び替えさせることで，学校と地域の時間の経過について理解させる。 自校の航空写真と近隣他校の地図を比較する学習も想定される。 ここでは，疑問を呈する形でとどめる。 少子化についても若干ここで説明を行う。
まとめ	本時のまとめ	〇今日の授業で学んだことをワークシートにまとめよう。	学んだことを具体的に書くように指導する。

指導案 ②

1，校　　種　：　小学校
2，学　　年　：　３年生
3，教　　科　：　社会科・総合的な学習の時間
4，扱う資料　：　昔のアイロン（石炭のアイロンがのぞましい）
　　現在，家庭で使用されている一般的なアイロン
　　今から10〜20年前に製造されたアイロン
5，学習指導要領の該当箇所

（ア）市や人々の生活の様子は，時間の経過に伴い，移り変わってきたことを理解すること。
（イ）聞き取り調査をしたり地図などの資料で調べたりして，年表などにまとめること。

6，教材としての昔のアイロン

学校資料は，考古資料や民俗資料など様々な資料によって構成されています。中でも，戦後復興期から高度経済成長期にかけての資料は多く，ここで取り上げるアイロンのほか，白黒テレビや教科書，洗濯板など，多くの資料が学校に残されています。

ここでは，アイロンや昔の生活用具を授業で活用する方法を紹介します。

まず，道具から使用された当時のくらしの様子を調べるためには，資料ごとに「資料メモ」を取ることが大切になります。資料メモには，「使い方・工夫・いつごろ使われていたか・そのころのくらしの様子」をまとめます。次に，資料メモで確認したことと，自分たちの住んでいる市町村のくらしと出来事をまとめて，一つの年表に仕上げて発表します。

資料メモ作成のために，自分たちのおじいちゃんやおばあちゃんにインタビュー調査やアンケート調査を行うことでより現実味のあるメモが完成するでしょう。

また，小学校における“昔の道具学習”に合わせて博物館で特別展示が開催されることもあります。博物館では，教科書に記載されている資料を中心に，戦後復興期から高度経済成長期における資料が展示されます。博物館のいいところは，ホンモノの資料と学芸員という専門家がいることです。「博物館を見学したい！」「学校に来てほしい！」という質問をお近くの博物館や資料館に投げかけてみるのも一つの手だと思います。ここでは，例として，金沢くらしの博物館を取り上げます。

（http://www.kanazawa-museum.jp/minzoku/teachers/data_detail01.html）
（最終確認2018年12月30日）

7．本時の展開

時間	学習内容	児童の活動 （〇発問・指示，・予想される回答）	教員の指導・ 留意点
導入	めあての確認	〇（アイロンを提示しながら） 今日はアイロンを通して，くらしの変化や技術の発達を調べていきます。	実物資料を提示することで，児童の興味関心を惹きつける。
展開	資料の提示	〇アイロンを3種類準備しました。使用されたのが古い順番から並び替えてみよう。 〇何をヒントに並び替えましたか ・見た感じ ・アイロンの形や重さ	アイロンを並び替えさせることで，くらしの変化を視覚的に理解できるようにする。
	調べ学習	〇それぞれのアイロンの使い方を「使い方カード（道具の名前，使い方，工夫，使用されていた時代・生活の4項目）」にまとめよう。	アイロンの使用方法をカードにまとめさせることで，道具の違いを理解し，道具の発展を理解させる。
	資料の比較	〇アイロン以外の資料も調べて「使い方カード」にまとめよう。	アイロン以外の資料を取り上げることで，当時のくらしの変化を多角的に見ることができる。
	年表の作成	〇市町村のくらしと出来事について調べて，年表にまとめよう。 ・自分たちの都道府県，市町村の動きと当時のくらしの様子1枚の年表にまとめる。 〇調べたことを年表にまとめてみよう！	調べ学習については，地域の人へのインタビュー調査なども想定される。
まとめ	本時のまとめ	〇今日の授業で学んだことをワークシートにまとめよう。	学んだことを具体的に書くように指導する。

指導案 ③

1，校　　種　：　小学校
2，学　　年　：　４年生
3，教　　科　：　社会科・総合的な学習の時間
4，扱う資料　：　観光地がプリントされた昔の絵葉書
　　現在の絵葉書（観光地がプリントされたもの）
5，学習指導要領の該当箇所

　我が国における自分たちの県の位置，県全体の地形や主な産業の分布，交通網や主な都市の位置などに着目して，県の様子を捉え，地理的環境の特色を考え，表現すること。

6，教材としての絵葉書

　学校資料としての絵葉書には，「校舎の竣工記念や学校の周年行事記念で学校が発行したもの」「観光地を紹介した市販のもの」「道路の開通など出来事を記録した市販のもの」の主に3種類があります。

　ここでは，観光地を紹介した絵葉書を使って授業を考えてみたいと思います。学校に残る絵葉書に取り上げられる観光地は，観光地の中でも日本を代表するような史跡や名勝ばかりです。現存しているそれら観光地は，現在でも各都道府県や国を代表する観光地として知られているものがたくさんあります。

　小学校4年生において，自分たちが住んでいる都道府県を事例に，各地の都道府県の概要を学習する単元があります。例えば，兵庫県で用いられている東京書籍の『新しい社会3・4年生下』では，「城を守るまち・姫路市」や「姫路城を守る取り組み」という項目があり，著名な文化財を取り上げて，それが今日に至るまでにどのように受け継がれてきたのかを学習します。その際，戦前や戦後まもなくの姫路城が描かれた絵葉書と現在の姫路城が描かれた絵葉書を比較することによって，文化財を守る取り組みや仕組みを理解する際の助けになるのではないでしょうか。京都大学の大学院文学研究科・文学部が，20世紀前半頃の日本各地の名所旧跡の絵葉書約1500点を地域別にネットで公開しています。（https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/postcard/）（最終確認2018年10月25日）。参考にしてはいかがでしょうか。　このように大学などが公開している絵葉書データも併せて活用することで，授業を円滑に実施することができるでしょう。

　小学校4年生「私たちの県を調べる」に関しては，教科書が発行される自治体に合わせて内容が異なるため，今時の指導案では，姫路城をとりあげますが，実践する時は当該自治体の文化財や観光地などを取り上げてください。

7．本時の展開

時間	学習内容	児童の活動 （〇発問・指示，・予想される回答）	教員の指導・ 留意点
導入	既有知識の確認	〇自分たちの住んでいる市町村や都道府県にある有名な場所や観光地にどんなところがあるだろう。 ・姫路城 ・コウノトリ ・明石海峡大橋　など 〇この授業では，姫路城を取り上げていきます。	既有知識を確認することで，絵葉書に取り上げられている観光地についてまとめる。 本時では，姫路城を取り上げ授業を行う。
展開	資料の並び替え	〇姫路城の絵葉書を古い順番に並び替えよう。 〇4枚の写真を見比べて違うところ・一緒のところを確認しよう。 ・今の姫路城すごくきれい。昔は雑草が生えたりしてボロボロ。 ・パッとみたら昔も今も変わらない。 〇この4枚の写真からどんなことがわかるだろう。 ・姫路城をきれいにした人がいる。 ・お城を守ってきた人がいる。 〇姫路城を守り伝えるために，どのような工夫が行われているだろう。パソコンや図書館を利用して調べよう。 ・ボランティア活動をしている人がいる。	絵葉書を並び替えて，その当時あった社会背景を考えさせる。 黒い幕…空襲から守る為 雑草が生えている…まだ整備されていない 調べ学習では，地域への聞き取り調査やインターネットなどの情報機器の活用も想定される。
まとめ	本時のまとめ	〇今日の授業で学んだことをワークシートにまとめよう。	学んだことを具体的に書くように指導する。

指導案 ④

1，校　　種　：　小学校
2，学　　年　：　６年生
3，教　　科　：　社会科･総合的な学習の時間
4，扱う資料　：　学校日誌(戦争の様子が述べられたもの)
　　現在使用されている学校日誌
　　学校日誌の書き方･注意点などをまとめたプリント
5，学習指導要領の該当箇所

日中戦争や我が国に関わる第二次世界大戦，日本国憲法の制定，オリンピック・パラリンピックの開催などを手掛かりに，戦後我が国は民主的な国家として出発し，国民生活が向上し，国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことを理解すること。

6，教材としての学校日誌

学校の先生ならおなじみの学校日誌は，管理職に任された重要な書類の１つで，児童や職員の動静を毎日記録していくものです。学校教育法で定められた，出勤簿や出席簿と同様に，学校で備えておかねばならない表簿の１つとされており，5年間の保存義務があります。児童の在籍数，出欠数が男女別，学年別にまとめられています。職員についても，病休，公休の記録のほか，出張や郊外勤務の記録も残せます。

このことからわかるように，学校日誌は，児童の動静だけを記録に残すのではなく，職員の病欠や出張記録なども，その内容とともに残しておくことができます。つまり，その当時の学校の様子を如実に表した資料といえます。また，学校というフィルターを通して，当時の社会情勢も見えてきます。

例えば，戦時中の学校日誌を取り上げ，学校行事や訓練の内容，空襲，疎開，錬成などのキーワードを取り上げ，比較することで，日本が戦争に突入したあと，少しずつ劣勢になり，終戦を迎える様子が読み取れるのではないでしょうか。

教科書では，国の視点からアジア太平洋戦争について述べられており（上からの歴史），なかなか国民の目線（下からの歴史）から書かれることはありません。しかし，両方の視点から歴史を見なければ，本当の意味で歴史を勉強したとはいえません。そういう意味でも，学校日誌は，当時の国民の生活をありありとまとめた重要な教材なのです。

授業においては，「学校日誌の記入について」などのプリントを配布することで，より深い学びにつながると思います。

7．本時の展開

時間	学習内容	児童の活動 （〇発問･指示，･予想される回答）	教員の指導･ 留意点
導入	学校日誌とは？ 資料の提示	〇（出欠確認後，現在の日誌を提示しつつ）今，確認した出欠はこの学校日誌に記録されて，ずっと学校に保管されます。 〇今日は，今から70年前の日誌を用意しました。何が書かれているかな？	現在の日誌を提示ししてから，昔の日誌を提示することで，展開部への接続をスムーズにする。
展開	資料の解読 調べ学習 壁新聞の作成	〇これは，ある出来事を記した日誌です。何が書いてあるでしょうか？ ・昔のこと ・戦争のこと 〇それは，どこからわかりますか？ ・戦争／集団疎開／空襲／軍事訓練などのキーワード 〇各グループで調べ学習を行い。アジア太平洋戦争当時の国民の生活をまとめよう。 ・ものは配給制で，自由に買ったりできなかった。 ・貴金属類は全て国に没収された。 ・若い男性は兵隊として戦場に，女性も国内で労働させられた。 〇グループごとに調べた内容を壁新聞にまとめよう。	学校資料の原本を提示しつつ，コピーを配布する。 各グループで調べたことを共有させることで，アジア太平洋戦争前後の年表を完成させることができる。 調べ学習の際は，博物館や図書館，インターネットなどの活用を想定しておく。図書館から，当時の様子がわかる本を団体貸出することも1つの方法である。
まとめ	本時のまとめ	〇今日の授業で学んだことをワークシートにまとめよう。	今後の展開として，壁新聞にまとめて発表する授業が想定できる。

指導案 ⑤

1，校　　種　：　小学校
2，学　　年　：　６年生
3，教　　科　：　社会科･総合的な学習の時間
4，扱う資料　：　縄文土器や弥生土器など，考古資料の欠片
　　完形の土器(実物･レプリカを問わない)
5，学習指導要領の該当箇所

（ア）狩猟・採集や農耕の生活，古墳，大和朝廷（大和政権）による統一の様子を手掛かりに，むらからくにへと変化したことを理解すること。
（イ）遺跡や文化財，地図や年表などの資料で調べ，まとめること。

6，教材としての土器の欠片

学校資料のうち，考古資料と呼ばれるものの多くは縄文土器や弥生土器などの欠片や石器，瓦の欠片である場合がほとんどです。特に，学校が所在する地域のものが多く，自分たちが生まれ育った地域の歴史を知るためには必要不可欠なものでありながら，これまでスポットがあてられることはほとんどありませんでした。一見，道端に落ちている石にも見える土器や石器の欠片でも，活用方法を工夫することによって，子供たちに当時の人々の考え方や今との接点を考えさせられる教材に生まれ変わります。

ここでは，紙面の関係上２つの活用方法を提示します。

第１に，土器や石器の欠片には，それぞれ特徴があるので，「縄文土器・弥生土器・石器・瓦」などに分類する活動を授業に組み込むことです。児童に共通点と差異を発表させてもいいかもしれません。

第２に，土器や石器の欠片をスケッチする学習です。１つないし複数の特徴的な土器片を観察し，スケッチする。その後，それらの土器片から，土器の全体像をイメージする学習も有効なのではないでしょうか。また，学芸員に出張授業を依頼して，学校に来てもらうことも想定されます。時期としては，小学校６年生の歴史学習の導入での学習や事前学習として，土器片を活用することが有効だと考えられます。

実際，筆者が見学にいったいくつかの学校では，縄文土器や弥生土器，須恵器や瓦といった考古資料が保管されていました。加えて，ホンモノの考古資料ではないですが，いわゆる「教材セット」のような，縄文土器や土偶などをイメージした模造品などが保管されている学校は比較的多かったようにも思います。それらとホンモノの考古資料を比較してみるのも面白いかもしれませんね。

7．本時の展開

時間	学習内容	児童の活動 （〇発問･指示，･予想される回答）	教員の指導･ 留意点
導入	昔を知るために	〇昔のことを知るためにはどうしたらいい？ ・博物館に行く。 ・巻物を見る。 ・遺跡を見に行く。 ・タイムマシンをつくる。	既有知識を全体で共有し，知識をフラットにて展開部分にうつる。
展開		〇考古学者はどうやって歴史を解明しているんだろう。 ・遺跡に行く。 ・発掘をする。	児童たちにもできる考古学の勉強法も併せて紹介する。
	資料の提示	〇今日は，実際に発掘されたモノを持ってきました。	なるべく教科書に載っている資料を中心に用意する。
	資料の説明	〇縄文土器や弥生土器の特徴について，学芸員が説明を行う。 ・縄文土器は縄目の文様がついています。 ・弥生土器は，こんな製法で作られています。	学芸員に出張授業を依頼しておく。資料の貸出のお願いもする。
	資料の分類	〇欠片を仲間分けしていこう。 ・土器や石器などの特徴に照らし合わせて仲間分けをする。 〇資料の仲間分けができたグループから，学芸員にチェックしてもらおう。 〇学芸員の講評	グループに分かれて，考古遺物の欠片をグループ分けする。
まとめ	本時のまとめ	グループ分けして，気づいたこと，考えたことをワークシートにまとめる。	学んだことを具体的に書くように指導する。

指導案 ⑥

1，校　　種　：　小学校
2，学　　年　：　全学年
3，教　　科　：　総合的な学習の時間･特別活動
4，扱う資料　：　社会科教材室や校長室などに保管されている資料
　　各教員が持っている教材や各種資料
5，学習指導要領の該当箇所

　他教科及び総合的な学習の時間で身に付けた資質・能力を相互に関連付け，学習や生活において生かし，それらが総合的に働くようにすること。その際，言語能力，情報活用能力など全ての学習の基盤となる資質・能力を重視すること。

6，学校博物館をつくろう！

　これまでは，「学校資料を授業で使ってみよう！」という提案をしてきましたが，ここでは，第1章第1節や前節でも登場した「学校博物館をつくってみよう！」という提案をしたいと思います。

　学校内に博物館や資料館をもっている学校は，実際のところとても少ないと思います。しかし，社会科教材室や校長室，廊下などに，多くの資料を保管・展示している学校は意外に多いのではないでしょうか。筆者は点字学習の出前授業で姫路市の小学校に行く事が多いですが，出土した瓦や絵画などが廊下に展示されているケースに出会うことが多々あります。

　授業の流れとして，次のスケジュールが想定されます。

①　学校内で資料を発見する
　→社会科教材室･理科室･校長室などに所在するケースが多々ありますが，詳細は巻末の保管場所リストをご覧ください。
②　空き教室に資料を集めるとともに，近くの博物館の学芸員に連絡する。
　→資料を扱うプロである学芸員と保存方法や展示方法などを共有する。

+α　各委員会活動の担当者を決める時に，博物館委員や資料館委員なるものを設置することで，教員が異動しても博物館が児童によって後輩に受け継がれていきます。また，異年齢交流や委員会活動の活性化にもつながると思います。

　なお，学校博物館をつくる取り組みとしては，前節でも紹介されている「博物館デビュー支援事業」が顕著であるため，参照をおススメします。

博物館デビュー支援事業（最終確認2018年12月30日）
（https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/taisyou/school/debut/）

7．本時の展開

時間	学習内容	児童の活動 （〇発問･指示，･予想される回答）	教員の指導･ 留意点
導入	資料の確認	〇学校資料を探してみよう ・校内の社会科教材資料室や校長室など，資料がありそうなところに探しにいく。	他の教室では，授業が行われているため，静かに移動するように促す。
展開	資料の概要把握	〇どんな資料か調べよう！ その資料が当時，どのように使用されていたのか，インターネットや図書館，博物館を使って調べよう。	わかったことは，ワークシートにまとめるように指導する。
	フィールドワーク	〇話を聞きにいこう！ 地域にフィールドワークに出て，資料がどのように使用されていたのか聞き取り調査を行う。	事前に，聞き取り調査をする上での礼儀やマナーについて事前学習を行う。また，聞き取り調査の際，聞いた内容を資料の調べカードに記入していくように指導する。
	中間まとめ	〇調べたことをまとめよう 自分たちが調べたことを壁新聞やワークシートにまとめる。	
	資料の展示	〇資料を展示しよう！ 調べた内容をもとに，空き教室に学校博物館をつくってみよう！	実際に博物館をつくる際は，博物館（学芸員）や地域の人の協力が得られるようにする。
まとめ	本時のまとめ	〇学校博物館が完成した後，ワークシートに取り組んだことや感想をまとめる。	継続的に学校博物館を活用した授業実践を行うことを伝える。

コラム2

調べ学習と学校資料

一色範子

はじめに―学校資料が調べ学習に使える!?―

小学校における地域学習では，身近な地域の様子について学ぶため，地域の人々から聞き取りをしたり，地図などの資料を使ったりして調べることがあると思います。また，身近な博物館や図書館へ行き，必要な情報を収集することもあるでしょう。

実はこのような調べ学習でも，学校資料が活用できるのです。例えば「子ども風土記（こども風土記）」という，主に校区単位における地域の風土（歴史・暮らし・自然・伝統行事や民話など地域の特色）について記した書籍があります。その多くは学校独自で作成されたものであるため，学校に眠っていたり，卒業生が持っていたりすることもあります。

このコラムでは，「子ども風土記」を事例に，調べ学習で学校資料を活用する意義について一緒に考えてみましょう。

1．「子ども風土記」って？

「子ども風土記」は，これまでに全国各地の小学校で多数作成されています。そのきっかけの一つは周年事業の一環であり，子どもの学習や家庭で読まれることを意図して作成されたものもいくつかあります。また，「○○子ども風土記」のように，書名に校区名が付いていることが多く，その地域独自の資料であるといえます。「子ども風土記」には大人が書いたものもありますが，子どもが書いたものもあります。いずれも身近な地域における様々な事象について，資料を集めたり，地域の人々に聞き取りを行ったり，観察したりしてまとめられています。なかでも子どもが書いた「子ども風土記」には，作文や図表が収められていることが多く，身近な地域を題材に，地域の実態を探究した調べ学習の成果といえます。

一概に「子ども風土記」といっても，一つとして同じものはありません。「子ども風土記」は，郷土史，地誌，民俗誌であるうえ，学校の記念誌や副読本の性格をもっているといえます。そして実際に中身を確認すると，子どもに地域への興味・関心をもって欲しいという大人の願いが込められていることが分かります。例えば，現・福知山市立有仁小学校で作られた『有仁子ども風土記』の第1号（1981年）には，同書が「何にもかえられない，私たちの作った，私たちの文化財」であるとされています。何も文化財は教科書に載っているような，有名なものとは限りません。「子ども風土記」は，次世代へ読み継がれることをねらいとした，地域にとっての「文化財」といえるのです。

そんな「子ども風土記」がどうやって作られたのか，また作った後はどうなったのか，気になりませんか？では，京都市立北白川小学校における『北白川こども風土記』（1959年）を用いた授業実践を事例にみてみましょう。

2．子どもが書いた風土記―『北白川こども風土記』―

『北白川こども風土記』は，社会科学習の一環として，北白川小学校の4年生48名が3年がかりで執筆した郷土学習の成果です（図1）。北白川の歴史や産業，風習，地形などの様々な事象について，主に作文にまとめられています。児童の保護者や地元の古老への聞き取りを交えたこの本は，当時の北白川における歴史や文化を知るうえでの貴重な1冊といえるでしょう。民族学者の梅棹忠夫は，「これはおどろくべき本」とさえ評しており，刊行の翌年に映画化されました。

図1

本書所収「あゆみ」によれば，同書は「子供たち自らの具体性をもった直接体験を通して，ものの見方や考え方を養っていこうという，郷土学習本来のあり方―つまり問

題解決学習として，そういうあり方が望ましいという考え方」から生まれたものです。「郷土研究」をしたい児童を募り，集まった児童はテーマごとにグループで調べることになったのです。その成果である作文一つひとつを読んでみると，子どもの感性が伝わってくるとともに，当時の子どもがいかに地域に向き合ったのかがわかります。なお児童の調査には，保護者でもある著名な研究者らが協力しています（北白川小学校は京都大学から北東に1kmほどのところにあります）。北白川にはそのような恵まれた教育条件があるにせよ，同書は児童が地域の様々な事象について，主体的に関わり，地域を捉えようとした調べ学習の記録集だといえます。また，「郷土研究」を軸とした教員の作文指導の実践記録であるともいえるのです。

3．調べ学習の再現―『北白川こども風土記』を使った授業実践―

北白川小学校では，2016・2017年度の2年間，3年生の「総合的な学習の時間」（以下，総合学習）で『北白川こども風土記』を用い，地域学習「つたえよう　わたしたちの町　北白川」を行いました。この単元のねらいは二つあります。一つは，今から60年ほど前の先輩が何に興味をもち，何をいかに調べたのかを知ることで，当時の子どもたちに思いを馳せること。もう一つは，より広い興味をもって自分たちの住む北白川について知ることです。

この学習は，①北白川における建物や人物，風習，産業などの様々な課題の中から調べたいと思う対象を見つけ，それにまつわる情報を収集，②同じ対象を選んだ子ども同士でグループを作り，何をどんな方法で調べるかを議論，③学習してきたことをグループでまとめ，保護者や地域の人々へ発表（図2），④振り返りとして学習をとおして気づいたことを各自作文や絵にまとめる，という流れとなっています。②については，『北白川こども風土記』やパソコンで調べたり，保護者や地域の人へ聞き取りをしたり，実際にその場所へ行き観察したりするというものです。なお，この学習では，実際に同書の著者の一人を招いての校外学習も行われました。また③においては，学習に取り組んだ児童から，「もっと北白川のことについて知りたいと思った」などという声がありました。

図2　北白川天神宮について発表する子どもたち

このような同校の取り組みは，当時の児童の足跡を実際にたどることにより，彼らが地域をどのように捉えていたのかを知る術になります。『北白川こども風土記』の帯にもあるように，「子ども達の目で見，耳で聞き，足でたしかめた郷土の歴史」について，時間軸を超え地域を題材に学ぶ実践といえます。この授業実践は，同校教員が過去に同書の存在とその価値に気づいたのがきっかけで始まりました。

4．調べ学習で学校資料を活用する意義

『北白川こども風土記』の刊行以後，小学校で作られた「子ども風土記」は多数あります。『北白川こども風土記』が作られた1950年代後半は，高度経済成長期の初期です。経済的・物質的な豊かさと引きかえに，先人の大切にしてきたものを喪失するという危機感ゆえ，“いま”を記録しておかねばという思いから，「子ども風土記」のような調べ学習の成果物が生まれたのかもしれません。なかには社会科や総合学習などの一環として作成され，児童がそれを使って学習することをねらいとしているものもあります。つまり，特に子どもの書いた「子ども風土記」は，調べ学習の成果物であるとともに，新たな調べ学習を生み出す可能性をもつ学校資料です。

「子ども風土記」は地域の様々な事象について書かれていることから，地域の歴史や文化を知るうえで役立ちます。このような学校資料を活用することは，子どもが身近な地域の課題に主体的に取り組むことで，地域をより良くしていこうとする問題解決能力の向上や対話的な学びにつなげることが期待できます。また，「子ども風土記」のような学校資料を調べ学習で活用する意義は，家庭や地域の人々と連携・協働する機会を創出することにもあります。地域の魅力の再発見につながる媒体となる学校資料を探し，活用してみませんか？

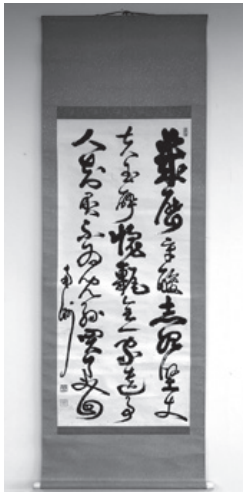
コラム3

学校資料を使った「書道」の授業
―社会科だけじゃない―

村野正景

学校資料は社会科の授業以外にも活用されています。京都府立鴨沂高等学校では，学校教材として印刷・複製された西郷隆盛の書や，かつての生徒の作成した書を素材とする授業が実施されました。

「100年前の先輩が残した作品のように，今しかない若々しい主張を墨と表具で残す。」をテーマに，まずかつての生徒作文を鑑賞し，読み下し，資料に十分向き合いました。この生徒の作文主題が「作文の真髄」でしたので，現在の生徒もこれを参考にしつつ，自らテーマを設定し，自らの思いを作文しました。そしてそれを「漢字仮名交じりの書」として作品創作に挑みました。さらに表具師に出前講座を依頼し，生徒自ら



西郷隆盛「偶成」

大林サダコ「作文の真髄」

作品を読み解く

表具師に教わる

軸装をおこない，最後にできあがった作品の鑑賞会をおこなったのです。生徒は，授業の過程で読解力や思考力，表現力をつちかうことができたでしょう。さらに「普通の高校では考えられないことなのでとても幸せで，めぐまれているなと思う反面，しっかりと文化財として守っていかねばならないという責任もある。」という生徒の感想からは，学校資料への関心の高まりもうかがわれます。

鑑賞会をおこなう

第3節

学校資料を地域の施設で展示しよう！

井尻智道

はじめに

この節では，学校資料に詳しくない博物館・図書館・公民館等の職員が，どうすれば分かりやすく展示できるか考えてみます。

筆者（井尻）自身も地域博物館の民俗担当分野の学芸員であり，学校資料に関する知識はほとんどありませんでした。ただ，国立や都道府県立，政令指定都市等の博物館・資料館以外の施設では専門分野ごとに学芸員を配置しているところは少ないです。博物館には一般的に考古・歴史・民俗分野の学芸員が置かれていますが，市町村立の小規模館ではこれらすべての分野を1人で担当するところや教育委員会の文化財担当者が兼務するところが大半です。しかし，利用者からレファレンスがあった場合，その内容が専門分野でないからわからないという言い訳は通用しません。つまり，さまざまな分野のレファレンスに対応しなければならないのが実情です。

「博物館にはいったいどんなものがあるの？」「いつも何をしているの？」など博物館を利用したことのない人からは，よくこういった質問を受けます。大きな建物，静かな展示室や事務室でどんなことをしているのか，疑問に思う人がいてもおかしくありません。簡単に言うと博物館では，昔のことを調べ，多くの人にその成果を紹介しています。その中でも，地域にある小規模館は，地域に密着した内容の活動を行っています。具体的には，地域に関連のある古文書などの歴史資料や古くから使われていた生活用具などの民俗資料を収集・調査し，公開しています。収集について，一例をあげると，古く汚く，更には破れていたり壊れていたりするものがあるとします。ほとんどの人がそれを価値のないゴミと判断し，それらは捨てられる運命となります。こうしたものを拾い上げ，歴史的な価値を見出し，多くの人々に伝えていくのが博物館学芸員の仕事です。

例えば，1軒の家が建て替えのため取り壊されることなると，ほとんどの場合，住んでいた人の必要とする価値観や現在の基準で物が残され，その他のものは，家の部材と一緒に廃棄されてしまいます。ただ，こうした古いものたちにもひょっとしたら価値があるのではないかと思う人や運よく博物館の存在を知っている人がいると，博物館へ電話がかかります。「家を壊す前に整理をしていたらこんなものが出てきた。捨ててしまう前によかったら見に来てほしい。」といった具合です。行ってみるとすでに古美術商などの業者が入り，整理された後の場合が多いですが，まれに手付かずの状態で資料が残っていることがあります。ほとんどの場合，こちらの希望する物（資料）はその場でいただくことができます。「どうせ捨てるのだから，役に立ててもらえば」と言っていただき，博物館の収蔵資料に加えられます。「うちにこんなものがあるんだけどよかったら見に来てくれない。」この連絡を受けると筆者はなるべく早い段階で行くようにしています。過去に行く日が遅くなり，資料が捨てられていたことがあったからです。

前置きが長くなってしまいましたが，この話は，学校資料にも置き換えられます。ただ，一般家庭に比べてもっと資料が捨てられる危険性が高くなるのが学校現場なのです。学校は耐震基準など安全性を確保するなどの理由により，数十年単位で改修や建て替えが行われます。また，学校の先生は校長先生をはじめ3年程度で別の学校へ異動することが多々あります。普段は子供たちへの指導のため，身の回りの整理ができないのですが，他校へ異動する時には，一定の整理が行われてしまいます。また，学期末や年度末には大掃除も行われます。これらは学校資料にとって最も危険な時期です。

こうしたなかで，近年少子化が進み，国が示す小中学校適正規模を基準に学校の統廃合計画が日本各地で日々進められています。統廃合が進むと学校施設はもちろんのこと必然的に使われなくなった古い資料類が

整理され捨てられていくことになります。資料の価値を知らない人が手に持った際にゴミ箱に行くか整理箱に戻されるのか，それが大きな境目となります。こうした状況を想像すると，学校資料の大切さを広く人々に伝えていくことは，まった無しの状況であると言えます。

1 筆者の経験

学校資料を展示する前には，どこにどんなものがどれくらいあるかを知る必要があります。調査時に必要なものは，鉛筆（資料を汚したり，傷つけたりしないため。シャープペンシルも不可。ボールペンやマジックはNGです。），布メジャー，ノート又はメモ，カメラです。基本的にこれらがあれば心配ありませんが，暗い場所での作業や汚れた物を触ることもあると思うので，懐中電灯や手袋・マスク・タオルなどもあると便利です。

さあ，それではいざ調査現場へと話を進めていきたいところですが，まずその前に私がどうして学校資料と向き合うことになったかお話しします。

筆者が勤務する博物館のある南丹市域では2010（平成22）年9月頃から市内の小学校を再編整備する話がもちあがりました。地域と行政間の話し合いが何度も開催される中，2013（平成25）年6月，市議会で「南丹市立小学校及び中学校設置条例の一部改正」が可決，翌月には市教育委員会で同条例の改正に伴う教育委員会規則等を改正しました。これから約2～3年かけて南丹市園部・八木・美山地区の15校を5校に再編することが決まりました。（表1）

地区	再編対象校	再編年	再編後校名
園部	園部・摩気・西本梅小学校	平成27年4月	園部小学校
	園部第二・川辺小学校	平成27年4月	園部第二小学校
八木	八木・吉富小学校	平成27年4月	八木西小学校
	富本・新庄・神吉小学校	平成27年4月	八木東小学校
美山	宮島・平屋・大野・鶴ヶ岡・知井小学校	平成28年4月	美山小学校

表1

再編時期が具体的に示されたことにより，2013（平成25）年8月から「南丹市立小学校再編実施本部」が立ちあがり，「施設利活用」「実施準備」「子育て支援」「財政」の4部会が設置されました。これらの部会では，遠距離通学となる児童の通学手段の問題や新校章・校歌制定，廃校となる校舎の跡地活用などの議論は活発に行われましたが，残念ながら学校資料の保存に関する議論はさほどされませんでした。結果的には，閉校記念誌や記念碑などが各校で作られることにより，歴史的な事象がまとめられた感が残りました。ただ，廃校となる校舎のなかで，旧吉富・旧平屋・旧知井小学校の校舎内には学校資料を用いて資料室が設けられました。いずれも学校に関係していた住民らが主体となったもので，現在も開室されています。

学校資料の保存について，議論が少なかったことについては前にも書いた通りですが，再編までに時間的な猶予がなかったことに加えて，歴史的な資料をどのように扱っていくべきか判断が難しかった面があるのではないかと考えています。そこで，こうした歴史資料を扱うことができる南丹市立文化博物館に一定の方針を出すように委ねられました。ただ，博物館では民家レベルの資料を扱う経験はあったものの，約2年間で10数校も学校が再編され，学校が所有する多くの資料を確認しなければならなくなりました。しかも，短期間のうちに資料の調査・移動等を行わなければ，資料が喪失してしまいます。こうした危機感が一瞬，頭をよぎりました。

しかし，それだけ広範囲の調査活動等を，博物館の限られたスタッフで行うことには限界がありました。そこで，大いに助けられたのが，毎年，大学の夏期休業期間を利用して博物館へくるインターンシップ研修生や博物館実習生の存在でした。博物館では研修生や実習生と共に作業をおこなう形で調査計画をまとめました。ただ，いきなり学校資料を見せて欲しいと学校へお願いしてもいったい何がそれにあたるのか，現場の先生方には判断できないのです。博物館が資料の詳しい分類項目を作りそれに当てはめて資料の有無や数量を確認してほしいと先生にお願いしたところで，資料がどの項目に当てはまるのかが先生にとってはっき

りしなければ，余計に時間をかけてしまう可能性も考えられました。そのため，取り急ぎ，「歴史」「民俗」「美術工芸」という3つに大きく分類して資料を当てはめ調査票に記入してもらうことにし，調査依頼を学校に行いました。もちろん，この3分類に該当する資料の具体例は調査票に記入しておきました。しかし，学校から提出されてきた調査票には，ほとんど資料が記載されていませんでした。今回の調査を行うまでに開催していた展示会等で学校から資料の借用を行っており，かなりの点数が各学校には残っていると想像していただけに，この結果には衝撃を受けました。学校では，資料の把握ができていないのか，それともどれが資料にあたるのか判断がつかなかったのか，さまざまな想像が頭を巡りましたが，学校現場では，子供たちの指導に追われ，学校資料の調査まで手が回らないのであると改めて思い直しました。

後日，提出を受けた調査票に基づき，学校へ調査に行ってみると，大半の場合，資料室，倉庫，教材室あたりに，民俗資料や標本資料などが押し込められていました。また，学校日誌や周年事業の写真資料などは校長室のロッカーや棚にありました。法令上，学校での保管が義務づけられている学校沿革などについては，拠点校に引き継がれるため，基本的に外部で保管することが難しいのですが，その他のものは収集することが可能でした。ただ，すべてを持ち出し，保管することは限られた収蔵庫のスペースの関係で不可能なことでした。何を基準に選択するのかを少し考え，地域や学校でその学校独自のものや年代や学校名等の文字が記された歴史資料が中心になりました。民俗資料でも文字が書かれたものや，地域特有のものについても拾いました。しかし，卒業制作，石造物など学校の特色が出ていたものもありましたが，大型で構造物として建物に付随しているものが多く，持ち出しは困難だったので，記録写真の撮影や採寸を行うことに留めました。ただ，幸いなことに，南丹市内では，その後施設の跡地活用が議論されることになっており，校舎の取壊しを行うものはありませんでした。このため，残してきた資料類は当面の間，施設内に置かれることになっていました。しかし，今後の活用に向けて不特定多数の業者や住民などが出入りすることになるので，

いつまで資料類が保管されるかは確約できない状況でもあります。収集活動が一旦終わり，収集できた資料は一定の選別を行ったためそれほどの量にはならなかったものの，市内の学校の歴史を概観できる資料を収集することができました。

こうして，後に開催する園部・八木・美山地域ごとの展覧会で展示する資料が博物館で保管されることになりました。南丹市の場合，閉校するまでの期間が短く，整理の方針が十分に検討されないままの調査活動，資料保管となりました。統合されるまでの期間に余裕がある場合は，検討委員会等の組織づくりを行い，資料の活用・保存について計画的に事業が展開されることが理想的です。

2 展示前にやること

（1）参考文献の収集

展示を始めるまでに予備知識を得ておく必要があります。近隣に先行事例がある場合は，その施設の担当者に問い合わせることができますが，知識が不足している状態では，話が進みにくいので，事前にある程度の知識は得ておきたいものです。

まず，基本的な情報を得るために最初は入門書的な書籍を選び読んでみましょう。地域の博物館・資料館からも参考となる展示解説図録等が発行されているので，これらも候補資料になります。特に展示会図録には一般書籍とは違い，写真や図版が豊富に掲載されているので理解しやすいと思います。また，書籍類には必ずその文章（記事）の根拠となる資料や書籍等の引用先が記されているので，より深く知りたい事柄は，記載された文献をあたってみるとよいでしょう。こうして文献類を読み進めていくうちに自身が探している資料や記事が見つかることがあります。参考となる文献については，巻末に記すので参考にしてください。

（2）資料の確認

参考文献を読み，基本的な知識を得たあとは，どういった学校資料が

近くにあるかを把握します。基本的に学校資料は，学校で使われたものや現在使用しているものを指し，現在の学校施設や旧校舎等にあります。しかし，前に記した通り学校の先生方は，学校資料が貴重な資料であるという判断がつきにくい面があります。このため，汚いから，古いからといった理由で，簡単に廃棄されたり，棚の奥や段ボールなどに入れられ，倉庫の奥に積まれたりすることになります。

資料を集めるためには，こうした学校資料をまず探すことが必要となります。しかし，先生方は，日常の児童・生徒の指導があるため，こうした資料の捜索に時間を割くことは難しく，結局のところ展示担当者が現地に赴いて資料を探すことになります。ただ，面識がなく急に学校へ行っても不信感を与えてしまうだけなので，事前に事業の趣旨を記した説明資料やわかりやすい調査票等を送付した上で，現地を訪れるようにしたいものです。調査・収集活動等を円滑に進めていくためには，良好な人間関係の構築が不可欠です。

そして，万が一，調査を行う段階で保管を前提に資料を持ち帰ることができるならば，借用書と引き換えに持ち帰ってもよいと思います。「これは大事なものですから残しておいてください」と伝えたとしても，複数人の人が管理する状況になると，誰がどこかのタイミングで廃棄してしまうかわからないからです。もちろん保管施設等に余裕があることが大前提です。返却が必要な場合も，現状を損なうことなく整理し，丁寧な梱包を施して返すと今後も大切に保管される可能性が高まります。

（3）資料の調査

学校や施設にどの程度の資料が残っているかを確認する方法ですが，資料については学校・施設ごとに台帳を作成し，目録化していくと展示作業の時に役に立ちます。ただ，最初から詳細なものをつくると作業効率が悪くなるので，現地でしか情報を得られないものを選択して記載しておくと効率もよくなります。資料名称，年代，文字情報，使用用途などに加えて，資料の大きさも計測しておくと，展示スペースを確認することができます。この資料調査票に書ききれない情報は，カメラで撮影

し記録しておくと，書き漏らした情報等がカバーできるでしょう。

写真を撮る際には，全体像はもちろんですが，文字や素材などその資料の特徴をとらえてできる限り多くの枚数を撮影しておきましょう。その資料はいつ破棄されるかわからないので，その点も留意しておくことが必要です。全体像を撮る際に学校名などを冠した番号（仮の番号でもよい「〇〇小学校A□□□」など）を資料に添えて写し込むとおくと後日の確認が容易になります。また，その番号を事前に用意した付箋や糸を付けたタグなどをつけることが可能であれば行っておくと後日訪れた時に整理しやすくなります。

また，学校以外の施設や家庭にも学校資料は多く存在します。古くからある施設や民家，地域の会議所にも資料がある場合があるので，情報を収集しておきましょう。特に建て替えられていない状態の建物に残っていることが多いです。学校の教職員OBや郷土史家なども資料を把握している可能性が高く，訪ね歩くうちに学校資料に出会うことがあります。人づてに紹介されていくことも多く，常々，情報の網をかけておくとよいでしょう。

調査をしていく上で，具体的な資料がでてこない場合は，聞き取り調査をすることもお勧めです。この調査は，文献などにも掲載されていない地域特有の情報や今まで不確定な部分があったものをつなげてくれます。ただ，聞き取り調査にはどうしても記憶が曖昧なものも出てくるので，正確な情報を得ていくために，なるべく多くの人々から情報を得るようにしましょう。その中でも歴史的な事実として確認できる事項がでてくれば，その都度確認を行います。せっかく展示をするのですから，利用者に対して正確な情報を伝えるようにしなければなりません。

（4）学校資料の具体例

学校から出てくる代表的な資料は，学校沿革誌，学校日誌，学校施設に係る建築図面，周年記念誌，記念写真，記録写真，式典の祝辞，寄付金礼状，修学通知書，各種会議一件書類，郷土調査（子供風土記），学校教材などです。

学校沿革誌については，法令で永年保存することが定められているので，必ず学校には備え付けられています。周年記念誌等の発行の際には必ず引用されるもので重要資料の１つです。ただ，基本的に学校長が記すことになっており，必須項目等が設けられているようではないので，開校からすべての事項が網羅的に記されているとは限りません。後日に書き足したものもあるので慎重に取り扱う必要があります。

学校日誌については，その日に起こった出来事を記入しているので，沿革誌に比べると詳しい情報を得ることができます。当日の行事や休んだ先生の名前，チャイムの設置など意外な発見も期待できます。ただ，法令上は，5年の保管規定があるのみなので処分されていく可能性が高くなります。古い日誌を見つけたときは，是非保管を勧めます。

周年記念誌については，開校10年20年…100年など節目を迎える年に発行されます。編集者は学校の先生や学校の役員，地域の人になることが多く，過去に掲載された記念誌の情報をそのまま掲載することもあるので，間違った情報がそのまま継承される場合があります。引用するときには注意が必要です。ただ，写真資料等は利用価値が高いものが掲載されているものもあるので，一通りは揃えておきましょう。

学校の設計図（建築図面）や各種申請書については，自治体やその自治体を所管する都道府県に残っている場合があります。学校を建てる時には，教育委員会や町村議会などで必ず審議を行っているので，こうした機関の議事録や決議一件に書類が残されているのです。都道府県に対しても許可申請を提出しているので，地域に該当する公文書館などを探してみるのも手段の一つです。また，都道府県への申請を行い，その認可を受けているので，その経緯も確認することができます。近隣の市町村にも建築の参考資料として，当該校以外のものを保管している場合もあります。

子供たちが学習の中で調べた「ふるさと調査」と呼ばれる地域の歴史本も有効です。教員が加わり，子供たちが地域のお年寄りに当時の様子などを取材しまとめあげるものがほとんどの形態であると思われますが，ヒント（糸口）を与えてくれるものとなります。学校建設にかかわった人々の自宅には当時の資料が残されていることも多くあります。地域によっては，小学校3・4年生の児童を対象にした地域の特色や歴史などをまとめた副読本を作成し，学校の授業と対照して使用しているケースもあるので，頭に入れておく必要があるでしょう。

（5）展示構成の検討

紹介する学校（学区）のある地域はどのような背景をもっているかをまず知ることが大切です。どういった経緯でこの場所に建てられたのか？海や山に囲まれており，通学が不便であったのではないか？その施設は新設なのか古い施設を利用したのか？学校建設に尽力した人物はいたのか？地域の人々はどのように学校を感じたのか？他の地域に比べて学校の建設が遅れたのはなぜか？など不思議に思うことがたくさん出てくると思います。

面倒かもしれませんが，まず，時系列で出来事を整理して理解してみることも大切です。もし，つながらない場合は，知り得たキーワードをなるべくたくさん列挙してみてください。キーワードは，多い方が後々広がりをもたせることができるので，思いつくままにあげてみましょう。例えば「学校」「教員（偉人）」「産業（生業）」「校舎（建物）」「通学路」「戦争」「疎開」「給食」「修学旅行」「遠足」「夜学」「学務委員」「育友会」「学校林」などです。それを時代ごとにつなげていくと自然と学校や地

図1 教科書

域の歴史になっていきます。抜け落ちた部分は後からでも補えばよいのです。最初から完璧にしようと思わず，どんどん進めてください。

また，展示できる学校資料が豊富にある場合は，資料の性質や時代により分類し，構成を組み立ててみるものよいでしょう。教科書を例にとると「江戸時代の手習い本」「明治前期の教科書」「戦前戦中戦後の教科書」「現代の教科書」のように，時代によってはっきりと変遷していくので，観る側にとってもわかりやすくなります（図1）。これが，校舎であったり子供たちが使っていたものであったりしても時代を経て変遷しているので，現在との比較を交えることも，来館者の興味を引くことになると思います。展示資料が少ない場合は，施設に現在あるものに限らず，書籍などに載っているものも候補として挙げてみましょう。これらは近隣施設から借用することができるし，構想が進む中で学校や地域の保管施設または住民等から提供される可能性もあるからです。とりあえず学校に関係しそうなものなら何でもよいので，多くの素材を列挙してみます。こうしてリストアップすることで，資料の傾向がつかめ，展示構成が見えてきます。少ない資料点数の範囲から苦労して考えるよりも，多くの資料から省いていくと展示構成もたてやすくなります。

最後に，構成の中で，どうしてもつながらないところや地域の特色など欠かせない部分がでてくると思います。これは，トピックスやコラムなどを設けて独立して紹介するとよいでしょう。

3 展示構成の案

（1）3つのタイプ

ここでは展示構成案を3つのタイプにわけて考えてみたいと思います。必ず分類できるというものではないのですが，事例として参考にしてください。

① 通史タイプ（導入）

目的：学校資料を通史の中で理解する。

明治5年に学制が発布され近代教育がスタートしますが，これより以前の教育の仕組みをまず紹介してみましょう。江戸時代から続く流れとして，藩の子弟を対象にした藩校，郷学，寺子屋などがそれにあたります。また，現在と違って法令が施行されても都市部と地方では実施にタイムラグが生じていた時代があるので，地域それぞれの状況を把握して，該当する資料をあてはめて行きましょう。

② トピックスタイプ

目的：伝えたい内容を選択して伝える。

時代の流れの中で資料を紹介するのではなく，一時期にスポットをあてたものです。先に記したキーワード的な発想になりますが，特に多くの資料がある時に有効になると思います。いつくかの項目を合わせて展示を構成してもよいでしょう。わかりやすい例では戦前・戦中・戦後の教育があげられます。特に，この時期の教育は歴史的に特異なものであり，戦争の悲惨さ平和の尊さを伝えていく素材として活用したいものです。例えば，子供達が使う教科書なども，戦前・戦中は軍国主義が強調された内容になっていましたが，戦後は，一転して戦争を連想する図柄や記述を否定するようになります。黒く塗りつぶした「墨塗り教科書」は広く知られているところです（図2）。

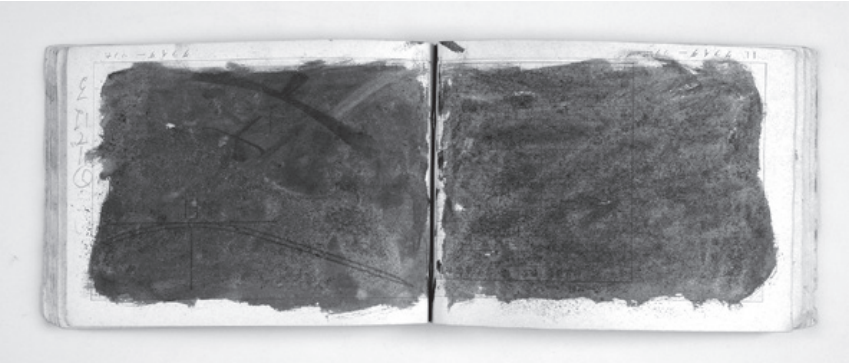


図2 黒塗り教科書

③ その他

目的：他の内容とミックスして展示できる。

学校資料をポイント的に使用することで，その時代背景を紹介することもできます。つまり，展示のメインで使用するのではなく参考資料として活用してみます。例えば，明治・大正・昭和時代の変遷を示す資料として学校の入学・卒業写真を使って時代を考えてみるのも面白いのではないでしょうか。服装や髪形などもかなり違っていると思います。

（2）対象者を想定する

展示する場合その施設を利用する対象者の年齢層を考える必要もあります。大まかには「大人」と「子供」にわけられると思われますが，人それぞれの経験値でも知っている内容は変わってきます。もちろん子供でも「小学生」「中学生」「高校生」という一般的な分け方もあり，それぞれ伝えたい内容も異なってきます。

例えば「戦争」を「体験している」「していない」でも展示を見る目が違ってきます。当たり前のことですが，体験していると説明を読まずとものを見ただけである程度，そのものの理解ができてしまいます。これとは逆に知らない（興味がない）と読むだけではわからないこともあります。こうした人に，資料の魅力や面白さを伝えるのは難しいことですが，わかって面白くなるとよき理解者（リピーター）にもなりうるので，展示する側の工夫が問われます。

（3）現在と比較する

現在社会に暮らす人々は，今の暮らしを当然のことと感じ，以前の暮らしがどうであったかを知ることを積極的に行わない（知ろうとしない）ことが多いのではないでしょうか。便利な道具があることが当たり前になっているのです。学校資料や教育史にとっても同じ事が言えると思います。ここで数例をあげてみることにします。

校舎（建物）について考えてみると，現在は設置する市町村などの自治体が校舎を建てそれを管理しています。ただ，明治の開校当時の学校は，

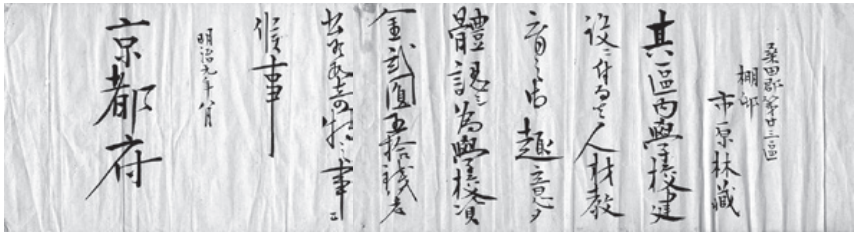


図3 寄付金証書

京都市を例にとると，地域のコミュニティーの核として，消防や警察機能を併せ持つ施設として存在し，地域が管理しています。学校建築には莫大な経費を必要としますが，以前は現在のように義務教育制度や公的な補助制度も整っておらず，その多くは，地域に住む人々の寄付金などより行われていました。既存の建物を利用する場合も多く，新規に校舎を建築することは地域にとって大きな負担となっていました。また，学校制度が普及しておらず，地域の人々の理解を得るのはたやすくありませんでした（図3）。

建設についても市街地など人口が多い地域では，京都市のように比較的小さな単位で学校が形成されましたが，郊外となるとその状況も違い広範囲となりました。

戦後は，男女平等社会を目指した施策が進められますが，女子への教育については近世以降からの考えが残り，育児や家事が重視されて十分な教育が受けられませんでした。現在のように核家族化が進行していないこともあり，小さな子供でさえも，家族を支えるための重要な役割を担っていたのです。

修学旅行や社会見学なども大きく形を変えているものの一つです。今や海外へ出かける学校も少なくありませんが，戦中などは国家神道とも結びつきがあり，伊勢神宮や橿原神宮などへの参拝を兼ねたものが目立ちました。社会見学についても，昭和50年代から使われ始めた言葉で，それ以前は近隣へ遠足に出かけることが多く，戦中はこうした行事の名に「行軍」や「訓練」などの文字を使った行事が増えました（図4）。

学校の名前が大きく変わったのが，昭和16（1941）年4月に誕生した

図4 伊勢神宮への参拝

国民学校です。通常の教育が停止するなど最大の変化が起こった時代です。「欲しがりません勝つまでは」などを合言葉（スローガン）に，日本国民が一丸となって戦争を支援しなければならない時代です。その時代の教育には特筆すべき事柄が多くあります。「勤労奉仕」「軍事教練」「学童疎開」など子供たちも戦争を支える役割を担いました。こうした事柄を示す資料は，多くの地域で残っていると思います。（図5）その代表的なものには，〇〇国民学校と記された修業証書や卒業証書などの証書類，戦争を連想させる兵士や軍艦，戦車などが掲載された教科書，図工の時間に描いた絵や製作した工作などです。通知表や賞状類にも国民学校の文字がみてとれます。また，当時の写真も比較的残っている場合が多く，当時の様子を知ることができると思います。学校教材として活用されていた8mmフイルムや集会所等で上演された紙芝居なども自治会に残る場合もありますので探してみてください。

戦時中は，現在のように情報が発達していなかったため，新聞や雑誌を情報源としていました。映像をみる機会も少なく，映画産業もその思想普及に一役も買っていました。フイルムや紙芝居等についても，現在の媒体に変換し展示会場で放映すると，当時の様相を伝えることができると思います。

図5 勤労奉仕

学校給食については，近年，地産地消が注目を集めていますが，導入時期やその経緯などを紹介してみるのも面白いのではないでしょうか。米飯給食や弁当持参などが実施された時期にも地域の背景にも違いがあるので，こういった面も深めていくと他の地域と差別化できると思います。

（4）過去の地域学習を手がかりとする

学習指導要領でも地域学習は重要とされていますが，明治期や大正期にも地域調べが行われています。現南丹市美山町でも昭和初期にこうした事例があります。これは「郷土調査」という表題が記され，郷土の歴史や民俗，統計などを子供たちが調べて，教員がそれらをまとめています。（図6）昔から郷土は子供たちにとって身近なものであり良い材料であったことがわかります。また，昭和50年代から平成に入るころまで，小学校では，授業の中でふるさと学習を取り入れています。「こども風土記」とも呼ばれているものです。（2章コラム参照）正規の授業の中で行われる場合や夏休み等の休業期間を利用する場合があったようです。児童が地域に残る文化財や民俗行事，各種統計などを調査し，教員がそれらをまとめ上げて冊子として残しています（図7）。こうした内容も地域の実情を知るための一つの手がかりとなります。

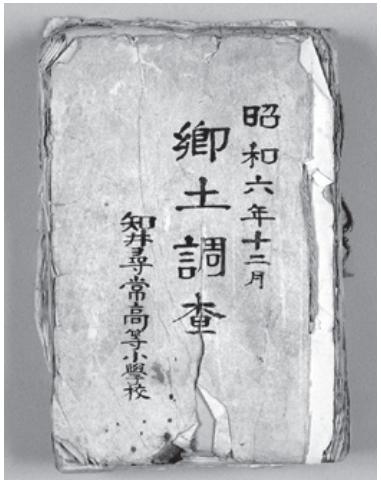


図6 郷土調査

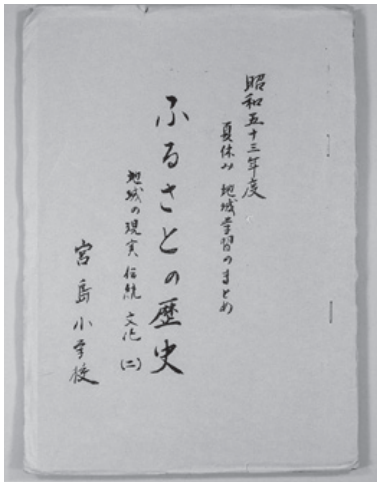


図7 ふるさと調査

4 展示の実際

（1）展示会場

展示会場には，展示ケースや温湿度の管理ができる空調設備が整った会場が常に準備されているわけではありません。地域の公民館や駅の一角，商店のショーウインドーなど，こうした場所にも学校資料が展示されることが想定されます。ケースがある場合は，資料の破損や盗難が起こる心配は低くなりますが，露出展示する場合は，監視員など資料を管理する人が必要です。大切な資料を後世に残していくために，こうした点は押さえておきたいものです。

文化財を守る会や郷土史の研究家（愛好家）が作る団体などは各地にあると思います。こうした団体の研究発表会や展示会の取組は公民館等を会場に行われます。例えば，京都ゼミナールハウス（京都市京北町）を会場にしている友の会では毎年，地域とのふれあい活動の一環で展示会を開催しています。そこには，専門家がいるわけではなく団体の役員により展示内容が考えられています。ここでは長年文化財保護委員として活躍する人物が大きな位置を占めています。こうした人物とのつながりを増やすことで，地域に入り込んでいくことができるのです。人と人がつながることで，地域の歴史や伝承などに詳しい人や資料類を紹介してもらうこともできます。こうした人々は，歴史や文化に興味がある人なので，時間を惜しまず協力をしてくれる可能性が高く，今後の施設の活動をサポートしてくれる存在となります。

（2）具体的な作業

展示会で伝えたいメッセージを簡単にまとめ，あいさつ文で掲出します。また展示構成にしたがってコーナーごとの概略文章を書きます。説明内容を盛り込みがちになりますが，文字数は多くても200文字を超えないようにしましょう。詳しく説明したい内容は，展示資料そのもののキャプション（説明板）に落とし込むようにします。概説の文章を読んだ

だけで，そのコーナーで伝えたいことがわかるようなものにすると観覧者も疲れずに展示をみることができます。

展示ストーリーに対応する資料がすべて揃っている場合は少ないと思います。足りないものは近隣の施設などから借用するか，借用が難しい場合は写真パネルで紹介しましょう。近年は簡単に手元で印刷が行えますし，大判印刷などはデータさえ提供すれば印刷業者でも比較的安価に行ってくれます。パネルやキャプションの素材もハレパネ（のり付きパネル）を使用すると綺麗に仕上げることができます。また，繰り返し使える簡易のアルミ製パネル（イレパネ）もさまざまな種類が市販されているので，近くの販売店やインターネットで検索して手に入れることができます。パネルやキャプションができれば順路を決め配置していきましょう。先にも触れましたが，借用している資料についてはなるべくケース内展示としましょう。そして万が一のことも考え，必ず損害保険には加入しましょう。

（3）広報活動

せっかく，苦労し時間をかけて考えて，開催する展示会なので，周辺地域の人々を含めて多くの人に観ていただきたいものです。そういう思いをもっているのは，担当者のみならず，資料の提供や聞き取り調査に関わった人々です。従来から多くの施設で行われている広報用のポスターチラシの配布に加えて，特色のある広報活動が望まれます。近年では，フェイスブック・ツイッター・インスタグラムなどのSNSを用いた広報活動を行う施設も目立ってきています。Youtubeで動画を提供することで効果を出している例もあります。

また，展示期間内にギャラリートークや特色のあるワークショップを開催する館も増えてきています。展示資料を観るだけでなく担当者などからの解説を聞くことでより内容が理解しやすく，参加することで資料や作品が身近なものと感じられるようになってきているのだと思います。こうしたことはもちろん効果があります。しかし何といっても利用者の口コミは大きいと筆者は感じています。一人の利用者が他の人に話

す。そして，その人がまた他の人に話す。この連鎖反応が約1ヵ月前後の展示会等を盛り上げるのです。

5 事後検証

今後の展開に向けて重要なことになるので，事後検証は必ずやっていただきたいです。まず，基本的には，利用者の声を聞きそれを施設なりに咀嚼することです。利用者の意見については，極端に偏っている場合があるので，そのまま鵜呑みにすることはできません。ただ，当該施設では気づかない視点での意見が出る場合もあるので，施設の実情に合わせて可能なものから実現していきましょう。

展示期間中こそ情報収集にあたるチャンスです。期間中は，資料や内容に対して興味を持つ来館者が来られる可能性が高く，準備期間中にわからなかったことや今後の展開のカギになることを聞き出すチャンスでもあります。担当者が不在の時でも，該当する事柄に詳しい人が現れた時は連絡先を控えておくなど職員間の意思統一を図っておくことも必要になります。

また，今後の活動の課題を見つけ出すため，あらかじめ目標を設定しておきましょう。外部は数字で成果を求めることが多いですが，単純に来館者数で評価するのではなく，「新出資料を何件発見した。」や「アンケートの回答率を増やした。」「SNSのいいね！を何件以上得る。」など独自の視点を評価基準に盛り込んでもよいのではないかと思います。

おわりに

これまで，学校資料の収集から展示に向けた取り組みについてみてきましたが，最初は自身の理想とする形になる取り組みができるとは限りません。それは，十分な資料が揃っていないことや企画者の力量なども影響するでしょう。もちろん悲観することはありません。回を重ねるごとに手法がわかり，周りの理解者も増えてきます。焦らずに積み重ねていくことが大切です。一度の企画で全てを出し切るのではなく，さまざまな視点から継続した息の長い取り組みにすることで資料も活きてくるし，人も育ってくるものです。こうした小さな取り組みの輪が大きなものに育ち，広がりをみせるのです。今後の社会情勢から増えてくるであろう学校資料が，廃棄されることなくさまざまな場面で登場し，有効に活用されることを期待したいと思います。

最後になりましたが，学校資料に限らず，古いものを見つけたら，「埃をかぶっている＝汚い。」「壊れている。破れている。＝捨てる。」「書かれている文字が読めない。分からない。＝必要ない。」ではなく，まず考えて欲しいと思います。もしかしたら，この資料は世界に一つしかないものかもしれません。ここに書かれていることで新たな歴史的事実がわかるかもしれません。

市町村又は都道府県にはそれぞれ博物館や図書館が設置されています。そこには地域の実情をしる専門職員が配置されています。博物館であれば学芸員，図書館であれば司書です。こうした専門職員は地域に詳しいだけでなく，地域とのネットワークを持っています。その場でわからなくても，他の専門家を紹介してくれるのです。是非ともこうした機関や人材を活用してほしいと思います。

第3章

学校資料の保存と整理

第1節

何を保存・整理したらいいのか

和崎光太郎

はじめに

学校資料の保存と整理にあたって一番困るのが，「何を保存・整理したらいいのか」です。学校にあるものをすべて保存・整理するわけにはいきませんので，取捨選択する必要があります。もちろん，地域の学芸員に来てもらって取捨選択してもらうというのも良いのですが，そもそも近くにそのような学芸員がいないケースの方が圧倒的に多いかと思いますし，そのような学芸員が来て整理してくれるとしてもそれは資料が学芸員の目線で見られるということです。そうすると，ややもするとその整理は地域での学校資料の活用につながりにくくなってしまうかもしれません。

やはり，学校資料はその学校の関係者が見て，価値を見出して，活用するというのが理想です。可能な限り，学校の教員や保護者，地域の方々，児童・生徒などの学校関係者で整理しましょう。

ここでは，ぜひとも保存・整理しておきたい学校資料を，紙の資料と紙以外の資料とに分けて紹介します。ただし，注意して欲しいのは，**ここに紹介していない資料は捨てても良いということではない**，ということです。捨てる際には，できる限りで吟味に吟味を重ねてからにしましょう。

ちなみに，言い回しとしてしっくり来るのは「整理と保存」なのですが，学校資料の場合は捨てられそうになったものをとりあえず保存しておき後から整理することの方が圧倒的に多いので，本章は「保存と整理」になっています。厳密には，①とりあえず保存，②整理，③きちんと保存，の順番ですが，③は公立学校（公立の元校舎）や公民館では予算的にも人員的にも難しいので，①と③を同じこととして次節で扱います。

1 紙の資料

写真

写真は，保存しやすく，展示しやすく，教材にしやすいので，おそらく学校資料の中で一番使い勝手の良い資料です。写真は単に見ているだけでおもしろいので，整理そっちのけで見入ってしまう恐れがあるくらいです。特に，地域の方々が整理に加わると，思い出話に花が咲いて整理がまったく進まないこともあるでしょう（それはそれでよいのですが）。

できれば，学校にあるすべての写真を保存・整理したいところですが，そうもいかない場合は，一世代以上前（30年以上前）の写真は残す，児童・生徒が写っている写真は残す，などと的をしぼっても良いでしょう。フィルムやガラス乾板などは，保存するならできるだけ中身がわかるようにしておきましょう。

卒業アルバム

卒業アルバムはほぼ写真集ですから，写真の一種だと思っても良いのですが，写真以外にも貴重な情報，例えば児童・生徒の名前や学校でどのような行事をやっていたのかが書かれています。もちろん，個人情報が書かれていればいるほど，扱いには慎重にならなければなりません。

学校から業者に依頼してできた卒業アルバムを皆が同じように持って帰るようになるのは，1950年代から1960年代にかけてのことです。それ以前は，自家製の卒業アルバムや，「卒業記念帖」といって単に集合写真を貼ってあるだけのものなど，実に様々です。

教科書

教科書は，写真と並ぶ代表的な学校資料です。教員は，他の資料はすぐ捨てても写真と教科書を捨てるのには抵抗を感じるようで，学校には写真と教科書が実によく残っています。

保存にあたっては，書込みや学校名などの印があるものを優先しましょう。というのも，「教科書なんてどこにでも同じのがあるやろ」と思われがちなのですが，使われた瞬間に世界で唯一の教科書になり，その使われた証が書込みや印などだからです。

学校日誌

学校日誌は，解読できればおもしろいのですが，古いものでは1880年代からのものがあり，明治大正期あたりのはかなり崩された字で書かれていることが多いです。学校日誌が残っている学校と残っていない学校とでは，100年史や50年史といった記念誌モノの出来が大きくかわってきます。当然のことですが，保存するにしろ活用するにしろ，個人情報が書かれている前提で慎重に扱いましょう。

学校沿革史

歴代の校長，または校長代理の人が，日々のことを記録する簿冊です。人に読ませるために書かれるわけではないので事実の羅列になることが多いのですが，学校日誌と違い，明治初期から作成されています（ただしほとんど現存していません）。

校舎図面

古い校舎図面からは，昔はどんな校舎だったのか，今の校舎の昔の教室割がどんなだったのかなどを知ることができます。たまに，古い校舎図面が青色で写されたものが残っています。これを「青焼き」と言います。中には史料的価値が非常に高い青焼きもありますから，学校に残っていたら，地域の博物館に相談したほうがいいかもしれません。

その他，学校運営や学区に関する資料

以上の他に，学校にはよく「学籍簿」（戦後に「指導要録」になります）や「学齢簿」，「教員履歴書」などが残されています。これらは，教育学者や歴史学者が研究に使うことが非常に多い資料です。なので，学校に残っていたら，所轄のしかるべき部署に報告した上で，可能であれば近くの博物館や資料館，図書館などに連絡しましょう。そうすれば，研究者も使いやすくなり（たまに逆のこともあるようですが），教職員の手間も省けます。学区に関係する書類や地図などが残されている場合は，地域でも活用できますし，歴史資料としてどこかの博物館に寄託（※）することもできます。このように，地域ゆかりの資料の行く末を判断する上で大切なのは，かならず学校運営協議会などで地域の方々に意向を尋ねることです。学校や教育委員会で勝手に判断しないようにしましょう。

※「寄贈」は資料と一緒に所有権も移りますが，「寄託」は資料を預けるだけで所有権は移りません。

2 紙以外の資料

教材・教具（標本や模型を含む）

教材・教具には，各教科の歴史を知るという価値だけではなく，材質や形がおもしろいもの，レトロな雰囲気が漂うものなどは，骨董品としての価値があります。昔の教科書だけではなく，文房具や大きな地図，人体解剖模型，標本など，並べるだけで博物館の展示になりそうなものがあるとラッキーですね。たまに，博物館顔負けの貴重な標本や剥製が理科準備室などに残っていたりします。これは，1953年に理科教育振興法が制定されて市販の理科用教材が増えるまでは理科用教材として博物資料が使われることが多かったからです。ほかに，本来の役割は果たせなくても学校の歴史を物語るような教材・教具もありますから，様々な視点から資料を見て整理するようにしましょう。

備品

備品を全部保存したらたいへんなことになりますが，後世に残したほうがいいと思われるもの，例えば漆塗りの小さな黒板や，レトロな学校家具，謄写版（ガリ版）など，30年以上前にはすでに使われていなかったような備品があれば，できるだけ保存しておきましょう。

特に，展示や教材化に向いているのが，レトロな学校家具です。学校には，思わず家に持って帰りたくなるようなレトロな家具が残っていることがあります。無断で家に持ち帰ってはいけませんが，閉校後に元校舎で展示したり，地域の生涯学習施設や博物館で展示したり，総合学習や社会科の教材にしたりすることはできますので，ぜひ活用しましょう。

民具

学校に残る民具は，大きく分けて2タイプあります。まず，1990年代から全国の小学校で使われるようになった，社会科教材として集められた民具です。例えば京都市では，市立清水小学校を閉校後に調べると，地域とは何の関係もない民具がたくさんありました。その理由を同校の他の資料から特定した結果，教材として集められたことがわかりました。

もう1つのタイプが，地域に根差す民具が博物館がわりに学校に集まってきたというパターンです。古い家を壊した時などに，近くに博物館がなかったり近くの博物館で受け入れられなかったりすると，小学校に持ってこられる傾向があります。小学校は時代と場所によって紆余曲折はあるものの地域のコミュニティセンターであり続けてきましたから，このような博物館的な役割も果たしていたのです。

土器や石器など

社会科準備室や廊下の展示ケースの中には，よく土器や石器があります。学校に残っている土器や石器などが本物なのか複製なのかは，モノによっては一般人にはなかなかわかりません。本物かもしれない感じが少しでもあるのでしたら，地域の博物館や埋蔵文化財センターにいる考古学を専門にする学芸員・職員に来て見てもらったほうがよいでしょう。複製だとわかれば取捨選択しやすいのは確かですが，前述した「教材・教具」と同じく複製には複製資料としての価値があるので，複製だからといってすぐに廃棄しないようにしましょう。

美術工芸品

土器や石器などと同様に，美術工芸品が本物なのか複製なのかを見分けるためには学芸員などに頼らざるを得ません。本物だとごくまれにかなりの値段がつく場合がありますので，鍵のかかった部屋に保存するなど扱いには十分注意しましょう。美術工芸品は，他の資料に比べて地域の方々や卒業生の思い入れが強いことが多いので，活用したり博物館に寄贈・寄託したりする場合には地域の方々や同窓会との十分な話し合いが必要です。

第2節

どうやって保存・整理したらいいのか

和崎光太郎

1 校舎で保存するということ

資料の保存といえば，普通は博物館や資料館，図書館などの収蔵庫での保存をイメージされるのですが，学校資料はそうはいきません。というのも，量が膨大なので収蔵庫に入れていたらすぐパンクするからです。たいてい，校舎や元校舎（以下，本節で校舎という場合には元校舎も含みます）で保存されます。

実はこのことは，逆にメリットにもなります。日本の小学校は，近代学校制度が始まった明治初期から地域と切っても切り離せない関係にあり続けました。それも5年や10年ではなく，50年や100年，学校によっては150年近くもその関係は続いているのです。なので，学校資料は他の場所に持って行かずに，学校がある（あった）地域で活用するのが，最もふさわしいあり方なのです。そのためにも，学校資料はできるだけ校舎で保存したいものです。では，資料を校舎で保存するには，どうしたらよいのでしょうか。

公立学校，特に小学校では，1980年代から余裕教室（空き教室）をどうするかといった問題が現場から立ち上がってきました。その活用の一環として学校資料の保存場所や展示場所にしてしまうのが，余裕教室にとっても学校資料にとっても学校関係者（教員・児童・学区住民など）にとっても良いのです。これを**学校版「三方良し」**と名付けましょう。これは理想論ではなく，すでにそうなっている学校が多々あります（第1章第1節をご覧ください）。というわけで，本節では校舎での資料の保存方法をお話しします。

基本的には各地の大学で開講されている学芸員課程の資料保存論で学習することをやっていけばいいのですが，大学で習うのはあくまで収蔵庫での保存ですから，校舎ではできないことがたくさんあります。そもそも，学校資料に最も距離の近いのは教員ですが，教員のなかで学芸員資格を持っている方はほとんどいないのが現状です（大学で教員免許と学芸員資格を取ると相当な単位数になるのでかなりキツイのです）。結局は，その場その場での最善を尽くすことが必要になってきます。保存方法といっても難しいことではなく，校舎での資料保存はどういったことに気を付けていけばいいのか，ということを理解して実践していけばいいのです。以下では，築60年の鉄筋校舎を想定してお話しします。

2 何が敵か

保存にあたっての敵は，とにかく湿度です。次が光，次が虫です。最後が温度です。学校にある資料は，フィルムとか以外は基本的に温度には強いので，温度の上がり下がりによる湿度変化（※）という文脈でだけ，温度のことは気にしておけば十分です。

※ 温度が上がると湿度も上がります。水は個体→液体→気体と姿を変えるので、温度が上がると空気中の水分が増えるからです。例えば，冬に洗濯物が乾きにくいのは，寒いので空気中に水分が出て行かない（＝空気の湿度が低いまま保たれようとする）から乾かないのです。ちなみに，冬にお肌が乾燥するのはこれとはまったく別の原理です。

湿度にはとにかく気をつけねばなりません。**湿度が60を超えるとカビが生えたり虫が湧いたりする**というだけではなくて，**湿度が上がったり下がったりしたら布と紙は伸縮して傷んだり，墨が消えていったりします**。特に，絹と和紙は要注意です。

光は墨などの文字を消したり写真を変色させたりするのですが，光の対策は資料をどこにどう置くかだけの問題なので簡単です。

虫については，シミ（紙魚）の対策として資料クリーニングをして湿度を60以下に保つことがまず基本です。次に，ゴキブリの対策が必要です。というのも，あまり知られていませんが，**ゴキブリは紙を食べ，簿冊の背表紙までかじる**からです（ネズミもかじります）。閉校した後の校

舎なら，まず大掃除をして，あとは市販の殺虫剤や防虫グッズで害虫対策をすれば十分です（例えば、バルサンを焚いてゴキブリホイホイを設置するなど）。これなら教育委員会の一般職員でもできますし，何もしないよりははるかにましです。

3 どこに保存するか

保存する教室は，**3階建てでしたら，2階が最適です。**

最上階は，屋上から熱が伝わってきて昼間の温度がかなり上がるので，昼夜の温度変化が大きくなって，湿度を一定に保つのが中階よりも大変です。地下室は，湿度を一定に保ちやすいし，光も気にしなくていいのですが，なんせ校舎ですから水漏れが心配です。

保存に最も適していないのが，1階です。資料の出し入れに便利なこと以外に何も良いことがありません。とにかく湿度が上がります。1階の教室で，しかも水回りが近かったら，大雨の日の夕方に除湿器を数台稼働させても夜中に水が満タンになって朝には除湿器が止まっている，なんてこともあります。そんな場合は除湿器の湿度を60じゃなくて65とか70で設定するしかありません。途中で除湿器が止まったら湿度が急上昇するので，余計に布や紙を傷めます。

保存する場所は，**結露が発生する北側の窓の近くを避けて，南側寄りに置きます。**ただし**窓には遮光カーテンは必須**です。遮光カーテンが無い場合は，大きな段ボールで窓をできるだけ覆っておきましょう。こうしておかないと，資料がむき出しだと光があたって字が消えますし，資料が段ボール箱に入っていても昼夜での温度差が出て湿度がかなり変化して資料を痛めてしまいます。

4 何に入れて保存するか

保存する箱は，**密閉容器ではなく，少々通気性のあるダンボール箱のほうが良い**です。もちろん湿度対策です。密閉容器は最初に少しでも水がついていると中がカビだらけになります。

「中性紙」というのを聞いたことがありますか。文字通り，酸性でもアルカリ性でもない紙です。私たちが普段使っている紙（洋紙）はおもいっきり酸性なので，だんだん酸化して劣化していきます。中性紙や本物の和紙には，この心配が無いのです。和紙を洋紙でできた封筒や箱に入れたら酸化が進むことから，中性紙の封筒や箱が開発されました（そこそこ値段が高いです）。ということは，中に洋紙を入れるのでしたら，封筒や箱をわざわざ中性紙にしてもほとんど意味がないということです。洋紙を150年，200年と保存するなら，脱酸性処理というのをしないといけないのですが，膨大な予算がかかるので現実的ではありません（これは博物館・資料館・図書館にまかせましょう）。つまり，**校舎で保存するにあたっては，中性紙について考える必要はありません。**

保存にあたっては箱の平積みでもいいのですが，うまく力を逃がさないと重さで下の箱が潰れます。そこで棚の出番なのですが，新しい棚を買う予算は無いと思います。ここは，校舎である利点を生かしましょう。どこかに備品がたくさん置き去りにされているかと思います。古い学校だとたまにやたら立派な学校家具（学校用の机や椅子，書類棚など）もありますが，資料保存にあたっては備品の棚が便利です。よく，運動会で使うモノなどを放り込んである部屋に棚があります。余っていたらぜひ土や石灰やホコリを落としてから使いましょう。

5 クリーニング

箱に入れる前のクリーニングの時には，**基本的にアルコールは使いません。手袋も使いません。**そのかわり作業前には必ず手を洗ってください。虫やカビが気になる方もいらっしゃるかもしれませんが，人の手は少々なことがあっても元に戻りますが，資料は痛んだらもう元には戻りませんから資料を優先してください。歯ブラシを使う場合は，できるだけ毛先がやわらかいのを選びましょう。

箱に入れたら，**自家燻蒸**（くんじょう）です。普通の燻蒸なんて数十万かかるので，できるわけがありません。なので，自家燻蒸です。やり方は簡単，茶葉用の小袋に防虫剤を入れて資料に直接触れないようにして，ダンボール箱に放り込んで密封して1ヶ月放置して取り出すだけです。何もしない

よりはるかにましです。ただし，その後に資料を保存用の箱に入れ替えるのを忘れないでください。

6 整理（アーカイブズ化）

アーカイブズというのは，**誰でも目的とする資料にきちんとアクセスできる状況**のことで，その状況をつくるのがアーカイブズ化です。例えば，本が本棚に並んでいるだけだとアーカイブズ化されているとはいえませんが，本が検索でヒットして本棚のどこにあるかまでわかるようになっていてそれが誰でも使える状況になっていたら，それはアーカイブズ化されているということです。本のタイトルや著者がわからなくても，探す人の目的にかなう本にたどり着けるなら，それはさらに良いアーカイブズだということです。

学校でアーカイブズをつくるのは，かなり難しいことです。でも，アーカイブズに近づけていくことは，十分可能です。「できるかできないか」という極論ではなく，「できるだけする」という態度と実践が大切なのです。

アーカイブズをつくるにあたって最初の問題は，どう分類するのか，です。こればかりは，現場で考えるのには限界があるので，誰かの力を借りたいところです。でも，これまで教科書だけとか文書資料だけとかではなくあらゆる学校資料（前節をご覧ください）を分類でき，かつ学芸員・アーキビスト・研究者ではなく教職員や学区住民でもできる分類方法を発案した人は，いませんでした。なので，筆者（和崎）が学校資料を扱う仕事をしながら数年かけて作りました（和崎光太郎「学校歴史資料の目録と分類」『京都市学校歴史博物館研究紀要』第6号，2017年）。簡単に大分類だけあげると，

00 書籍類
01 写真・映像
02 文書
03 学校発行物・配布物
04 生徒会・同窓会・PTA・部活動
05 生徒作品
06 教材教具
07 建築・鋳造物
08 その他

となります。学校によくある資料で例をあげると，教科書は00，卒業アルバムは01でも03でもよさそうだけど活用するケースを想定して01，学籍簿や学校日誌は02，学校要覧は03，といった具合になります。

実際に学校資料を整理する時にはこの大分類だけではなく小分類も必要になるかと思いますし，目録のつくり方も必要になるかと思います。次ページ以降にどちらも一覧表を掲載しますが，「この場合はどうしたらいいのか」という事例も必要かと思いますので，ぜひ元の「目録と分類」をご覧ください（「学校歴史資料の目録と分類」で検索）。

【目録項目】

1，資料番号

「関連学校番号 - 分類番号 - 年代順番号」で構成される。「関連学校番号」3桁と，「分類番号」4桁は、別表で定めた通りとする。「関連学校番号」について，関連学校が無い場合（一般刊行物など）の学校関連番号は000とする。「分類番号」は，先の2桁が大分類，後の2桁が小分類。

2，関連学校

関連学校番号の学校。
「京都市立」は「市立」／「京都府立」は「府立」／「小学校」は「小」「中学校」は「中」／「高等学校」は「高校」

3，大分類

分類番号の上2桁。

4，小分類

分類番号の下2桁。

5，制作年／発行年月

明治5年末までは旧暦（和暦）、明治6年以降は西暦で記入。必要に応じて日まで記入、月日も明治5年末までは旧暦（和暦）。書籍等は発行年、検定教科書は検定年月および発行年。年度しかわからない場合、年度を記入し末尾に「年度」と記入。文書等で，その内容に〈いつからいつまで〉という期間がある場合は，いつまでかわかる場合その期間を記入し，わからない場合は末尾に「以降」と記す。

6，資料名（製作者／著者／発行元）

書籍等は著者と発行元を記入。簿冊の場合は簿冊名で記入し、バラしてある場合などそれぞれの資料名を記す必要がある場合は，「資料名（簿冊名）」で記入。ただし、簿冊は表紙と中身が一致する保証が無いので、中身を確認し、必要に応じて表紙とは異なる名称を付けること。

7，寄贈者／寄贈受入年月

西暦で統一。

8，付記

※1～7に該当しないが必要だと考えられることを記入

9，画像（書籍等の場合は表紙のみ）

【分類カテゴリー（分類番号）】

● 凡例

前2桁が大分類，後2桁が小分類。便宜上，戦後の公称である園児・児童・生徒を，生徒と総称する。

00 書籍類

0001　学校記念誌・学区誌類
0002　戦後検定教科書
0003　国定期の教科書（1904-1948）
0004　国定期以前の教科書（-1903）
0005　副読本
0006　参考書・問題集
0007　教科別研修資料など
0008　学習指導要領
0009　一般書籍
0010　その他製本されたもの

01 写真・映像

0101　卒業アルバム
0102　記念発行のアルバム・絵葉書など
0103　その他アルバム類
0104　その他写真
0105　映像史料
0106　フィルム・ガラス乾板など

02 文書

0201　学校沿革史
0202　日誌類
0203　建築関係・校舎図面
0204　学校運営関係
0205　学籍簿（指導要録）・指導記録類
0206　地図（学区地図等を含む）
0207　学区関係（青年団・夜学会など含む）
0208　その他文書

03 学校発行物・配布物

0301　学校発行物
0302　通知表
0303　証書・賞状
0304　運動会・発表会・修学旅行関係
0305　その他生徒向け配布物
0306　保護者向け配布物

04 生徒会・同窓会・PTA・部活動

0401　生徒会発行物・製作物
0402　同窓会発行物・製作物
0403　PTA 発行物・製作物
0404　部活動発行物・製作物

05 生徒作品

0501　作文
0502　絵画
0503　習字
0504　ノート・プリント
0505　テスト
0506　日記
0507　その他生徒作品

06 教材教具・指導関係

0601　理科
0602　社会
0603　音楽
0604　算数・数学
0605　保健体育
0606　幼児教育
0607　その他教材教具・指導関係

07 建築・鋳造物

0701　瓦
0702　像
0703　その他建築・鋳造物

08 その他

0801　服飾・鞄・靴など
0802　考古
0803　民俗
0804　給食
0805　備品類
0806　手紙類
0807　その他

コラム4

これからの学校資料
―学校統廃合と学校資料―

小山元孝

はじめに

筆者は，11年間京丹後市教育委員会文化財保護課に勤務し京丹後市史編さん業務に携わっており，その編さん過程の中で学校資料と巡り合いましたが，その発端は決して褒められるような状態ではありませんでした。はじまりは一市民の声がきっかけです。その方は以前にある小学校の記念誌編さんに携わっており，その際に多くの写真や文献等を収集していました。編さん終了後，集められた資料は箱に収納し校長室に保管していたということでしたが，2013（平成25）年頃になって確認したところその箱の所在が不明になっており，廃棄したのか移動したのかさえわからない状態だったのです。非常に憤慨したその方からは，「文化財保護課もこうした貴重な資料があることを知ってほしい。もっと，関心を持ってほしい。」と厳しい言葉を受けることになりました。その後の学校資料の収集や整理については，すでに和崎光太郎・小山元孝・冨岡勝「学校史資料論の構築に向けて―活用と分類・学校統廃合・アーカイヴズ―」（『近畿大学教育論叢』第28巻第2号，2017年）の中で述べているので，ぜひご覧ください。

本コラムでは，京都府京丹後市における小・中学校統廃合時における学校資料の収集過程や活用のなかで浮かび上がった課題や問題点について述べたいと思います。

1. 資料の収集から浮かび上がった問題点

京都府北部に位置する京丹後市は2004（平成16）年4月1日に峰山町・大宮町・網野町・丹後町・弥栄町・久美浜町が合併して発足しました。人口は合併当初の約65,000人から，2018（平成30）年11月末には約55,000人と減少，また学校数は2004（平成16）年4月段階では小学校31校，中学校9校でしたが，2018（平成30）年4月には小学校18校，中学校6校となっています。

図1 グラウンドの片隅に残る石造物
左：旧田村小学校「忠魂碑」「二宮金次郎像」等　右：旧郷小学校「明治百年記念碑」

主に筆者が収集に携わった資料は公文書です。約3年間で1,500冊もの簿冊を収集することができましたが，その整理作業には京都府立大学の小林啓治教授とゼミ生の力に負うところが大きくあります。収集した簿冊すべての目録を作成することはできましたが，一部を京丹後市立丹後古代の里資料館での展示で活用したほかは，公開や活用まで至りませんでした。個人情報が含まれている資料の取り扱い，また学校からの移管に係るルール作りなど，結局手が付けられなかったことも多くあります。市職員である関係から，市立の小・中学校へのアプローチはできたものの，京都府立の学校，特に高等学校の資料については何ら調査をすることができませんでした。京都府北部では高校の再編が進んでいることもあり，これらの学校へのアプローチをどうすべきか次なる課題が早くも登場しています。

2. 新たな学校資料

また，忠魂碑や記念碑といった石造物のように移動することが難しく跡地にそのまま残されているものもあります。表面が摩耗し文字が判読できないものもあり，写真撮影や翻刻といった作業が急務です。それか

ら，閉校に伴い跡地に埋設されたタイムカプセルや記念碑など新たな学校資料と言えるものが登場しています。公文書以外にも写真やスライド，カセットテープ，標本，土器など，様々な媒体の資料も収集しましたが，動画を収録したDVDや写真データなども学校資料の中に含まれていくでしょうし，これからどういったものが学校資料となりうるのか，先入観無しに考える必要性を感じています。また，現地に残された資料の行く末は，跡地利用にも関わってくるところといえます。筆者は京丹後市内で無居住化した集落のその後について調査を行ったことがあり（小山元孝編著，林直樹・関口達也・齋藤晋著『消えない村』2015年），無居住化して50年以上経過し森林に戻ってしまったところもあれば，少人数での草刈りや，道路の補修などを続けていることにより，集落跡が今でもよくわかる場所があることに気付きました。学校の跡地については，今後多額の予算を費やして維持管理を行うことは難しいと思いますが，今後の利用形態を考えながら長い目線でどのように管理するのが良いのか検討していくべきと考えています。

さらに，閉校に伴いほとんどの学校で記念誌が作成されています。作成部数は限られており，地元住民へ配布されることはありますが，実は地元の図書館でもすべて取り揃えているというわけではありません。閉校の際の記念誌のほかにも，100周年など記念事業の際に書籍という形で作成されることは今でも多くあるのではないでしょうか。記念行事を撮影した動画をDVDに保存していることもあると思います。こうした資料は

図2 タイムカプセル（旧大宮第三小学校）

図3 閉校記念碑（旧溝谷小学校）

作成時に逃してしまうと，収集は不可能となりかねません。図書館や博物館など，どこで収集するのが良いか検討が必要ですが，これからの学校資料を考える上でも見逃してはならないと思います。

図4 閉校に伴い刊行された記念誌

3. 学校資料の未来のために

以上のように，学校資料の収集に携わった経過を振り返ってみました。少ないながらも成果はあったと思いますが，やはり課題も浮き彫りになっています。その一つは，学校公文書の現用から非現用への移管のシステムを構築できなかったことです。筆者は地元出身ですので，教職員の中には顔なじみの方が多くいます。地元出身者で顔なじみという地の利を生かして調査や収集を行ってきました。その手法の功罪については第三者に委ねざるを得ませんが，手続きや仕組みづくりが構築されていない場合や，地域で文化財を扱う際の手法の一つとして考えています。しかし，継続的な仕組みを構築するには，文化財担当者の中に学校資料にも関心のある人材を育成することが必要であり，筆者自身のような個人の資質に頼らないやり方も同時に考える必要があります。

もう一つは，学校資料というモノの価値を高め，利活用を促進することです。この点に関していえば筆者の力不足であったことは否めません。資料館での展示の際に数点活用したものの，目録化された資料の本格的な調査研究まで行き届きませんでした。学校資料をより広く知ってもらうためには，学校資料はいったい何を物語るのか追求すべき点はあり，まだまだやるべきことは多いことを痛感しています。

コラム5

自然災害と学校資料

藤森寛志

はじめに

平成23年（2011）は災害の多い年でした。3月11日に起きた東日本大震災は自然災害の脅威を私たちにまざまざと見せつけてきました。実は東日本大震災のおおよそ半年後に紀伊半島大水害が起きたことをご存知の方は、どれだけいるでしょうか？平成23年（2011）8月30日から9月5日にかけて台風12号は，紀伊半島に大雨と暴風をもたらしました。このときの降水量は，紀伊半島の広い範囲で1000mmを超え，この豪雨により土砂災害や河川のはん濫が起こり，紀伊半島に大きな爪痕を残しました。

和歌山県内はとくに紀伊半島の南東部にあたる紀南地域に土砂災害が発生し，熊野那智大社では裏山が崩れ，本殿の一部が土砂で埋まる被害に遭い，那智の瀧の様相を一変させました。紀伊半島大水害の被害には小学校より集められた農機具や生活用具が水損に遭ったことや廃校に保管されていた民俗文化財が廃棄されたことはほとんど知られていません。

1. なぜ自然災害で資料が廃棄されたか

図1 台風21号により被災した旧敷屋小学校

日高郡日高町船津尾にある日高川町立中津郷土文化保存伝習館は，1階床上70cmまで浸水し，展示していた埋蔵文化財や民俗文化財が水損被害に遭いました。同館に収蔵されている生活用具をはじめとした民俗文化財の多くは日高川町内の小学校が所有していたものが寄贈されたものでした。

新宮市熊野川町西敷屋の旧敷屋小学校も被害を受け，木造校舎1階の床上250cmまで浸水し，濁流が校舎に流れ込み，教室に保管されていた『熊野川町史』掲載の農具をはじめとした民俗文化財の多くが濁流に呑まれ，汚損し，瓦礫とともに廃棄されてしまいました。

なぜ，旧敷屋小学校に置かれていた資料は棄てられてしまったのでしょうか？旧敷屋小学校の被災状況が酷かったこともあるでしょうが，最大の問題は，旧敷屋小学校に文化財が収蔵されていることを和歌山県内の文化財関係者が，知らなかったことです。もし，その存在を誰かが知っていれば，水損に遭った民俗文化財の全てが廃棄されるという惨事は免れていたかもしれません。

この出来事から，筆者は，「人に知ってもらうことでモノを棄てにくい環境を作ることができないか」と考えるようになり，後の学校資料の所在調査へと繋がっていくことになりました。

2. 被災をきっかけに始めた学校資料の調査

「学校には何かしらの文化財がある。」

このことを文化財に携わる関係者は，漠然とは知っていました。なぜなら，民俗文化財や埋蔵文化財は，博物館施設においては収蔵庫を占有するため，館外に場所を設けて収蔵することが多いからです。こういうときに多く利用されるのは教育委員会が所管する学校施設で，廃校を利用する場合もあれば，小学校の空き教室に資料を収納することもあります。同じように自治体で刊行された市町村史に用いられた資料が学校に置かれたままになっているケースもあります。

図2 御坊市立御坊小学校

しかしどの学校に何がどれくらいあるかを把握できていなかったことを，台風12号による被災か

ら改めて気付かされました。この事実をもとに学校に所在する資料調査に取りかかりました。まず2016（平成28）年1月，和歌山県下の市町村教育員会に宛てて学校所在資料についてのアンケートを初めて発送しました。対象は和歌山県下の学校施設420校（小学校248校・中学校133校・高等学校39校）。回答は全体の61％にあたる258校から届きました。さらに258校のうち何らかの資料が「ある」と回答したのは69校ありました。この結果を受けて，直接学校を訪ね，調査を始めました。

3. 展覧会の開催とその反応

紀伊半島大災害から5年後の2016（平成28）年，そして2018（平成30）年に「学校にあるたからもの」と題した夏期企画展を開催しました。本企画展は，学校資料の底力を余すところなく来館者に見せつけることに力を入れました。学校資料の幅の広さや豊富さを紹介し，その豊かさの源は，学校が地域の博物館として機能していたことに由来することを強調できるような構成をとり，学校資料がどんなものなのかを知ってもらうこともまた一つの狙いとしました。

結果的に，本企画展は，スタート地点に自然災害による学校資料の被害を据えはしましたが，全般を通じて学校資料の魅力に焦点を当てたものとなりました。

本企画展を観覧した教員からは自校にも同様の資料があるので調査をして欲しいなどの声もちらほら頂戴しました。その一方で，企画展において借用・展示した学校資料が返却後に廃棄されることもありました。また博物館施設で展示された学校資料は，歴史的あるいは美術的に価値があるものだと判断され，博物館への寄贈や教育委員会へ移管する例が見られ，本企画展をきっかけに学校から切り離されてしまうなど意図していない結果となることもありました。

図3 平成28年度夏期企画展
「学校にあるたからもの」

4. 学校資料の保存と活用のための環境を構築しましょう

最後に筆者の率直な意見をお話しします。当初，いざ調査をはじめてみると学校資料の底力に圧倒されるとともに，ほとんど資料が活用されていないことに驚かされました。学校資料は自然災害で失われるより学内で廃棄されていくものの方が多いのではないかと思わせるほど目まぐるしい早さで和歌山県内の学校資料は失われています。急がなければならないのは，学校資料の所在確認とともにそれらの資料が棄てられない環境を構築することです。

学校資料には，創立100周年を記念して収集されたものもあれば，児童のために教材として寄贈されたものもあります。一学芸員として学校側の様々な事情を考慮せずに述べさせてもらえば，学校資料は所蔵者である学校で管理されるべきで，授業で活用し尽くすのが理想的な姿です。その結果としての破損・廃棄は資料にとって本望でしょう。

学校資料を守るには，その資料が学校にとって必要なものであると教員に知ってもらわなければなりません。つまり学校資料を教材として再び光を当てることが重要となります。

最近，学校資料の活用面において一筋の光が差し込んできました。県内の小学校から児童と一緒に学校資料の整理を試みたいので学芸員に手伝って欲しいと持ちかけてくれたのです。学校資料が，学校と学芸員を繋ぐ架け橋となるのではないかと期待が膨らみます。自然災害では手も足も出ませんでしたが，これから学校資料を紐帯に，地域の博物館にはまだまだやれることがあります。

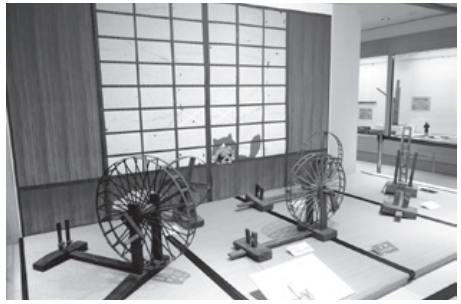


図4 平成30年度企画展
「学校にあるたからものⅡ」

おわりに

和崎光太郎

最後に、とても大切なことをお伝えした上で、本書で書けなかったことをまとめておきます（つまり今後の課題です）。

今この文を読まれている方は、必ずしも本書をすべて読まれた方ではないかと思います。それでまったく問題はないのですが、「はじめに」や他の部分を少しでも読んでいただけたのなら、本書が最も大切にしてきた言葉の意味が豊かになったかと思います。その言葉とは,「活用」です。「活用」という言葉の意味が豊かになるということは、実はとても重要なことなのです。

活用と似た言葉で、「利用」があります。普段あまり違いが意識されない二つの言葉ですが、両者を比較すると、私たちが主張したい活用の意味がはっきりとわかるでしょう。利用が単に「役立つようにうまく使うこと」といった意味であるのに対して、活用にはそこに「潜在力を発揮させながら」というニュアンスも加わります。例えば、「人を利用する」という慣用句は、「人」を「人材」に置き換えると、「人材を活用する」としないと不自然になります。人材とは、利用すべき存在ではなく、活用すべき存在だからです。

活用する、つまり潜在力を発揮させて利用するためには、活用するモノの多様で深い性質をまずは知る必要があります。ここにこそ、単に使う（＝利用する）ということと活用することとの違いがあります。本書は実に様々な執筆陣から成っていますが、学校資料を単に「使えないもの」「ゴミ」とするのではなく、活用という視点、つまり学校資料に潜む多様で深い性質（潜在力）を見出そう、というところに立つことは共通しています。そしてその性質（潜在力）は、単に教育的価値や歴史資料的価値に留まるのではなく、広く「文化的価値」からも評価されるべきものを

持っています。このように価値を見出す作業を、少々難しく言うと「資源化」と言うので、文化的な価値までをも見出された学校資料は、別名「学校の文化資源」と言うこともできます。

このような視点を身に付けることと、本書に書かれている活用を実践することは、車の両輪です。前者（視点）が欠けると思想的基盤が弱くて長続きしないでしょうし、後者（実践）が欠けると机上の空論になりかねません。

つまり、活用という言葉（概念）にこだわることは、活用という思想を持っているということであり、これは実践を進めていく上でとても重要なのです。これが、最初に言った「とても大切なこと」です。〈活用＝資源化〉という考え方が広まるか広まらないかで、本書のサブタイトルにある「学校資料活用」が続くか続かないか、大きな違いが出てくるでしょう。

本書で書くべきなのに、時間の制約と執筆陣の力量の限界とで書けなかったことがいくつかあります。中でも以下の3つの点は、本書の「欠点」として明記しておかねばなりません。

① 学校資料のユニバーサルな活用

ユニバーサルという言葉は、「ユニバーサルデザイン」としてご存知の方がいらっしゃるかと思います。かなり噛み砕いて言えば、できるだけどのような人にも使える（わかる）ようにする、という意味です。例えば、視覚障害（常用漢字以外も用いた本来の日本語表記は「障碍」）のある人のために点字の解説を用意する、触れる展示にする、といったことがあげられます。本書はこのユニバーサルな学校資料の活用について書くことができませんでしたが、この点については広瀬浩二郎編『ひとが優しい博物館　ユニバーサル・ミュージアムの新展開』（青弓社、2016年）などの良書が学校資料の活用にあたっても手がかりになるかと思います。

② 特別支援学校（養護学校）に関する資料

本書ではたくさん「学校」という言葉が出てきましたが、そこには特

別支援学校（養護学校）と特別支援教室は含まれていませんでした。筆者（和崎）は、この両者に関する学校資料が他の学校資料よりも散逸・廃棄が進んでいること、さらに残っていた資料の活用が他の学校資料の活用よりも難しいことを、京都市学校歴史博物館での企画展「京都における特別支援教育のあゆみ」（2015年12月～翌年3月に開催）を担当することで痛感しました。この企画展の図録（同館HPで無料閲覧可）が、特別支援学校や特別支援学級などに関する学校資料の活用実践報告にもなっているのですが、それにしても「もっとできるだろう」という気がしています。しかし、本書ではきちんとまとめることができませんでした。この点については、学校・施設アーカイブズ研究会『学校・施設アーカイブズ入門』（大空社、2015年）が今後の参考になるかと思います。

③幼稚園に関する資料

②と同じように、本書での「学校」には幼稚園が含まれていません。幼稚園はもちろん学校の一種なのですが、幼稚園に関する資料の活用について本書で書かれていないのは、何よりも編者の力量不足によるものです。

幼稚園に関する資料は、小中学校、高校、大学の資料に比べて注目されることが少ないのですが、まったく収集・保存されていないわけではありません。京都市学校歴史博物館の常設展示室には恩物（明治期から使われている幼児教育の教具）などが展示されており、地域の総合博物館にも同様の展示があるところもあります。茨城県土浦市や京都府舞鶴市では、資料の残りの良い幼稚園で資料調査が行われ、その成果が報告されています。幼稚園に関する資料は、類似施設である保育所・こども園に関する資料も含めて、今後の保存と活用を考えていかねばなりません。

以上の3点については、「触れる」程度ならもちろんできたのですが、中途半端に触れただけで「書いた」ということにしてしまってはかえって良くないと判断し、「触れる」こともしませんでした。執筆陣一同、きちんと今後の課題とします。

このハンドブックは、2017年4月に関西の有志で結成した学校資料研究会のメンバーで執筆しました。会の結成直後から構想を練り、合計11回の研究会で議論を重ね、その成果を「とりあえず」まとめたものです。編集は村野正景と和崎光太郎が担当しましたが、できるだけ元の原稿を活かすようにしました。なお、本書は京都府京都文化博物館でのイベント「学校・地域・物語―『北白川こども風土記』から探る」（2019年3月9日）と、京都市学校歴史博物館でのシンポジウム「学校資料の活用を考える―学校資料の価値と可能性―」（2019年3月10日）での配布資料も兼ねています。

本書の内容が中途半端であることは百も承知です。しかし、今みなさんがこの文章を読んでいる間にも全国のどこかで学校資料が捨てられているわけですから、とにかく急がなければなりません。実際に学校資料を収集・保存・活用したり、伝えるべき人にきちんと伝わる言葉の発信をしていったりしないと、学校資料の散逸・廃棄は進むばかりなのです。

「すべての報告は経過報告である」と言われるように、実践記録や事例報告はもちろんのこと専門書やハンドブックも、発行してからが大切です。今後、少しずつブラッシュアップしていって、どのような形になるかわかりませんがバージョンアップ版をみなさんにご覧いただけるようにしたいと考えています。

最後に、本書を手に取っていただき、ありがとうございました。巻末付録も充実していますので、ぜひご覧になってください。また、本書の制作にあたっては実に多くの方々にお世話になりました。御礼申し上げます。

本書はJSPS科研費JP17K17753の助成をうけました。

【参考・引用文献】

- 石附実編 1992『近代日本の学校文化誌』思文閣出版
- 市元塁 2014「総論 高等学校と考古学」九州国立博物館編『全国高等学校 考古名品展』
- 市元塁・池内一誠 2015「高校考古資料の調査―学校現場での活用を視野に―」『東風西声』10号，九州国立博物館
- 市元塁 2017「学校所在資料形成史―学校になぜ考古資料があるのか？―」『考古学研究』64巻3号
- 市元塁 2017「学校における考古資料の所在，管理，機能」『考古学研究』64巻3号
- 市元塁・瀬谷今日子・平田健・村野正景 2017「学校所在資料の過去・現在・未来」『考古学研究』64巻3号
- 市元塁・瀬谷今日子・村野正景 2018「学校と考古学をつなぐ新たな取組―」『考古学研究』64巻４号
- 井丸勝子 2002「『いたはしくら』誕生によせて」『創立百三十周年 いたはしくら』京都市立伏見板橋小学校記念事業実行委員会
- 梅棹忠夫 1987『梅棹忠夫の京都案内』角川書店
- 大橋敦夫編 2018『旧和学校校舎(和記念館)蔵教科書目録』上田女子短期大学大橋研究室
- 大平聡 2014「地域史資料としての学校資料」『災害・復興と資料』3号
- 大平聡 2016「『震災』を経験して」『歴史学研究』942号
- 大平聡 2018「学校資料と歴史学」『歴史評論』822号
- 片岡芽彩，平島和雄，若松俊介 2015「学博連携時とつながる～新・洛中洛外図をつくる～」京都文化博物館地域共働事業実行委員会編『“まち”と“ミュージアム”の文化が結ぶ幸せなかたち』
- 学校・施設アーカイブズ研究会 2015『学校・施設アーカイブズ入門』大空社
- 加藤幸治・蘇理剛志・藤森寛志 2011「自然災害による民俗資料救援活動の困難さ」『民具研究』147号
- 兼古勝史 2017「熊本地震におけるコミュニティラジオ局の対応―校歌のリクエスト放送の事例に見る音響共同体の位相―」『共栄大学教育学部研究紀要』1号
- 咸宜園教育研究センター 2017『図説 咸宜園―近世最大の私塾―』日田市教育委員会
- 菊地暁 2017「いくつかの〈こども風土記〉―宝塚・大東亜・北白川―」大塚英志編『動員のメディアミックス―〈創作する大衆〉の戦時下・戦後―』思文閣出版
- 九州国立博物館編 2014『全国高等学校考古名品展』
- 九州国立博物館編 2016『全国高等学校考古名品展 2016』
- 九州国立博物館編 2018『全国高等学校考古名品展 2018』
- 教育解放研究会編 2000『学校のモノ語り』東方出版
- 教育の境界研究会編2 009『むかし学校は豊かだった』阿吽社
- 京都市学校歴史博物館編 1998『我が国の近代教育の魁 京の学校・歴史探訪』京都市社会教育振興財団
- 京都市学校歴史博物館 2014『京都市学校歴史博物館 常設展示解説図録(第2版)』京都市学校歴史博物館
- 京都市立北白川小学校編 1959『北白川こども風土記』山口書店
- 京都府加佐郡大江町立有仁小学校編 1981『有仁子ども風土記』第1号
- 京都文化博物館地域共働事業実行委員会編 2017『“まち”と“ミュージアム”の文化が結ぶ幸せなかたち 3』
- 阪本美江 2018「奈良女子大学附属小学校所蔵の学校資料の状態について―明治期における資料の劣化状況に着目して―」『関西教育学会年報』42号
- 佐久市文化財保護審議会編 2001『重要文化財 国史跡 旧中込学校および資料館』佐久市教育委員会
- 佐藤秀夫 1987『学校ことはじめ事典』小学館
- 佐藤守弘 2018「郷土を調べる子どもたち―『北白川こども風土記』と〈アーカイブする実践〉」原田健一・水島久光編『手と足と眼と耳―地域と映像アーカイブをめぐる実践と研究―』学文社
- 嶋田典人 2014「学校アーカイブズの地域保存と住民利用」『アーカイブズ学研究』21号
- 島田雄介 2015「地理歴史科の授業と地域・博物館との連携―山科・上京で取り組んだこと―」京都文化博物館地域共働事業実行委員会編『“まち”と“ミュージアム”の文化が結ぶ幸せなかたち』
- 島田雄介・神野晋作・八田友和 2018「学校所在資料の活用―学校現場に聴く―」『考古学研究』64巻4号

● 杉山一雄 2007「高等学校に残ったGHQ関係資料」『岡山県立記録資料館紀要』2号
● 杉山一雄 2008「岡山県立記録資料館における選別・収集基準の検討」『平成19年度公文書館専門職員養成過程修了研究論文集』独立行政法人国立公文書館
● 鈴木教郎 2013「小学校資料の保存と活用―茨城県立歴史館における小学校収蔵教育資料調査事業を中心に―」『茨城県立歴史館報』40号
● 瀬谷今日子 2017「学校所在資料はいかにして把握できるのか」『考古学研究』64巻3号
● 瀬谷今日子 2018「黒江小学校のアルバム写真に残された昭和南海地震の記録―地域災害史の復元における学校所在資料の活用―」『紀伊風土記の丘研究紀要』6号
● 田中仁 2004「十五年戦争中の学校資料を教材化する」『歴史地理教育』664号
● 勅使河原彰 2005『歴史教科書は古代をどう描いてきたか』新日本出版社
● 永松靖典編 2017『歴史的思考力を育てる 歴史学習のアクティブ・ラーニング』山川出版社
● 名古屋市博物館 2003『常設展「尾張の歴史」ハンドブック』名古屋市博物館
● 南丹市立文化博物館 2015『学校のあゆみ 園部地区編』南丹市立文化博物館
● 南丹市立文化博物館 2016『学校のあゆみ 八木地区編』南丹市立文化博物館
● 南丹市立文化博物館 2017『学校のあゆみ 美山地区編』南丹市立文化博物館
● 西川宏 1986「学校教育と考古学」『岩波講座 日本考古学』7 岩波書店
● 野田礼子 2012「資料整理と展示活用―土浦幼稚園資料を事例として―」『土浦市立博物館紀要』22号
● 博物館デビュー支援事業実行委員会・横浜市歴史博物館 2014『平成25年度「学校内歴史資料室を活用した博物館デビュー支援事業」年報』博物館デビュー支援事業実行委員会・横浜市歴史博物館
● 博物館デビュー支援事業実行委員会・横浜市歴史博物館 2015『平成25年度「学校内歴史資料室を活用した博物館デビュー支援事業」年報』博物館デビュー支援事業実行委員会・横浜市歴史博物館
● 羽毛田智幸 2016「学校内歴史資料室の抱える課題：企画展「よみがえる学校の文化財」の開催によせて」『民具マンスリー』49巻5号
● 羽毛田智幸 2016「『博物館デビュー支援事業』の挑戦―学校・地域を支える仕組みづくり―」京都文化博物館地域共働事業実行委員会編『“まち”と“ミュージアム”の文化が結ぶ幸せなかたち2』

● 羽毛田智幸 2017「学校内歴史資料室における民具の現状とこれから：学校文化財がつなぐ学校・地域・博物館」『民具研究』156号
● 羽毛田智幸 2018「学校文化財がつなぐ学校・地域・博物館」『地方史研究』68巻1号
● 羽毛田智幸・小林光一郎編 2017『平成28年度「学校・地域・博物館をつなぐ博物館デビュー支援発展事業」年報』博物館デビュー支援事業実行委員会・横浜市歴史博物館
● 浜松市博物館 2005『博物館資料集15 戦前の学校』浜松市博物館
● 浜松市博物館 2008『新版 図説浜松の歴史』浜松市博物館
● 原田智仁 2018『中学校新学習指導要領 社会の授業づくり』明治図書出版
● 平田健 2011「学校教育における考古資料教材の開発とその学史的意義―ドルメン教材研究所『古代土器複製標本』の評価をめぐって―」『学習院大学史料館紀要』17号，学習院大学史料館
● 平田健 2018「学校所在資料の価値―考古学・人類学模型標本を例に―」『考古学研究』64巻4号
● 広瀬浩二郎編 2016『ひとが優しい博物館―ユニバーサル・ミュージアムの新展開―』青弓社
● 福岡県立糸島高等学校 2016『福岡県立糸島高等学校郷土博物館 公式ガイドブック』
● 藤木治，斎藤宏 1970「十八才からの発言―高校生の考古学研究活動から―」『考古学研究』17巻1号
● 藤森寛志 2018「学校所在資料の展示の意義と課題―和歌山県立紀伊風土記の丘における展示を通して―」『紀伊風土記の丘研究紀要』6号
● 松本市著，重要文化財旧開智学校資料集刊行会編 1988-1998『史料 開智学校』電算出版企画
● 松本市教育委員会 2018『重要文化財旧開智学校校舎 調査研究報告書』重要文化財旧開智学校校舎
● 松本市立博物館 2013『第5回学都松本・博物館「勧館楽学」対談記録集《小学校郷土資料室は今―ノスタルジーと新鮮さと―》』松本市立博物館（簡易印刷版は2011年）
● 村野正景 2015「学校所蔵資料の継承と活用への取り組み―京都における調査を題材として―」『遺跡学研究』12号
● 村野正景 2017「学校と考古学」京都文化博物館地域共働事業実行委員会

● 村野正景・島田雄介・岩﨑俊之・西村大輔 2017「京都文化博物館と京都府立鴨沂高等学校の連携授業および展覧会の報告：学校所蔵考古・歴史資料展の取組を中心に」『朱雀』29集
● 村野正景・平田健 2016「京都府立鴨沂高等学校所蔵の考古・人類学模型標本について―京都府内の学校所蔵考古資料に関する調査の概報―」『朱雀』27集
● 村野正景・和崎光太郎 2018「学校所在資料論の構築」『考古学研究』64巻4号
● 森屋雅幸 2018『地域文化財の保存・活用とコミュニティ―山梨県の擬洋風建築を中心に―』岩田書店
● 文部科学省 2008『小学校学習指導要領 特別活動』東洋館出版社
● 文部科学省2018『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』日本文教出版
● 文部科学省 2018『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編』東洋館出版社
● 文部科学省 2018『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』東洋館出版社
● 文部省 1917『常置教育的観覧施設状況』大正5年12月(1991『博物館基本文献集第10巻』大空社所収)
● 山本幸俊 2012「学校統廃合と学校アーカイブズの保存―新潟県の事例を中心に―」『記録と史料』22号
● 湯田拓史 2014「アーカイブズを活用した教育経営の可能性―公文書管理法施行後の「学校文書」の保存・管理の意義と課題―」『活水論文集　健康生活学部編』57集
● 米田俊彦 2006「個人情報の保護と利用に関する委員会中間報告会」『教育学研究』73巻2号
● 米田俊彦 2007「学校文書の保存に関するアンケート調査(都道府県教育委員会対象)の結果の概要」『教育学研究』74巻2号
● 歴史教育者協議会(編) 2007『学校史でまなぶ日本近現代史』地歴社
● 和崎光太郎 2016「学校所蔵史料の保存と活用―京都市を事例として―」『日本歴史学協会年報』31号
● 和崎光太郎 2017a「京都市の学校所蔵資料の現状と課題―学校所蔵資料論の構築に向けて―」『“まち”と“ミュージアム”の文化が結ぶ幸せなかたち3博学社連携フォーラム・博学社連携シンポジウム報告書』
● 和崎光太郎 2017b「学校歴史資料の目録と分類」『京都市学校歴史博物館紀要』6号
● 和崎光太郎 2017c「学校歴史資料の置かれた現状と活用―京都市学校歴史博物館での企画展示を事例に―」『関西教育学会年報』41号
● 和崎光太郎 2017d「学校資料の収集・保存・活用」『広文協通信』32号
● 和崎光太郎 2018a『図録　近代日本の道徳教育』京都市学校歴史博物館
● 和崎光太郎 2018b「「学校の文化資源」研究序説―学校史料論の総括と展望」『洛北史学』20号
● 和崎光太郎 2018c「学校史とは何か―地域のコミュニティセンターとしての学校の姿―」『アルケイア―記録・情報・歴史―』13号
● 和崎光太郎・小山元孝・冨岡勝 2017「学校史資料論の構築に向けて―活用と分類・学校統廃合とアーカイヴズ―」『近畿大学教育論叢』28巻2号
● 和崎光太郎・森光彦著，京都市学校歴史博物館編 2016『学びやタイムスリップ近代京都の学校史・美術史』京都新聞出版センター
● 九州国立博物館HP「全国高等学校考古名品展」(最終確認2018年12月30日)
https://www.kyuhaku.jp/exhibition/exhibition_pre119.html
● 京都市考古資料館HP (最終確認2018年12月30日)
https://www.kyoto-arc.or.jp/museum/
● クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス (最終確認2018年12月30日)
https://www.clark.ed.jp/kinki/ashiya/
● 横浜市歴史博物館「博物館デビュー支援事業について」(最終確認2018年12月30日)
https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/taisyou/school/debut/

【索引】

〈モノ〉

アルバム(卒業アルバム) 6, 11, 26, 105, 115, 118
遺跡 36, 72, 73
絵葉書 17, 18, 27, 60, 61, 68, 69, 118
学籍簿(指導要録) 106, 115, 119
教科書 6, 11, 23, 26, 37, 38, 39, 40, 46, 66, 68, 70, 73, 77, 91, 92, 93, 96, 105, 106, 107, 114, 115, 117, 118
教材 7, 8, 14, 31, 51, 60, 62, 64, 66, 68, 70, 72, 74, 80, 86, 89, 96, 105, 107, 108, 115, 120, 129
教室 15, 17, 18, 37, 56, 63, 74, 75, 106, 112
考古資料(埋蔵文化財, 土器, 土偶, 石器, 須恵器, 瓦) 21, 34, 36, 42, 59, 60, 61, 66, 72, 73, 74, 108, 109, 120, 124, 127
校舎 19, 26, 43, 44, 46, 47, 64, 68, 85, 86, 88, 91, 92, 94, 95, 104, 106, 110, 111, 112, 113, 119, 127
作文 76, 77, 78, 80, 120
写真 11, 13, 17, 18, 22, 27, 33, 38, 40, 42, 43, 46, 50, 55, 58, 59, 60, 61, 64, 65, 69, 86, 87, 89, 90, 94, 96, 99, 105, 111, 115, 118, 122, 123, 124
収蔵庫(収蔵室) 14, 54, 86, 110, 111, 127, 146
台帳 25, 88
地図 17, 58, 64, 65, 66, 72, 76, 107
日記 46, 120

日誌(学校日誌) 60, 61, 70, 71, 86, 89, 90, 106, 115
美術工芸品(美術品, 工芸品, 絵画, 絵) 11, 16, 17, 45, 74, 78, 96, 109, 120
文化財 24, 43, 44, 45, 61, 63, 68, 72, 77, 81, 97, 125, 126, 127
民俗資料(民俗文化財, 生活用具, 民具) 23, 30, 42, 54, 55, 57, 66, 82, 86, 87, 108, 126, 127
歴史資料(文書資料, 古文書, 公文書, 文献) 37, 50, 51, 82, 85, 86, 89, 107, 122, 123, 124, 125

〈コト〉

アーカイブ 114
空き教室(余裕教室) 13, 23, 27, 54, 74, 75, 110,
学習指導要領 60, 62, 64, 66, 68, 70, 72, 74, 97, 118
キャリア教育 32
災害(自然災害) 5, 42, 126, 128, 129,
指導(指導案, 指導計画) 5, 33, 60-75, 78, 83, 86, 88, 120
収集(収蔵) 12, 14-17, 21, 24, 27, 31, 45, 50, 55, 58, 76, 78, 82, 86, 87, 88, 89, 100, 122-127, 129, 132, 133
主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング, 対話的な学び) 15, 31, 37, 79
授業 5, 7, 8, 12, 14-16, 20, 24, 26, 27, 30-34, 37, 47, 49, 55-75, 77-81, 91, 97, 129
情報教育 25, 27
整理 5, 14, 15, 18, 24, 27, 31, 34, 37, 50, 58, 61, 64, 83, 84, 87, 88, 89, 91, 104, 105, 107, 110, 114, 115, 122, 123, 129
地域学習(郷土学習) 13, 15, 17, 20, 22, 55, 76-8, 97
調査(研究) 7, 11-13, 15, 16, 20, 21, 32, 35-37, 42, 45, 50, 51, 64, 66, 67, 69, 75, 78, 82, 84-90, 97, 99, 106, 123-125, 127-129, 132

展示（陳列）　5, 10, 12, 13, 15, 17-19, 21-23, 26, 27, 31-36, 38, 39-50, 54-59, 63, 66, 74, 75, 82, 84, 87-89, 91-94, 96, 98-100, 105, 107, 108, 110, 123, 125, 126, 128, 131, 132
統合（統廃合）　4, 5, 42, 45, 83, 87, 122
廃棄　4, 83, 88, 101, 108, 122, 126-129, 132, 133
分類　5, 18, 72, 73, 85, 86, 92, 114, 115, 116, 118, 122
閉校（廃校）　85, 87, 108, 111, 124-126, 127
保存（保管）　5, 6, 13, 14, 19, 23, 24, 26, 27, 30, 31, 34-37, 45, 50, 54, 57, 60, 70-72, 74, 85-88, 90, 104-107, 109, 110-114, 122, 124, 126, 127, 129, 132, 133

〈組織・人〉

学校運営協議会（コミュニティ・スクール）　24, 95, 107
学芸員　12, 16, 21, 25, 26, 27, 32, 37, 42, 44, 45, 66, 72-75, 82-83, 101, 104, 108-111, 114, 129
学生　49
教育委員会　22, 82, 84, 90, 107, 112, 122, 127, 128
教員（教職員）　5-7, 13, 15-18, 20, 24, 26, 32, 37, 48, 51, 56, 59, 61, 63, 65, 67, 69, 71, 73-75, 78, 79, 90, 91, 97, 104-106, 110, 111, 128, 129
研究者　12, 36, 44, 78, 107, 114
児童・生徒（小学生，中学生，高校生）　4, 5, 10, 11, 14-18, 20-22, 24, 27, 31-33, 36, 49, 54, 55, 57, 64, 65, 67, 69-75, 77-79, 80, 81, 85, 88, 91, 94, 97, 104, 105, 110, 115, 118, 129
卒業生　4, 5, 7, 8, 10, 11, 13, 20, 24, 49, 55, 76, 109
地域の方々（地域住民）　4, 7, 11, 13, 20, 24, 27, 104, 105, 107, 109
ボランティア　24, 69
PTA　55, 115, 119

〈場〉

学校博物館（学校内歴史資料室，郷土資料室，郷土室，学校記念資料室，資料室）　5, 10, 12-30, 31, 34, 43, 44, 49, 50, 54-59, 61, 74, 75, 85, 86
高等学校（高校）　10, 11, 28, 29, 32-36, 40, 47, 50, 61, 80, 81, 116, 123, 128
小学校　5, 11, 15, 20, 22-24, 28, 29, 34, 38, 42, 44, 45, 47, 54, 55, 59-62, 64, 66, 68, 70, 72, 74, 76-79, 84, 85, 89, 91, 97, 108, 110, 116, 122, 123, 124, 126-129
資料館　28, 29, 30, 32, 34, 36, 44, 46-51, 66, 74, 82, 87, 107, 110, 113, 123, 125
史料館　11, 26, 29
大学　5, 36, 40, 48-51, 68, 78, 85, 111, 122, 123, 132
中学校　11, 26, 28, 29, 30, 36, 40, 55, 61, 83, 84, 116, 122, 123, 128
博物館（地域博物館）　5, 12, 13, 18, 20, 25-27, 31-38, 40-47, 54-55, 57, 58, 63, 66, 71, 73-76, 82-85, 87, 101, 106-110, 113, 114, 125, 127-129, 131-133
文書館（公文書館）　48, 50, 90

【写真掲載や調査にご協力いただいた機関・方々】

岩科学校
開明学校
株式会社山口書店
関西大学年史編纂室
岐阜県博物館
旧開智学校校舎
旧和学校校舎（東御市和記念館）
九州国立博物館
旧中込学校
旧見付学校
京都市考古資料館
京都市立岩倉北小学校
京都市学校歴史博物館
京都市立北白川小学校
京都市立伏見板橋小学校
京都市立伏見板橋小学校学校運営協議会
京都大学大学文書館
京都府京都文化博物館
京都府立網野高等学校
京都府立鴨沂高等学校
京都府立鳥羽高等学校
京都府立峰山高等学校
京丹後市
近畿大学不倒館
クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス
国立国会図書館
御坊市立御坊小学校
銅駝史料館

名古屋市博物館
南丹市立文化博物館
浜松市博物館
平田健
福井県教育博物館
福岡県立糸島高等学校
福岡県立福岡中央高等学校
福岡県立福岡中央高等学校同窓会香蘭会
福岡女学院資料室
ふるさとの良さを活かしたまちづくりを進める会
山形県立博物館教育資料館
横浜市歴史博物館
龍谷大学付属平安高等学校・中学校
和歌山県立紀伊風土記の丘
和歌山大学図書館

（五十音順　敬称略）

「こんなところにありませんか?」

- ☐ 学校博物館（学校内歴史資料室など）
- ☐ 社会科等の教科・教材準備室
- ☐ 教室
- ☐ 校長室
- ☐ 職員室
- ☐ 部室
- ☐ 廊下ないし廊下のショーケース
- ☐ 収蔵庫
- ☐ そのほか（PTA室，応接室，作法室など）

MEMO

【編者】

村野正景（学校資料研究会副代表/京都府京都文化博物館/金沢大学国際文化資源学研究センター）

和崎光太郎（学校資料研究会代表/京都市学校歴史博物館）

【会員執筆者】

井尻智道（南丹市立文化博物館）

一色範子（佛教大学教育学部生）

小山元孝（兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科博士後期課程/京丹後市役所）

鈴木康二（公益財団法人滋賀県文化財保護協会）

冨岡勝（近畿大学教職教育部）

八田友和（クラーク記念国際高等学校）

藤森寛志（和歌山県立紀伊風土記の丘）

村野正景（上記）

和崎光太郎（上記）

【ゲスト執筆者】

羽毛田智幸（横浜市歴史博物館）

【連絡先】

学校資料研究会事務局

〒577-8502

大阪府東大阪市小若江3-4-1

近畿大学教職教育部

冨岡勝研究室内

e-mail: gakkoshiryo@gmail.com

URL: gakkoshiryo.jimdofree.com

字：
山本良来（京都府立鴨沂高等学校）

表紙絵：
西村茉紘（京都府立鴨沂高等学校）

みんなで活かせる！ 学校資料
学校資料活用ハンドブック

発行日　2019年3月1日

編　者　村野正景・和崎光太郎

発　行　京都市学校歴史博物館

〒600-8044
京都市下京区御幸町通仏光寺下ル橘町437
TEL 075-344-1305（水曜休館）
http://kyo-gakurehaku.jp/

印　刷　株式会社スイッチ・ティフ

非売品

©2019 Kyoto Municipal Museum of School History
本書のコピー，スキャン，デジタル化などの無断複製は著作権法上での除外を除き禁じられています。